

# 日本への回帰

第16集

やまとは

くにの

まほろば

たたなづく

あをがき

やまごもれる

やまとし

うるはし



大学教官有志協議会  
社団法人 国民文化研究会

編

日本への回帰  
(第十六集)

—第二十五回学生青年合宿教室(雲仙)の記録より—



二月七日が「北方領土の日」ときまって、今年から政府主催で実施されることになった。根拠は一八五五年（安政二年）日露通好条約締結の日に因んだものであるが、この条約は択捉、得撫間を国境と定め、樺太を両国の雑居地と定めたものであった。従って、この日の設定は、得撫以北の島々を放棄することにつながり、むしろ一八七五年（明治八年）五月七日の樺太、千島交換条約締結の日の方が根拠としては正しいのではないかといふ異論も成り立つ。その他終戦直後、ソビエト軍が不法侵入した九月三日を返還要求の記念日とする説も有力で、自民党はこの日を「北方領土実効支配に抗議する日」と決定したと伝えられる。日時の設定に異論を残したまゝの発足とはいへ、「北方」に対する国民感情が一つの方向を与へられたことは評価してよいであらう。事実、なりふりかまはぬソビエトの膨張主義こそは世界の政情不安の根源であり、その軍事力の尖端が根室の鼻先に迫ってゐるといふ事実には、何人といへども目をふさぐことはできなくなった。政府サイドでこの日が決定されてから、ソビエトはノサップ岬のすぐ沖合に、艦尾に大型ヘリコプターを搭載した二、〇〇〇噸級の砕氷艦を碇泊させ、露骨な威圧を加へて来てゐるし、プラウダは連日、反日キャンペーンを続けてゐる。その記事の中に「南千島はロシア領」といふ日本人学者の論文の引用

があるといふ。戦後三十六年「島よ帰れ」の叫びも風化して、「島よりサカナ」といふ声が大きくなつてゐるともいはれる。問題は主権回復への国民的意志の結集であり、教育によるその意志の持続継承にこそすべてがかけられてゐるといふべきであらう。

人権外交の名のもとにソビエトに譲歩を重ね、屈辱的なイラン人質事件を解決できぬまゝに任期を終ったカーターに代つて、アメリカ国民はレーガンを選んだ。一月二十日、レーガンはその就任演説の末尾で、アーリントン国立墓地を指さし、第一次大戦のとき西部戦線で戦死してそこに眠る一人の無名の青年兵士の遺書にふれて次のやうに述べた。

△彼の遺体から日記が見つかったといふ、見返しには「私の誓ひ」が書かれ、その下には次のことばが記されてゐた。「米国はこの戦争に勝たねばならない。このため、私は働き、儉約し、身を捧げ、耐へ抜き、そしてこの戦争のすべてが私の肩にかかつてゐるかのやうに喜んで戦ひ、最善を尽くす」と。▽

レーガンはこの引用に続けて、国民が一体となり、神の加護があれば、当面の問題は解決可能であると訴へ、「さう信じようではないか。われわれは米国人なのだから」といふ感動深い言葉で演説を結んでゐる。こゝにはリンカーンの「ゲティスバーグ演説」を彷彿させる戦死者への憶念の情意があり、アメリカの再生へかける悲願が胸にひびいて来る。毎年八月十五日がめぐつて来る度にくりかへされる靖国違憲論争、閣僚が参拝する時に「一私人として」と断はらなければならぬわが

国との相違を今更のやうに痛感させられる。

青少年非行で、刑法犯に当るものの数が、昨年度は十六万六千人を超えた。その原因としては、先進工業国に共通な、社会的目標の喪失、核家族化の進行、大人の世界の価値観の混乱等々が数へられるであらう。しかし、最大の原因は、教育界や思想界における教条的な左翼思想の支配にある。中国における「江青・林彪集団」（いはゆる「四人組」）の裁判にしろ、ポーランド労働者のストライキにしろ、共産主義政権の実体はあますところなく世界の衆目の前にさらされてゐるのに、教師たちはなぜこの事実の前に目をふさいで、革命への幻想を捨て切れないのであらう。「抵抗こそは最高の美德」と呼号する教師たちの下から「非行」が出て来るのは当然の帰結ではないであらうか。「進歩的」を自認する大新聞が「偏見多い社会科学教科書」「目に余る社会主義色」（朝日・五六・一・一二）と書かざるを得ないところまで、病根は深まってゐるのだ。

今回は外来講師として、元外務事務次官法眼晋作先生、文芸評論家福田恆存先生の御出講があり、それぞれの御専門の領域からお心のこもった意味深いお話をうかがふことができた。その要旨の掲載をお許し頂いたことについて厚く御礼申し上げる次第である。合宿も二十五回を重ね、感慨一しほ深いものがある。回顧と展望の年といふべきであらう。

昭和五十六年二月七日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき……………	1
一、日本への回帰……………	
学問・人生・祖国……………	福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎…………… 5
現代人の思想——風化現象からの脱却のために——	
福岡教育大学教授 山田輝彦…………… 31	
今こそ日本への回帰を……………	国民文化研究会理事長 小田村寅二郎…………… 61
一、講義……………	
世界の平和に貢献する道——国際情勢と日本の対応——	
元外務次官・元駐ソ連公使参事官 法眼晋作…………… 87	
人間の生き方・物の考へ方……………	
文芸評論家・現代演劇協会理事長 福田恆存…………… 123	
一、古典と短歌……………	



「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」——輪読のしをりとして——

高千穂商科大学教授 高木尚一……………155

短歌創作について……………国民研究会副理事長 宝辺正久……………177

「断然自ら任ぜずんば、何ぞ後世に待つことを得んや」……………

九州大学医学部四年 長澤一成……………199

一、青年研究発表

教壇に立って思ふこと……………福岡県立豊津高校教諭 堀田真澄……………225

心をはたらかせて……………福岡県中間市立中間南小学校教諭 谷口敏子……………235

瀬上安正先生のこと……………(株)千代田コンサルタント設計部 松田信一郎……………245

一年の歩み……………九州大学法学部三年 金子光彦……………255

合宿教室のあらまし……………熊本大学医学部四年 福田誠……………271

合宿詠草……………

あとがき……………320

〈国民文化研究会図書目録〉



■ 日本への回帰



学問・人生・祖国

福岡県立修猷館高校教諭

小柳陽太郎



油山遠望（福岡市内より）

はじめに

学問のよろこび―「論語」

実体と概念―「美を求める心」

生命体としての「日本」

吉田松陰と山県太華

「信じる」といふこと

天皇について

は じ め に

本題にはいります前に、この合宿にとりくんでいたゞく姿勢について、少しだけ申し上げておきませう。この合宿ではスリッパを脱いで部屋にはいる時に、そのスリッパを外側をむけて揃へておくやうにお互ひ注意しあふのがしきたりになってゐます。そんなことを言へば随分固苦しいことを言ふのだな、とお考への方もいらっしやるでせうが、私たちは何もむづかしい礼儀作法を言つてゐるのではありません。たゞ常に相手の身になつてものを考へていかう。そのやうに自分の心を整へていかうといふことから、そのやうなしきたりが生まれてきてゐるので

す。

開会式の折に志賀運営委員長が、この合宿では、お互ひに語りあふ言葉にしても、手に取つて読んでゆく文章にしても、一つ一つの言葉を出来るだけ丁寧な、大切に扱つていかうではないかと申しましたが、実はそのことと、このスリッパを向かう向きに揃へてぬぐといふことは全く同じなのです。相手の心に、人の言葉に、心をこまやかに配つて生きてゆくといふ、さういふ大切な心のもち方が、今の世の中では大麥粗末に扱はれてゐる。その一点がはつきりしてくれば、現代の思想問題はすべて氷解してゆくはずだ。私たちは、さういふ気持ちで合宿を

當んでゐるのです。

寺田寅彦が弟子に与へた手紙の中で、万葉集のことにふれて「全く万葉集はよめばよむ程面白き本、国民みな此れを読めば思想問題などは起るまじく候。」と言つてをります。このことも結局同じなので、例へば、当時流行を極めてゐたマルキシズムにしても、それが犯した誤りは結局は「人の心のわからない思想」といふのにつきると思ふ。とすれば万葉集の中に脈うつてゐる私たち祖先のあの温かな心が理解出来れば、マルキシズムの誤り、観念だけを至上のものとして、人の心のこまやかな動きを無視するといふ誤りは、直ちに改められていくはずだ。寺田寅彦はそのことを言つたと思ふのです。このことが思想問題すべての根幹であるといふことを、これからいろいろな講義などおききになる前に、しっかり心にとめておいていたゞきたいと思ひます。

### 学問のよろこび―『論語』

さて演題にかゝりました「学問・人生・祖国」といふのは、すでに御気付きの方も多いと存じますが、この合宿教室の案内書の表紙に書かれてゐた「学問と人生と祖国を語りあはう」といふ言葉を使はせていたゞいたのです。ではそこでいふ学問とは、人生とは、祖国とはそれぞれ





まづ学問といふことですが、ここで問題になる学問とは、単に大学で与へられ、点数で評価されるやうな学問とは違ふ。もっと根源にさかのぼった意味での学問です。そのやうな学問がいま私達の人生の中でどのやうな位置を占めてゐるか、そのことをまづ考へていたゞきたいのです。さう考へてみますとすぐに浮んでくるのは、あまりにも有名なことばですが、論語の一番最初に出てくる次の一節でせう。

「学ビテ時ニ之ヲ習フ、亦説ヨロコバシカラズヤ」

意味は特別申し上げるまでもないかと思ひますが、「時に」は「時あらば常に」または「折

れ何か。そのことについて若干お話を申し上げたいと思ひますが、その前に、実はこの三つのものは決してバラバラのものではない。それぞれがわかちがたく結びついてゐるものだといふことを考へていたゞきたいのです。学問にしても、人生のあり方にしても、祖国を問題にする場合にも、現在どこかに大きな間違ひがひそんでゐると思はれますが、その間違ひの根本は、まづ第一にこの三つがバラバラに扱はれてゐるところにあるのではないか。私にはさう思はれてなりません。

にふれて」の意、先人の道を学んで、折にふれてそれをくりかへし復習して自分の体験の中にとかしこんでゆく。それはまた何と喜ばしいことではないか、といふことでせう。解釈してしまへばそれだけのことですが、大切なことはそこに示されたよろこびの深さです。論語には、「十室ノ邑、必ズ忠信丘ガゴトキモノアラン、丘ノ学ヲ好ムニシカザルナリ」といふ言葉もある。十軒ぐらゐのごく小さな部落にも私のやうにまごころをこめて生きてゆく人が必ずある筈だ。だから私の真心といふものは決して人に威張れるやうなものではない。だが私ほど学問の好きなものはゐないだらう——威張ることなどは全く縁のない孔子ですが、ここでは率直に、胸を張って学問へのよろこびを語ってゐます。この学問に対するよろこびの深さを理解してはじめて、私達は孔子の心にふれることが出来るのです。この喜びの深さがわからなければ、学問の深さはわからない。さう思ってみれば論語といふ一冊の書物は、端的に言へば学問のよろこびを綴った書物であるといつても過言ではないと思ふのです。

有名な「吾、十有五ニシテ学ニ志ス」にしても同じなので、ここで孔子が言はうとしたことは、自分は十五歳にして先人とともに同じ道を歩くといふ喜びを知ったし、その喜びが、人生における最大の価値であることをはっきりと心に決めたといふことでせう。「志」といふものの背景には、そのやうに心豊かな世界がある。私にはさう思はれてなりません。論語には、また「学べバ則チ固ナラズ」といふ言葉もございます。固といふのは固苦しく、狭苦しいといふ

こと、何かに縛りつけられたやうな心の状態でせう。ところが学問をつみ重ねてゆくと、その状態から解き放たれて、心が非常に緩やかに、柔らかになってゆく、人生の微妙な味はひがわかるやうになってゆく。それが「学べバ則チ固ナラズ」といふことでせう。この、ものごとを概念的に把握したり、固定的に考へたりするのではなく、もっとみずみずしい人生が私たちの心の中に感じられてくる。それが学問の果すべき役割でなければならぬのです。ところが現在日本で行はれてゐる学問はむしろ逆に、学問をすればするほど人の心からはうるほひが失はれ、概念が先行するやうになってゆくやうです。とすれば、同じ学問といふ言葉に使はれてゐますが、孔子の学問と現在大学で行はれてゐる学問との間には決定的な違ひがあるのでなからうか。一体何故こんなことになったのか。その原因を明らかにして、学問を、そのあるべき姿にかへしてゆくこと、それが、皆さまがこの合宿でとりくんでいたゞく大切なポイントだと思ふのです。

### 実体と概念―『美を求める心』

ではそのことを更に深めてゆく意味で、次に小林秀雄先生の『美を求める心』の一節を読んでみませう。そこで小林先生は、人々は見るとか聴くとかいふ事を実に簡単に考へてゐるやう

だが、それは誤りで、「見ることも聴くことも、考へることと同じやうに、難かしい。努力を要する仕事」だと云はれるのです。例へば、巨人の川上選手など、打撃の調子のいい時には、球が眼の前で止まってみえるといふ。そのやうになるためには、「見る」ことについてどんな大きな努力と練習が必要だったかといふやうな話が書かれてゐて、そのあとに、次の文章が出てくるのです。

「例へば、諸君が野原を歩いてゐて、一輪の美しい花の咲いてゐるのを見たとする。見ると、それは菫の花だとわかる。何だ、菫の花か、と思つた瞬間に、諸君はもう花の形も色も見るのを止めるでせう。」

「花の形も色も見るのを止める」とはどういふことか。先生は次のやうに言はれます。

「諸君は心の中でお喋りをしたのです。菫の花といふ言葉が、諸君の心のうちに這入つて来れば、諸君は、もう眼を閉ぢるのです。それほど、黙つて物を見るといふ事は難しいことです。」

「菫の花といふ言葉が心のうちに這入つてくる」といふのは、そこに咲いてゐる花が菫だとわかるといふこと、少し難しく言へば、そこに咲いてゐる花といふ実体を、「菫の花」といふ概念でおきかへるといふことです。そのやうに理解してしまふと、ああさうかと考へそれで安心して、それ以上その花を見ようとはしない。すなはち「眼を閉ぢる」やうになるといはれる

のです。それほど「黙って物を見る」といふことは難しい。「黙って」といふのは、概念に煩はされないで、言葉に邪魔されないで、実体そのものに目を注ぐといふことでせう。それは大変難しい。

「董の花だと解るといふ事は、花の姿や色の美しい感じを言葉で置き換へて了ふことです。言葉の邪魔の這入らぬ花の美しい感じを、そのまゝ持ち続け、花を黙って見続けてゐれば、花は諸君に嘗て見た事もなかつた様な美しさを、それこそ限りなく明かすでせう。」

あらためて説明する必要がありますまい。特に、「言葉の邪魔の這入らぬ」からあとの文章は美しい。さらにこの言葉をうけて、小林先生は、この『美を求める心』といふ一文の最後に「一輪の花の美しさをよくよく感ずるといふ事は難しい事だ。仮にそれは易しい事だとしても、人間の美しさ、立派さを感じる事は易しい事ではありますまい。」

と書いてをられます。一輪の花の美しさを感じることも難しいが、であれば人間の美しさ、立派さを感じることはさらに難しいはずではないか。

また論語にもどりますが、有名な「朝ニ道ヲ聞カバタニ死ストモ可ナリ」といふ言葉がある。道を聞くといふのも、単に人倫の道といふものを概念的に理解することではありません。深く心を寄せる先人の生き方を心をこめて偲ぶといふいとなみを通して、道といふものを理解してゆくといふことでせう。そのことを孔子は「道を聞く」といふ。とすれば「道を聞く」

とは、人間の美しさを感じてはじめて可能なことではないか。すなはち孔子は人間の美しさを感じる事が出来れば、「死ストモ可ナリ」と言っているのです。それほど人間の美しさを感じることは難しいし、そのためにはそれほど心を砕かなければならない。その心を砕くこと、それが、孔子にとっての学問だったのです。

### 生命体としての「日本」

もう一つ小林先生の文章を読んでおきませう。これは最近出版された『本居宣長』の一節です。

「自分の学問では、死物は扱はない。扱ふものは人の生きた心だけである。従って学問の努力の中心部では、生きた心が生きた心に直かに觸れてこれを知るといふ事しか起らない」

「死物」とは先程の言葉でいへば概念といふことでせう。「自分の学問で扱ふものは、人の生きた心だけ」だと言はれるのです。「だけ」といふのは、非常に力強い断定ですね。したがって学問といへば、その裾野は大きく拡がってゐませうが、その学問の努力の中心部では、「生きた心が生きた心に直かに觸れてこれを知るといふ事しか起らない。」この「しか」といふことばも大切です。このきっぱりした覚悟の中に小林先生の学問があるのです。さらに本居宣

長には次のやうな言葉もあります。

「『さかしだちて物を説く』人は……物を避け、ひたすら物と物との関係を目指す。個々の物は、目に見えぬ論理の糸によつて、互に結ばれ、全体的秩序のうちに組み込まれるから、先づ物は、物たる事を止めて、推論の為の支点と化する必要がある。なるほど物の名はあるが、実名ではない。或る物と自餘の物との混同を避ける為に附された記号、さういふ段階まで下落した仮の名に過ぎない。」

むづかしい言葉ですね。しかし非常に大切なことが述べられてゐると思ひますので、じっくり考へてみて下さい。例へば現在大学で行はれてゐる学問の世界で「日本」といふ国の名前はたとへとりあげられても、それは他の国との混同を避けるための符牒にすぎないのであつて、かけがへのない生命体になづけたものとしての日本といふものは、大学の講義の中には殆んど登場しないと思ふ。この世に一つしかないもの、他の何物にも入れかへるきかない一つのいのちの表現として日本といふ言葉が使はれることはまづないといつても差支へないのではないか。それを小林先生は「或る物と自餘の物との混同を避ける為」の記号、「さういふ段階まで下落した仮の名」だけが用ひられ、「実の名」が用ひられてゐないと言はれるのです。誰でも自分が日本の国に生をうけた日本人であることを否定はしない。しかしたゞそれだけであつて、日本といふ国の生命そのものにつきあはうとはしないのです。「物は物たることを止めて、」単な

る「推論の支点」となってしまう。言葉をかへていへば、その「推論の支点」になったものだけが安心して学問の世界で使へるのです。それだけが学問の世界に登場する資格を得るのです。「物」が「物」である間は、学問の対象にはならないのです。だから人々は「物を避け、ひたすら、物と物との関係を目指す」のです。それが学問といふことになってゐるのです。従つて喜びや悲しみをとにもする、さういふ日本の国の生きた姿は、主観的といふ一語でもつて学問の世界から排除されることになつてしまふのです。

### 吉田松陰と山県太華

このやうに実体そのものにつきあふことなく、概念や理論体系でものを考へるといふ考へ方、それは現代に始つたのではなく、何時の時代にも、人々はそのやうな、いはゞ畏におちこんでしまふ、さういふ危険性を常に含んでゐるものなのです。ここでは幕末の吉田松陰と当時萩の藩学明倫館の学頭山県太華とのやりとりの中にこの問題を考へてみたいと思ひます。当時吉田松陰は萩の野山獄にあって囚人を相手に孟子の講義をする。その講義を記録したのが『講孟餘話』といふ文章です。その一番初めのところで松陰は「経書を読むの第一義は聖賢に阿おもねらぬこと要かゝなり」と言つてをります。中国の古典を読む際に、一番大切なことは、聖賢を尊ぶ



あまり、それにおもねってはいけないといふことだといふのです。勿論そのことは何も古典を最初から批判的な冷い目で見よといふことではないので、私達はあくまでも日本人なのだから、日本人としての主体性を堅持して中国の古典に接すべきだといふことでせう。さういふ文章のあとで松陰は日本と中国の国柄の相違について次のやうに述べてゐます。

「漢土に在りては君道自ら別なり。大抵聰明睿智億兆の上に傑出する者、其の君長となるを道とす。故に堯舜は其の位を他人に譲り、湯武は其の主を放伐すれども、聖人に害なしとす。」  
 中国と日本においては君臣の道は自ら異ってくる。中国では人民の上に傑出したすぐれた人物がゐれば、その人が主君となるのが道なのだ。従つて堯舜はその位を平和裡に次の人に譲り、殷の湯王、周の武王は武力でもって前の帝王を倒して位についたけれども、それはそれであつた。聖人として認められてゐる。しかし日本は違ふ。

「我が邦は上、天朝より下列藩に至るまで、千萬世世襲して絶えざること中々漢土などの比すべきに非ず。」

日本ではすべて永久に世襲によつて君主が決められてゆく。それに比すれば

「漢土の臣は縦へば半季渡りの奴婢の如し。其の主の善悪を択んで転移すること固より其の所なり」

といふことになる。すなはち中国の臣下は半季々々に契約を更新して渡り歩く召使ひのやう

なものではないか。とすればいい主人を扱んでそちらに移ってゆくのは彼らとしては当然であらう。ところが、

「我が邦の臣は譜第の臣なれば主人と死生休戚を同じうし、死に至ると雖も主を棄てて去るべきの道絶えてなし」

日本では先祖代々から伝はってきた臣下なので、主人と休戚、すなはち喜びや悲しみを同じうして死に至る迄、自分の主人を捨て去るといふことは絶対にあり得ないのだ。松陰は中国と日本との国柄の違いについてこのやうに述べてをります。

さて松陰はこの『講孟餘話』を先程述べた山県太華、この人は藩学の校長ですから、今で言へば官立大学の学長のやうな地位にあつたのですが、その太華に見せて、批評を乞ふわけです。その時太華は次のやうに申します。

「道は天地の間一理にして、其の大原は天より出づ、我と人との差なく我が国と他の国の別なし」

道は天地の間、一つの道理で貫かれてゐるものであって、それは天から生れたもの、自分と人との差もないし、日本、中国の差もない筈だ。——太華はさう答へます。道といふのは、普遍的なもので日本だけに通用する道があるなどといふのはおかしいではないか。そんなことを考へることこそ独善的ではないか——日本より、人類、世界といふ観点に立つべきだといふ現

代の通説がそのまゝ聞えてくるやうです。

それに対して松陰は次のやうに反駁する。

「道は天下公共の道にして同なり」

道といふのはたしかにあなたといふ通り、天下公共の道であらう。しかし人生にはその「同」なる世界と、もう一つ「独」なる世界がある。それを松陰は、

「国体は一国の体にして所謂独なり」

といふのです。すなはち一国の国柄といふものは、それぞれの国独自のもので、その独自の世界、端的に言へば「独」の世界にこそ、他と区別されるかけがへのない「いのち」が宿るのだ。

「君臣、父子、夫婦、長幼、朋友五者天下の同なり。皇朝君臣の義、萬国に卓越する如きは一国の独なり」

さまざまな人間関係をどのやうに生きていけばいいかといふことは、一応世界中すべて同じだと言っているかもしれない。しかし日本の国において、君臣の間柄が他のいかなる国とも違った。断然優れた伝統をもってゐるといふことは、これまた疑ひやうのない事実であつて、之は日本の国だけに許された「独」の世界といふべきであらう。さういう立場に立って松陰は山県太華にはげしく迫るのです。

「然るに一老先生（山県太華）の説の如く、道は天地の間一理にして其の大原は天より出づ。我と人との差なく、我が国と他の国との別なしといひて、皇国の君臣を漢土の君臣と同一に論ずるは、余が萬々服せざる所なり。」

### 「信じる」といふこと

このやうな松陰と太華の論争は、松陰全集の『講孟餘話』の附録の部分に数多く収められてゐますが、もう一つだけ御紹介しておきませう。

ここで松陰は『講孟餘話』の本文で、日本の国柄について次のやうに述べてをります。

「此の大八洲（日本）は、天日（天照大神と考へていいでせう）の開き給へる所にして、日嗣（歴代の天皇方）の永く守り給へるものなり。故に億兆の人（日本の国民）、宜しく、日嗣と休戚（喜びと悲しみ）を同じうして復た他念あるべからず」

日本においては、国民はたゞひたすら天皇の御気持ちになつて生きてゆくべきだといふことでせう。これに対する太華の批評は次の通りです。

「天日とは太陽といへるにや。又は太祖照臨の徳を以て太陽を指していはば、」

天日といふのは、太陽のことをいふのか。又は、天皇の御祖先がこの世に姿を現はされたそ

の徳が太陽のやうだといふのか。さう問題をなげかけたあとで、太華は松陰のいふところ、まったく荒唐無稽の論だとして次のやうに申します。

「太陽は火精にて、其の大、地球に倍すること幾許を知らず。其の高き、地球を去ること幾万里なるを知らず。昼夜、外天を一周して、遍く世界万国を照らす。これを以て独り我が一国の祖宗といふこと、極めて大怪事ならずや。(中略)外国の人をして是れを聞かしめば、必ず是れを信ぜず。これは神道者、又は国学者流、近世水府一流の学者などの主張する所にして、人の信じがたきことは学者強ひてこれを言はざる可ならん」

読んでいたゞければおわかりになると思ひますが、要するに、太陽をもって日本の国の皇室の祖先だなどといふ馬鹿馬鹿しいことを信じてゐるのは神道者、国学者、或は近ごろ喧しい水戸学一派など、偏狭な国粹主義者だけであつて、もしあなたが学問の道を歩むつもりならさういふ理にあはないことは口にしないがいい、と松陰をたしなめるやうな言ひ方をするのです。これに対する松陰の言葉は、

「皇国の道悉く神代に原づく。則ち此の卷(日本書紀神代卷)は臣子の宜しく信奉すべき所なり。其の疑はしきものに至りては闕如して論ぜざるこそ、慎みの至りなり」

日本の道はすべて神代に基づくものだから、私たちはたゞここに書かれた事を信じる以外にはない。たゞどうしても疑はしいと思はれるものに対しては、それはそつとしておくのが、慎

しみの態度といふべきであらう。——松陰はさう答へます。

この二人のやりとりをどうお考へになりますか。たしかに太華のいふ通り、松陰の信じるところは道理にあはない。さうお考への方も多いと思ふ。現代の常識も当然太華に賛成するでせう。学者先生もすべて太華と同じ、所謂合理主義的な考へで割り切つてゐるのが現状です。だが果してそれでいいのか。松陰の言ふところを單純に荒唐無稽といつてすましていいのか。そこには現代の学問が直面してゐる実に重大な問題がひそんでゐると思ふ。その点、松陰の最後の言葉「其の疑はしきものに至りては闕如して論ぜざるこそ、慎みの至りなり」といふ個所は重大です。

たしかに理屈は太華のいふ通りだらう。しかし、そのとき松陰の心の中に描かれてゐた神話の世界は、松陰にとつて疑ひやうのない事実——體驗的な事実だったので。それは客観性があるとかないとかいふ問題以前のことなのです。先程の董の花の例で申しますと、その一輪の花の美しさが見る人の心にしっかりとけとめられてゐたやうに、松陰の目には、この神話の世界の美しさははっきり映つてゐた。それは松陰が日本の歴史を、神話をこの上もなく大切にいとほしんだからでせう。だが松陰はここで自分の目に見えてゐる以上、見えないのはおかしいではないかといふやうな形で、論争を展開しようとはしなかつた。さうしてそのことは一人一人の胸にそつとしておく以外にはないと言つたのです。それが「闕如して論ぜず」といふこ

とです。そしてそのことが「慎みの至り」だと松陰はいふのです。松陰にとって神話の世界は「信じる」しかなかった。その信じ得た神話が松陰の中で生きてゐた。とすれば私たちがこの二人の論争を読むときに心すべきことは、そのどちらが正しかったといふ審判を下すといふのではなく、その松陰が信じた神話の世界を大切にしていゆく以外にはないではないか。そこに命と命がふれあふ世界が生れてくる。それが小林先生のいはれる「学問の努力の中心部」ではないか。

だが人々はさうは考へない。例へば松陰の研究者として有名な奈良本辰也氏もこの論争をとりあげてゐますが、結局太華は偉大な合理主義者であり、松陰は理性を超越した、熱烈なる非合理主義者であるといふ。すなはち小林先生の言をかりれば、太華も松陰も、単なる「推論のための支点」となつてしまつてゐる。そして合理主義者と非合理主義者といふ二つの概念をつきはせてさまざま論理が操られてゆく。それが現代の学問になつてしまつてゐるのです。だが本当の学問とはその時の松陰の心に描かれた神話のすがたを、私達の心をフルに働かせて偲ぶことではないか。そして生きた心を概念に入れかへるのではなく、生きたまゝに私たちの心にうけとめること、それがあべき学問の姿ではないか。最初に申し上げた孔子のいふ学問のよろこびもそこに生れてくるのだし、その信じる心なしには、孔子の学問もまた、あり得なかつたと思ふのです。

## 天皇について

この松陰のいふ「独なる世界」、「いのちのちがふれあふことによってはじめて理解出来る世界」、それを無視して、単に合理的に考へ「同なる世界」から一步も出ようとしないために、現代の思想がどんなに大きな誤りを生んでゐるか、最後に「祖国」を思ふその核心となるべき天皇の問題を中心に、少しお話ししておきませう。

いふまでもなく、天皇の御存在といふのは極めて「独」なる世界に属するものでせう。しかし、人々は専らそれを「同」なる世界で扱はうとする。例へば天皇制は君主制の一つである。だが君主制は、フランス革命以後、特に第一次大戦以後、次々に姿を消してゐる。従つて天皇制も遠からず消滅するであらうといふ論、或は中国の君臣関係と日本のそれを同一視して東洋的専制などといふ言葉で概括する論、その他さまざまです。すべて日本にしか存在しない「天皇」といふものゝ実体を自分の目で見ようとはしないで、それを既成の概念に入れかへてしまはうとするのです。

例へば東洋的専制といふことをいふ人はいつも、聖徳太子の十七条憲法の「詔を承りては必ず謹め、君をば則ち天とし臣をば則ち地とす」といふ言葉を引用する。そしてこれは中国伝来



の思想であり、中国における専制政治を日本に適用したといふのです。たしかに中国の春秋時代の作といはれてゐる『管子』といふ書物に、これとよく似た言葉が出てくる。しかしそれは一見似てゐるといふだけで、その内容には大變な違ひがあるのです。

『管子』の文章は次の通りです。

「群臣を制して生殺を擅はしりたまにするは主の分なり。令を懸け制を仰ぐは臣の分なり」

そのあと同じやうな言葉が続きますが、最後に、

「故に君臣相與に高下處を異にするは天と地との如し、其の分畫の同じからざるは白と黒の如し」

といふ言葉が出てまゐります。この最後の「君臣相與に」以下の部分が十七条憲法とよく似てゐる。従つてその両者を一つの括弧にくくつてしまふのですが、それでいいのか。実は十七条憲法は次のやうに続くのです。

「君をば則ち天とし臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて四時順行し、萬氣通ふことを得、地、天を覆はむと欲するときは則ち壊やぶれることを致さむのみ」

たしかに両者とも君臣を天地になぞらへてゐます。しかし全体を包んでゐる情感といふ点から見ると両者は全く違ふ。管子の「群臣を制して生殺を擅にするは主の分なり」といふ血なまぐさい感じ、或は「分畫の同じからざるは白と黒との如し」といふ冷酷な、つっぱねたやうな

表現は十七条憲法の中にはどうしても見出すことは出来ません。「天覆ひ地載せて四時順行し萬氣通ふことを得」といふ表現は実に暖かです。正しく安定した天地の秩序の中で春夏秋冬が自然な形でうつり動いてゆく。そこに生きとし生けるもののいのちが芽ぐんでくるのです。この生命的表現と一步道を誤れば直ちに地上から抹殺されるといふやうな峻厳な中国の思想と、その間には天地のひらきがある。たしかに太子は君臣關係を天地になぞらへるといふ着想を、管子をはじめ中国の典籍から学ばれたかもしれない。しかしその言葉を支へる情感の相違は大切です。それに注目しないで、天皇の政治を「東洋的専制」といふ言葉で呼ぶなどは、学問的良心からしても断じて許されないと思ひます。

同じことは明治以後の天皇中心の政治体制を「絶対君主制」といふ言葉で呼ぶやうなやり方にも見られると思ふのです。例へば、現在よく使はれてゐる岩波書店の「広辞苑」といふ辞書によれば、明治以降の天皇制とは「天皇に一切の権力が集中され、天皇に直屬する文武官僚によつてその権力が行使された近代日本の絶対主義的政治機構」であると書かれてゐる。更に「絶対主義」の項には「君主に無制限の権力を付与し、国家は君主の一身に体现されてゐるといふ説、またかやうな政体、この国家形態は、ヨーロッパ十七、八世紀に見られ、なかならずルイ十四世の、「朕は国家なりの統治はその典型」と書かれてゐるのです。この二つをつなげれば結局、天皇とルイ十四世は一緒になつて「絶対君主制」といふ項目の中にはいつてしまふ。た

しかに、普遍的な一つの概念で分類してゆけば、非常にわかり易い。そのため天皇といふ、世界中大々一つしか存在しない政治形態も、大雑把な分類の抽出しにはふり込んでしまへば、それではとするので。小林先生の言葉で言へば、「全体的秩序の中に組み入れ」てしまふとそれで安心する。天皇政治の「実体」につきあはうとはしないで、それがどのやうな抽出しに納まるか、そんなことばかりに関心がむけられてゐる。それが現代の思想状況だと思ふのです。なほここで一つだけ注意していただきたいことがあります。それは今申し上げました、現在の人々の天皇に対する考への一番の大本は、実は、一九三二年、昭和七年に出されたコミンテルン（国際共産主義機構）のテーゼに由来してゐるといふことを心にとめていただきたいのです。そのテーゼの中では、日本共産党が果すべき重要な任務は何かといふことが書かれてゐますが、その第一の目標が「天皇制の転覆」でした。その中で、天皇制については「日本において一八六八年（明治元年）以後に成立した絶対君主制は、その幾多の変化を見たにも拘らず、無制限の権力をその掌中に維持し、勤労階級に対する抑圧及び専制支配のための官僚機構を間断なく作り上げてきた」と書いてある。ここはまづ、天皇といふ言葉は出てこない。それをそのまゝ、絶対君主制と言ひかへてしまふといふ乱暴さです。しかもここに描かれた天皇の姿は、ロシア革命によって打倒されたツァーの姿そのまゝではないか。そしてその天皇制を打倒しようといふ。いはゞ自分で描いた影におびえ、その影に戦をいどんでゐるのです。ところが、ここで重大な

ことは、すでにお気付きかと思ひますが、この三十二年テーゼと先の広辞苑の説明があまりにもよく似てゐるといふことです。「天皇に一切の権力が集中され」といふ広辞苑の説明は、「無制限の権力をその掌中に維持し」といふテーゼの言葉そのまゝですし「天皇に直屬する文武官僚云々」といふことばも、「専制支配のための官僚機構」といふテーゼの発想と直接に結びついてゐます。といふことは、天皇制を打倒せよといふコミンテルンの指令はそのまゝ現在に生きてゐる。といふよりそれが、国民のいはゞ通念とさへなつてゐると言つてもいい。実に恐るべきことだと思ふのです。なほ「天皇制」といふ言葉も実はこの三十二年テーゼではじめて使はれたのです。天皇とは、日本人にとって絶対的な信の対象であつた。それを一つの制度として客觀的に見るといふことは、日本人の氣持が許さなかつた。それを敢へて無視して「天皇制」といふ言葉を用ひた。さらに言へば「天皇制」といふことは、最初から否定すべきものとして、さういふニュアンスで使はれたといふことを知つておいて下さい。

かう考へますと、松陰が、山県太華との論争の過程で提出した天皇問題は、そのまゝ現代の問題ではないか。思想はすべて「同」なる世界の中で作られてゆく。さうして「独」なる世界が完全に無視されてしまふ。といふことは最初に申し上げた小林先生の「董の花」の問題と全く同じなのです。「一輪の美しい花」を「董の花」といふ概念におきかへてしまへば、すなはち「董の花」といふ抽出しに分類してしまへば、安心して、その花を見ようとはしない。天皇

制が絶対君主制の中に分類されてしまへば、人々は天皇そのものの「形も色も見るのを止める」のです。その思想の怠慢といふか、学問の誤りといふか、それを克服しなければ私達の日には何一つ映らないでせう。そのことをしっかりと心にとゞめて、国家の問題、人生の問題にとりくみ、それらのすべてが、一つの問題として皆さんの心にうけとめられたとき、そこに新たないのちが生まれる。その新たないのちの生まれる場所、それがこの雲仙の地である。そのことを心に念じながら、これから四泊五日の合宿を、心をあはせて営んでゆきたいと思ひます。



# 現代人の思想

—風化現象からの脱却のために—

福岡教育大学教授 山田 輝彦



油山観音山門

はじめに

カルチャー・ショック

現代思想の原型

戦後思想の問題点



は  
じ  
め  
に

只今から「現代人の思想」といふ題でお話いたしますが、副題に掲げました「風化現象からの脱却」といふ意味は、必ずしも戦後体験の風化といふ意味ではありません。私はかねがね現代の日本人の思想の活力は歴史上かつてないほど衰弱して来てゐるのではないかといふ危惧の念を持ってをりますが、さういふ現実から脱却するためには、明治以来百数十年の思想史の歩みを、幾つかの資料で勉強し直すことによって、何らかの突破口が見出せるのではないかと考へた末に設定した副題なのです。

昨年の合宿教室でも申したことです、戦後三十五年の歩みの中にも、幾つかの思想の節目があります。私はそれを三つに分けたのですが、その第一は終戦直後から第一次安保闘争までの十五年間で、私はこの時代を「イデオロギー神話の時代」と名づけました。新しい日本を作るためには、共産主義のイデオロギーに沿って行くべきだといふことを、大方の学者も文化人も学生諸君も信じてゐた時代であり、社会主義国は平和勢力であり、資本主義国家は戦争勢力であるといふやうな妄想が支配してゐた時代でした。その次は、第一次安保闘争が挫折に終わってから、四十五年までの十年間で、いはば「イデオロギー相対化の時代」です。この時代は中

国とソビエトといふ本来イデオロギーを同じくする二つの国家が、世界中で最も鋭い敵対関係に入り、神話の崩壊が始まります。池田内閣による所得倍增政策が成功し、国民の大部分が中産階級化して来る。教条的イデオロギーが崩壊して、物質的に豊かになることによって、青年諸君の中に精神的な空虚感が拡がって来た。その典型的な現はれが大学紛争であったと思ひます。これは従来の教条的マルクス主義に対する情念的な反乱といふ性格を持つてゐたのです。そして、この時代のもう一つの大きな出来事は、四十五年十一月の三島事件です。三島さんは平和と民主主義といふスローガンに乗った戦後思想の虚偽に、己れの全存在を賭けて挑み、これと刺しちがへて死んだのです。そして、四十五年から現在までは「イデオロギー崩壊の時代」と言へます。社会主義国家間には戦争はないといふ、従来の社会主義理論は全くの空論であつたことが事実によつて証明されました。中国はベトナムに侵入し、ベトナムはカンボジアに侵入する。世界で最も悲惨な地獄を現出してゐる地域はすべて共産主義の国であり、もはやいかなる詭弁もこの現実を糊塗することはできない。

かういふ世界情勢の急テンポの変貌ぶりに対して、日本の国内では豊かな富の獲得といふ当面の目標が一応達成されて、一種の虚脱状態になつたといふやうに考へられます。小此木啓吾さんに『モラトリウム人間の時代』といふ著書があります。モラトリウムといふのはもともと支払猶予といふ意味ですが、いはば当事者として全責任を持って決断することをしない、自ら



の意志によつて的確な判断をすることを回避する人間が充満して、今やそれが現在の「社会的性格」になつたといふわけです。私はそれを一歩進めまして、日本の国家自体がモラトリアム国家ではないだらうか。国家がその意志を自らの責任において的確に打ち出せないやうな時代、それが現代だと思はれてなりません。

それからもう一つ表題の中の「思想」といふ言葉について考へて置きたいと思ひます。思想といふ言葉は曖昧に使はれてゐますが、例へば、マルクス主義、実存主義、フロイディズム、構造主義といふやうな、思想的天才によつて構築された理論体系といふものが思想であるといふ考へが通念のやうです。それなら、黙々と働いてゐる無名の人々は思想を持たないのだらうか。私はさうではないと思ふ。人間が人間であ

る限り、生きて行くためには絶えず決断が要ります。その決断の際に働くものはその人の思想です。小林秀雄さんには「真の思想は本能に酷似してゐる」といふ言葉がありますが、さういふ意味で思想とは一人一人の行動や価値観を支へてゐるものと断じて誤りではないと思ひます。

### カルチャー・ショック

夏目漱石は明治四十四年、和歌山において有名な「現代日本の開化」といふ講演をしました。この開化といふ言葉は文明といふ意味ですが、その中で現代日本の開化は「外発的開化」であるとして、西洋のそれが「内発的開化」であるのと対比して論じてをります。「外発的」といふのは、外から来る力によって国を開かざるを得なかつたといふ意味で、その力といふのは黒船によって象徴される帝国主義列強の軍事力であつたわけです。

皆さん余り御存知ないと思ひますが、十九世紀の帝政ロシア時代の代表的なりアリズムの作家にゴンチャロフといふ人がゐます。「断崖」といふ作品は二葉亭四迷の『浮雲』の材源となつたものです。また、彼には『オブローモフ』といふ作品がありますが、その主人公オブローモフは、心は優しいけれども決断力のない中途半端な没落貴族階級、つまりロシア文学に

よく出て来る余計者といふタイプで、さういふ一つのタイプを創造した名作といはれてゐます。そのゴンチャロフが、例のプチャーチン提督の秘書として、軍艦パラダ号に乗って日本にやって来ます。その時の紀行文『フレガッタ艦パラダ』の抄訳が『日本渡航記』なのですが、それを読むと当時の帝国主義諸国が、その機械力と組織力と軍事力とを背景にして、いかに強圧を加へながら東洋の後進国を侵略して行くかがなまなましく伝はつて来ます。パラダ号が長崎に来たのは嘉永六年、明治維新の十五年前です。この軍艦はかなり中古のものだったやうですが、それでも大小合はせて五十二門の大砲を持つてゐた。外国船に慣れてゐた長崎の市民も流石にオロシヤの脅威を肌で感じたに違ひありません。同じ頃にアメリカのペリーも浦賀にやって来ます。吉田松陰先生は、最初はパラダ号に乗らうと思つて長崎に来ますが、到着した時には既に上海に出航した後だったので、それで一旦江戸に引き返してその翌年下田で米艦に乗らうとされたのです。松陰先生といふ方は、外国を学ぶためには、自分の肉体と魂を異質の文化の中に置いて、トータルに外国の文化をつかみとるしかないといふ決心して、長い鎖国といふ枠を最初に破つた人です。だから、当時としては最も進歩的な人だったわけです。一人の人物を、国家主義者だとか、保守主義者だとかいふ固定した言葉で概括してしまふことは、その人の個性を殺してしまふのです。現代でもよく、あれは右だ、あれは左だといふやうに、レッテルを貼つて事足りりとしがちですが、その人の多様な経験を、心を開いて受け入れ

てゆくといふことが大事だと思ひます。

余談になりましたが、ゴンチャロフは最初は白人種の優越感で日本人を見てゐますが、日本の通訳とか、下級の役人とかいふものを見て、文学者特有の直観で、恐るべき民族と感じたやうです。若い日本といふ言葉が幾度か出て来ますが、将来の日本へのある予感を持ってこの渡航記を書いてをります。

△ヨーロッパ人を入れるべきか入るべからざるかを決定することは、日本人にとっては、ならふべきか、ながらふべからざるかの問題である。入れるとなれば、客はまた例の信仰と、例の思想、習慣、規則、商品、それに弊害を持って来るだらう。入れないとなれば既に四隻の軍艦が来てゐるし、更に十隻が来る。皆長い大砲を持ってゐる。▽

この大砲といふものに対する危機意識が、日本の青年を奮起させたのです。これから明治維新までの十五年間、利害関係の対立、イデオロギーの対立、各藩同士の錯綜した人間関係、開国と攘夷、尊皇と佐幕といふやうに、日本人は未曾有の動乱に突入してゆくわけですが、それらの立場の相違を超えて、大砲に象徴される怖るべき外圧の前に、いかにして自国を守るかといふ点ではピタッと一致できたわけです。福沢諭吉は、平素は商人は商売をして金を儲ければいい。学者は書齋にこもって真理の探究に憂き身をやつすのもいい。しかし一旦事のある時には蜂尾のとげに触れるやうに敏感であれといふやうに言つてゐます。諭吉といふと欧化主義の

第一人者のやうに言ひますが、彼の言葉に「独立の心なき者は国を思ふこと深切ならず」といふのがあります。個人として自立した志を持つてゐない人間に限って、国家のことを考へない。逆に言ひますと、自立した人間は必ず国家の運命といふものを深く切実に考へるのだといふことになります。

この黒船の来航を、吉田松陰先生は『講孟餘話』の中で、「癸丑きちゆう、甲寅かういん、墨魯の変」と書いてをられます。「癸丑」(みずのとうし)とは嘉永六年のこと、「甲寅」(きのえとら)とは安政元年のことです。「墨魯の変」の「墨」とはアメリカ、「魯」とはロシアのことです。それがゴンチャロフの『日本渡航記』と照応することは勿論です。この外圧に対応する幕府の態度は、松陰先生の眼には「皇国の大体を屈して、陋夷の小醜に従ふに至る」と映ったわけです。カルチャー・ショックとは、異質文明が接触する時の衝撃であり、弱い文明は強い文明に併呑されてしまふのが世界史の鉄則なのですが、われわれの祖先はまことに果敢にこの危機を乗り切ったのです。

黒船の来航から日清戦争までは四十年です。この短い間に、日本は眠れる獅子といはれた清国と対等の戦争ができるやうな国に成長して行きます。明治といふ時代は暗い時代だったといふイメージがあります。暗い事件のみを拾ひ上げて繋いでゆけば、暗い歴史を構成するのは容易なことですが、明治の人間の大部分は、自らが初めて持った近代国家に直接参加する一種の

昂揚感を持ってゐました。大部分の国民の歡びと責任感に支へられてゐた時代であつたといふ認識を抜きにして、女工哀史や大逆事件ばかり教へてゐるといふのが、今の歴史教育ではないでせうか。

黒船から四十年経つて、世界の強國の一つであつた清國と戦はねばならぬ不幸な事態となりますが、山県有朋が第一軍の司令官に任命された時、政府と軍の首脳部に明治天皇が直接お下しになつた勅語があります。陛下はまだ四十歳前後の若い天皇であり、臣下は皆維新の動乱をくぐりぬけて来た侍たちです。

一、軍國の大計は文武相応じて謀議周密を要する事

二、特に軍事上に於ては大本營と出師首將との間其權威を明にし謀議画策其精神を貫通し遺算なきを期する事

三、交戦の地海外に在るを以て陸海軍相待て経画を為すは論を俟たず故に大本營の命令を遵奉するの外尚兩軍氣脈を通じ齟齬失敗を予防する方法を執る事

四、交戦の韓地に在るの間は出師首將と該國駐劄外交官の間各奉ずる所の職域を踰越することなくして氣脈の貫通を怠らざる事

五、國家全局の得失は独り交戦上のみならず往々局外與國の干涉を免るべからざるを以て外交の操練と軍事の方略と相待ち齟齬することなく終局の大計に注意すること最も肝要な



## る事

こゝには、文官と武官の協力、大本營と現地派遣司令官との命令系統の序列、陸海軍の協力、軍事と外交の役割分担、それらを綜合する大局的見地といふやうに、まことに見事な一元的指導が行はれてゐます。それは国家の意思の寸分の隙間もない見事な表現であり、過ぐる大東亞戦争の指揮系統の混乱ぶりと比較するとき、思ひ半ばに過ぎる感じがいたします。また、日清戦争でも日露戦争でも、開戦と同時に綿密な終戦工作が行はれてゐましたのに、今度の戦争では百年戦争とか、永久戦争とかいふやうなことが言はれて、戦争指導そのものが全く違つてゐたといふことも、われわれは今一度貴重な教訓として学び直さねばならぬ点だと思ひます。ともあれ、われわれは、列強の包囲の中でよく独立を保ち得た明治国家の本質を、最も象徴的に語る文献の一つとして、この資料を提出したわけです。

いふまでもなく日本の歴史における最初のカルチャー・ショックは聖徳太子の時代でした。この時代は圧倒的な大陸文化を、皇室と国民が一体となつて消化してゆきましたが、あの歴大で精緻な教義に鎧はれた仏教の摂取や、漢字といふ他国の文字を使って言語表現をするといふ世界のどの民族も経験したことのない試練を、日本人は見事に乗り切りました。そして、二番目のショックが明治維新でした。それは西洋といふ全く異質の文化との劇的な対決となりま

一つの文化、文明と、他のそれとを区別する最も象徴的なものは神の概念です。神といふものの性格はその民族のすべての文化のシンボルになるのです。ヨーロッパの神の原型は旧約聖書の「出埃及記」にあります。

△我エホバ汝の神は嫉む神なれば、我を悪むものにむかひては、父の罪を子にむくいて三代におよぼし、我を愛し、わが誠命を守る者には、恩恵をほどこして千代にいたるなり。▽

「ゴッド」を神と訳すのは間違ひだと小田村先生は早く指摘されましたが、強ひて訳せば「超越神」とでも訳すべきでせう。人間と断絶してゐる神であり、峻烈な全能の力をもって人間を裁く神様です。神を人間のイメージで言ふなら、西洋の神は「天にましますわれらの父」であり、父性原理がヨーロッパの宗教の中心にあります。不寛容で排他的で、正統と異端をはっきり分けます。異端者は徹底的に殺戮する。ヨーロッパが神の名において、いかに残酷な宗教戦争をやったか、われわれの想像を絶します。ところが、日本の神々は人間と連続してゐるのです。宣長は「古事記伝」の三巻にかう言つてゐます。

△何にまれ尋常ならずすぐれたる徳のありて可畏物を加徴とは云なり。▽

これが日本人の神の定義だと思ふのです。山全体が御神体であることはよく聞きますが、海もまた「わだつみ」なのです。人間でも草木でも、何か神聖なもの、清らかなもの、美しいものを持つてゐて、われわれがそれに対して心から敬虔な気持になれるやうなものは、すべて神

なのです。そのことを、現代の哲学者で最も的確に言っているのは、和辻哲郎博士です。『日本倫理思想史』上巻で博士は次のやうに言ひます。

「神代史において最も活躍してゐる人格的な神々は、後に一定の神社において祀られる神であるに拘らず、不定の神に対する媒介者、即ち神命の通路としての性格を持ってゐる。▽

「神命の通路」とは、神聖なものを媒介する人、あるひは神聖なものを担ってゐる人であり、これが日本人の考へた神なのです。だから戦死した人を神として靖国神社に祀ることは、日本人にとって全く自然なことなのです。続いて博士は「それらは祀られると共に自ら祀る神である」とも述べてゐます。天照大神はみづから神々を祀られるのであって、自分が唯一最高の神ではないのです。

以上が日本と西欧の神の概念の相違なのですが、もう一つ、大野晋氏の『日本人の思考と日本語』によって、言語の相違から人間観の相違を問題にしたいと思ひます。氏によると、ヨーロッパはもともと遊牧社会である。遊牧社会の人間関係は、絶えず未知の人間と遭遇するところから、相手に対する不信を前提として成立する。従つて遊牧民族の基本的な人間関係は契約関係であり、ヨーロッパ語における一人称と二人称が極めて簡単であるのは、契約関係における仕手と受け手の関係であるからだ、と言ふのです。これに反して、日本人は元來農耕民族であるから、一つの場所に定着します。さういふ場合の人間関係を決定するのは、契約ではな

く、親疎の關係である。日本語の代名詞には、世界に例のない整然たる体系があります。「コソアドの体系」と呼ばれるのですが、例へば「これ」「それ」「あれ」「どれ」といふやうに、近称、中称、遠称、不定称が確然と區別されてゐます。さういふ親疎の關係に従つて、一人称、二人称がどのやうに複雑微妙な呼び方になるか、皆さん御承知の通りです。大野氏はまた自発（自然可能）の助動詞「る」「らる」が同時に尊敬の助動詞でもある点に注目して、日本人は人為よりも自然を尊ぶことが、さういふ日本語の使ひ方によつて分ると指摘してゐます。このやうに考へて来ますと、神の概念にしろ、人間觀にしろ、極端に違つたヨーロッパ文明が、圧倒的に優勢な技術力、組織力、軍事力を背景に津波のやうに押し寄せて来たのですから、日本人は未曾有の文化の戦ひの中に身をさらさざるを得なかつたといふことになります。

### 現代思想の原型

現代人が通念として持つてゐるものの考へ方の原型が成立したのは、日露戦争が終つた明治四十年前後だと思ひます。その考へ方の基礎になつてゐるものを、最も抽象的な言葉で表現するならば、科学主義、歴史主義、普遍主義といふことになると思ひます。これをもつと具体的に申しますと、科学主義といふのは、日本においてまづ文学上の自然主義の運動になつて現は

れます。これはもともと、フランスのエミール・ゾラの『実験小説論』から出て来る考へ方ですが、人間は遺伝と環境によって決定される動物に過ぎないといふ考へ方です。歴史主義といふのは、歴史は次第に進歩するといふ考へ方です。進歩主義と言つてもよいのですが、具体的に言へばマルクス主義、唯物史観的な考へ方です。それから普遍主義といふのは、特殊よりも普遍的なものの方がよいとする考へ方です。国家とか家族とかいふ制約をのりこえてゆく。初期の武者小路に代表されるやうな、白樺派の人類主義などがその具体例と思はれます。そしてこれらの思想の底流といふか、結節点として自我主義といふものがあります。自我が一切の価値基準である。自我以外の権威を認めないわけですから、人間が長い間蓄積して来た経験の凝集としての宗教や道徳も、アンシャン・レジーム(封建的旧制度)の遺制であるとして、弊履のやうに捨て去つてしまふのです。

現代思想の原型には三つのものがあると申しましたが、その三つの典型的な文献を上げてみます。まづ高山樗牛が明治三十四年に書いた『美的生活を論ず』です。この「美的」は「本能的」といひかへてもよいのです。樗牛は三十そこそこで死んだ有名な哲学者ですが、その短い生涯に思想が幾変転をした人です。最初は青年を酔はせるやうな美文家でしたが、やがて日清戦争前後には「日本主義」を鼓吹する国家主義のチャンピオンとなり、やがてニーチェの影響を受けて極端な個人主義、本能礼讃主義になります。最晩年は日蓮宗を信仰して「吾人はすべ

からく現代を超越せざるべからず」といふ有名な言葉を残して夭折します。彼はもし元氣であれば明治三十三年漱石と共に留学する予定だったので、突然の咯血で留学が中止になりま  
す。さういふ事情も多少は働いたのでせう、講壇哲学者が一転して本能主義の鼓吹者となるわけ  
です。その代表的なものが『美的生活を論ず』で、このやうな思想はこれから五、六年経つ  
て田山花袋あたりによって実践されることになるわけです。人間の行動の中心になるのは性欲  
であるといふやうな思想は、非常に単純な思想ですが、儒教思想がまだ根強い力を持ってゐた  
時代に、官学派の中心部にゐた大学者の発言ですから、やはりショックキングだったのでせう。  
彼はかう言つてをります。

△何の目的ありて是の世に産出せられたるかは吾人の知る所に非ず。然れども生れたる後の  
吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり。幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば  
本能の満足即ち是れのみ。／蓋し人類は其の本然の性質に於て下等動物と多く異なるものに非  
ず。世の道学者の説くところ、理義如何に高く、言辞如何に妙なるも、若し彼等をして其の衷  
心の所信を赤裸々に告白するの勇氣だにあらしめんか、必ずや人生の至樂は畢竟性欲に存する  
ことを認むるならん。▽

諸君の中には共鳴する人がゐるかも知れない。性欲がなければ人類は絶滅するわけですか  
ら、それが「悪」である筈はない。しかし性もまた人間の道に沿って行はるべきだし、また人

間は全面的に性によって領略される存在でもない。昔の人は「人の禽獸と異なる所以」を学ぶことが学問だと心得てゐました。ところが、この当時の一流の哲学者が「人間にとって性欲が最も大切であり、その満足が生き甲斐である」と言ったのですから、ショックも大きかったのでせう。性は人間にとって否定できない真実ですから、かういふ思想は非常に根強い。その性の禁忌が破れて来るのもこの頃からのことです。少し余談になりますが、かういふ考へ方を心理学の面から追究してゆくのがフロイドです。フロイドはすべての文化活動の源にはリビドー（性衝動）がある。それが本来の目的に消費されるときには性行動になる。抑圧されて無意識の中に閉じ込められると神経症になる。それが昇華されるとき文化の創造となるといふのですが、この時代にさういふ思想が前面に出て来たわけです。

二つ目のマルクス主義的な考へ方が出て来る典型が啄木です。啄木は晩年友人に宛てた手紙の中で自らを「ソーシアル・レポリューションニスト」と規定しますが、明治四十二年に「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」といふ断章を書きました。

△従来及び現在の世界を觀察するに当って、道德の性質及び発達を国家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である。――寧ろ日本人に最も特有なる卑怯である。／＼国家！ 国家！ 国家といふ問題は、今の一部の人達の考へてゐるやうに、そんなに軽い問題であらうか？

道徳といふものは国家権力に都合のいいやうな人間を作る道具だといふ考へ方で、これはアナーキズムやマルクス主義の道徳観です。そして翌明治四十三年に例の大逆事件が起ります。その弁護士平出修は「スバル」の同人で啄木の友人であったところから、彼を通じて検事調書を入手し、『時代閉塞の現状』といふ有名な論文を書きます。これは自然主義批判の論文ですが、その中でわれわれ青年にとって一番大切なことは「時代に対する組織的考察」であると書きます。これは検閲をはばかった表現ですが、勿論社会主義を指してゐることは明白です。啄木がこれを書いたのは二十五歳の時でした。貧窮と家庭不和に追ひつめられた早熟の天才が辿った必然であつたのでせう。

丁度同じ時代、明治四十四年、森鷗外が「妄想」といふ作品を書いてゐます。鷗外といふ人は明治の新しい国家の建設に参加した人です。四十年軍医総監になつてゐますから、体制側の人といつていゝでせう。その鷗外さへ、この前後は非常に暗澹たる心境であつたやうです。『妄想』といふ作品は一人の老人が自分の青春をふり返つて思想的な遍歴を述べるといふ形で書かれてゐますが、その中でショーペンハウエルといふ厭世哲学者の言葉を引いて次のやうに言つてゐます。

「世界は有るよりは無い方が好いばかりではない。出来る丈悪く造られてゐる。世界の出来たのは失錯である。一人一人の人は一箇一箇の失錯で、有るよりは無いが好いのである。」



これは徹底した虚無主義です。鴉外ほどの人がといふよりも、鴉外のやうな広大な知識の所有者だったからといった方がいいかも知れませんが、彼はたしかに思想的な袋小路にゐたやうです。その鴉外が人間として自信を取りもどすのは、乃木殉死事件でせう。同じ明治四十年代に、物理的に天皇を抹殺しようとする大逆事件と、古式に則って天皇に殉死する乃木事件が、殆んど時を同じうして起つてゐるのは非常に象徴的です。これを契機に鴉外は歴史小説の世界にゆき、漱石は『こゝろ』といふ名作を書きます。いづれも深い感動が結晶度の高い作品となつてゐます。

ところが乃木殉死に対する明治二代目の人々、例へば白樺派の人々の反応は全く違つてゐました。武者小路実篤は大正元年、白樺誌上に「三井甲之君に」といふ文を掲げます。三井甲之は正岡子規の門人で、『アララギ』と袂を分つて『アカネ』といふ雑誌を始めたすぐれた歌人で、思想家でもあつた人です。

△ゲーテやロダンを目して自分は人類的といひ、乃木大将を目して人類的の分子を少しもたない人といふのに君は不服なのか。／さうして君は乃木大将をロダンと比較して、いづれが人間本来の生命にふれてゐると思ふのか。乃木大将の殉死が西洋人の本来の生命をよびさます可能性があると思つてゐるのか。／ゴッホの自殺はそこへゆくといふと人類的の処がある。▽

これは「人類的」といふ言葉に価値意識を移入してゐます。当然、国民的とか民族的とかい

ふ考へ方は貶しめられてゐるわけです。もともと人類の文化とはいっても、それは特定の民族の作り上げた文化の中で、高い質を持ったものが人類共有のものになってゆくわけで、人類とか人間とかいふのは抽象概念であることを銘記すべきでせう。文化といふものは、民族といふ血縁共同体が創り出す形です。すべて民族的なものの中の優れたものが人類的なものになってゆくといふのが事実です。その上武者小路の意識の中には、人類的と西洋的といふのが同義として重ね合はされてゐるのですから、いよいよ始末に終へないといふ次第なのです。「人類的」といふ言葉をふりかざす思想は、現在の思想界を風靡してゐるのですが、人間は動物に過ぎないといふ思想とか、歴史は進歩するといふ思想とか、人類信仰といふやうな考へ方とかは、すべて現代の大きな妄想ではないでせうか。

そこで、戦時下の思想を極めて図式的に概括してみることになります。諸君は戦前は極端な思想統制が行はれた暗黒時代だといふ先入観を持ってをられると思ひますが、本格的な思想統制が行はれたのは、せいぜい終戦までの四、五年といふのが正確でせう。悪名高い治安維持法も、天皇制と私有財産制度といふ日本国家の本質を破壊しようとするコミンテルンの謀略に対する防衛措置であつた。その適用に誤りや行き過ぎがあつたことは否定できないにせよ、治安維持法そのものによつて死刑を執行されたものは一人もゐないといふ専門家の証言もありまゝです。これを社会主義国家の国家権力による何百万、何千万の大虐殺と同次元に論ずるわけには

ゆきません。

私は戦時中の指導理論を支へた思想を教条的道德主義、排外的国家主義、選民的民族主義といふやうに概括しました。それは、先程述べました明治四十年前後に成立した現代思想の原型の裏返しであつて、日本人の深層を流れてゐる情意とは異質のものであつたと思ひます。戦ひの力源は日本人本来の情意の中にあつたのであつて、タテマエとしての指導理論は紛ひ物であり、却つて日本人の眞の力の発動を抑へる結果になつたやうです。例へば教条的道德主義といふのは、人間動物観、自然主義的人間観の裏がへしです。道徳といふものは内発的な畏敬の念に支へられて、始めて力あるものになるのですが、滅私奉公といふやうなスローガンが、何の痛感もなく叫ばれたところに、恐るべき頹廢が進行したやうに思はれます。それから排外的国家主義といふのは先に述べた国際共產主義といふものの裏返しです。戦争中に強烈な国家主義を唱へた人には、戦前共產主義に心酔してゐた人が多かつたのです。それらの人は八月十五日を境にして、また元通りの共產主義者になつてゐるのです。転向、再転向といふことを平氣でやつた連中が指導層に多かつたのです。もう一つ選民的民族主義といふやうに言ひましたが、これは例の普遍的人類主義の裏返しです。要するに極端なのです。従つて私には、戦争中の指導理論なるものは西洋思想の変種であり、庶民の心情とは別のところで空転してゐたやうに思はれます。さういふイデオロギーを補強するために『古事記』や『万葉集』が切り売りされた

のですから、大東亜戦争は思想的な意味でも敗北せざるを得なかったと今にして思はれます。こゝで念のために申し添へておきますが、拙劣な戦争指導のため悲劇的な敗北に終わったとはいへ、過ぐる大東亜戦争が強ひられた戦ひであり、大部分の日本人は敵国人さへも頭を垂れるほど勇敢に戦ひ抜いたといふ厳粛な事実だけは、戦争を知らぬ世代の方々にお伝へしておく義務があらうと思ひます。

### 戦後思想の問題点

そこで戦後思想の問題になります。外国人は、日本人の国粹主義からの転換の早さに驚いたやうですが、実は戦時下の特殊な状況からもう一度明治末年から大正期の時代へ、即ち現代思想の原型の成立の時代へ返ったと考へれば疑問は容易に氷解します。その「原型」がふくむさまざまな問題は、そのまゝ戦後思想の問題となつてくるわけです。

終戦の直後に書かれた坂口安吾の『墮落論』は、思想的に言へば「人間は動物である」といふ自然主義的な人間観の系譜につながるものでせう。しかし、私は戦後のさまざまな発言の中で非常に心を打たれたものの一つです。何故なら、それは非常に生命的だったからです。決して単純な墮落のすゝめではないからです。何から墮落せよといふのか。それは戦争中の教条的

道徳主義から離脱せよといふのです。タテマエ論、動脈硬化した形式道徳、さういふものがかに人間の本然の姿から遠いものかといふ憤りからの宣言でもあったのです。彼の心情の中には、特攻隊の人々の死への深い悲しみがあつたやうです。

△戦争は終つた。特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませてゐるではないか。人間は変りはしない。ただ人間へ戻つて来たのだ。人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救ふことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救ふ近道はない。▽

「生きよ、墮ちよ」といふ言葉が當時はやりました。何の忠誠心もないものが、天皇の權威を背に負つて忠義を説くといふタテマエ論、それは偽善であり不忠であつたのではないか。

△墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救はなければならぬ。政治による救ひなどは上皮だけの愚にもつかない物である。▽

政治による救ひ——当時猫も杓子も平和と民主主義をいひ、文化国家の建設を言ひました。坂口はそこに新たな偽善の匂ひを嗅ぎとつてゐたのです。人間は弱い存在であるから、宗教や道徳なしに生きることはできない。やがて武士道を案出するだらうし、天皇を案出するに違ひないが、みづからの武士道と、みづからの天皇を発見せよと言つてゐます。すべての教条主義を徹底的に疑ひ、自らの依拠すべき根源を、自らの努力によって探し当てよ、さういふ努力をし

ないで、また新しいスローガンについて行くのか、といふ批判なのです。余談になりますが、坂口には『教祖の文学』といふ小林秀雄論があります。勿論痛烈な小林批判なのですが、この二人の間には終生言ひがたい共感の世界があったやうで、その全集に寄せた小林さんの序文は「安吾の靈よ安かれ」といふ言葉で結ばれてをります。

教条的道学者から言ふと、『墮落論』などとんでもないといふことになるのでせうが、自分の生命の根源まで、価値観の根源まで下りてみよといふことなのです。しかし、生きよ、墮ちよ、そして人間になれといふ安吾の呼びかけの逆説的な真意をつかむことができず、戦後の日本人はみなアニマルになり下ってしまったといふわけです。

次に昭和三十四年に書かれた小林秀雄さんの『歴史』といふ文を読んでみませう。小林さんの歴史論は『ドストエフスキーの生活』の序文「歴史について」に最も集約的に書かれていますが、例へば愛児を喪った母親が、その愛児のささやかな遺品をきっかけにして、ありし日の姿をありありと思ひ浮かべるやうに、人間が誰でも持つてゐる「思ひ出す」といふ能力こそ歴史を創り出す根本の力だといふのです。もう一つ、小林さんの歴史論で強調されることは、過去にある事実があったといふことを知るだけでは駄目で、その事実があったことが感じられなければならぬ。それが形として心に蘇って来なければ、歴史事実とはならないといふ考へ方です。これは唯物史観に対する最も痛烈な批判なのです。なぜなら、唯物史観は社会の仕組み

の理論であり、そこに社会構造や制度はあるけれども、人間が不在の史観だからです。従ってマルクス流の発展史観の信奉者にとって、小林さんの歴史論は邪魔で仕方がないものなのでせう。丸山真男が『日本の思想』の中で「それは直接には歴史的發展という考え方にたいする、あるいはヨリ正確には発展思想の移入形態にたいする一貫した拒否の態度」といつてゐるのは、さういふいらだちの表はれなのでせう。

ともあれ、唯物史観は戦後、時代の通念となつたかの観があります。さういふ現実を踏まへて『歴史』といふ文が書かれてをります。

△歴史的意識は解放された意識である。何から解放されたか。昨日を思ひ明日を目指し、二度と繰返せぬ一生を生きて育て上げた、誰も知つてゐる歴史感情から解放された。そのやうな曖昧な個人的な主観性から解放された。歴史はもう他人事のやうにしか書かれない。客観的と呼ばれてゐる一種の優越感と侮蔑とをもつてしか書かれない。これもまた奇妙な現代的な自負であり、これが歴史に現れる個性的人物といふやうな問題を片付けて了ふ。偉人も愚人も、歴史的展望と呼ばれる機構の単なる部分品になる。▽

こゝで、「解放」といふ言葉が痛烈な反語として使はれてゐることに注意して下さい。伊藤仁齋が論語を読む喜びを「手の之を舞ひ、足の之を踏むところを知らず」と言つてゐますが、さういふ学問の全身的な喜びといふものは、現代の史書にはありません。歴史の図式ばかり教

へられるからです。唯物史観の証明のために歴史事実を選別するのですから、それは歴史の図式であり、形骸であり、そこに歴史を学ぶ喜びなど出て来る筈がありません。諸君は「古事記」の時代の人間と、現代の人間を比較して、現代の方が優れてゐると考へるなら、それは僭越の沙汰です。進歩したのはたかだか物質文明の面だけで、生死や愛憎といふやうな人間の基本的な経験においては、古人の方が却って深かったと思はれます。「古事記」に思想やイデオロギーを読むのは間違だ。古道とは古人が肉声によつて伝へた「ふり」だ、生活の形だといふのが『本居宣長』を書かれた基本的な姿勢だと思ひます。現実の世界におけるマルクス主義国家の破綻は、誰の眼にも明かなのですが、教育の世界で、生きた歴史が教へられるのはいつの日でせうか。

以上、戦後思想の流れの中で、人間や歴史の問題について考察して参りましたが、最後に「国家」の問題に触れておきたいと思ひます。清水幾太郎さんが雑誌『諸君』の七月号に「核の選択―日本よ国家たれ」といふ論文を発表し、そのショックキングな題で世間に一種の衝撃を与へました。その内容は格別驚くべきものではなく、当然のことが述べられてゐるだけですが、かつては日教組の倫理綱領の起草者であり、第一次安保闘争の際の全学連の指導者であり、進歩的文化人のシンボルの存在であつた人が、戦後のタブーであつた「国家」を論じたといふところに、時代の推移が感じられたのは事実です。私ども半生をかけて日教組と戦つて来



た者にとっては、何とも複雑な気持ちですが、氏の変節の過程を分析することは今は措きます。氏は次のやうに言っています。

△ドイツのマックス・ヴェーバーと言えば、戦後の日本では、二十世紀最高の社会学者といふことになっていますが、彼によると「国家とは、或る特定の地域の内部で正当な物理的暴力性の独占を要求する人間共同体である。」／天皇制との「取引」によって課せられた第九条は、日本から国家の本質を奪ったものである。少くとも、その大部分を奪ったものである。／戦後思想は、日本が国家ではないという告白から始まった。▽

こゝでいわれている「正当な物理的暴力性」といふのは軍隊と警察のことです。清水さんはマックス・ヴェーバーを引きながら、国家とは合法的に暴力装置を使用することができる「権力」だといっているのです。かういふことを今更確認しなければならぬといふのは、日本のインテリが如何に空漠たる観念論の世界に安住して来たかといふ証拠にもなります。私どもはこの三十数年、日本は「半国家」だ、国家の体をなさぬ集団だと言ひ続けて来たのです。清水さんにとって、国家とは権力構造であり、組織であり、制度であるのでせう。さういふ国家の側面を私は「外なる国家」と名づけて来ました。それは対象化し得るものであり、知性によって認識することができる側面です。

しかし国家にはもう一つ、生命としての国家といふ側面があります。私はそれを「内なる国

家」といふやうに名づけて来ました。それは、われわれを包摂する大きな生命体であり、私といふ個人を媒介にして、祖先から子孫へと伝へられてゆく血脈でもあります。その「いのち」は外的な物として対象化することができず、心の中で感ずることによって確認するしかないものなのです。確か小林さんの言葉ではなかったかと思ひますが、「思想の最も窮極の姿は詩になる」といはれましたが、先ほど武者小路が批評した三井甲之といふ方には、生命としての国家を歌った「沁刻」といふ詩があります。「沁刻」とは、心にしみるやうに時が過ぎてゆくといふ意味でせう。その長詩の第二連を読んでみます。

へうつし世はかなしきゆゑに、詩にきざむ、いのちの律動、ものみな枯れて、残るは地熱、祖国のいのち。

ことあるときは、あらはれいづる、しきしまのやまとだましひ、今の世の乱るるゆゑに、息づきて、やうやく目さむるいのちの律動。

一ときもやすむひまなきいのちのかなしき、防護のたたかひ、やすむひまなし。

戦ひ、戦ひ、進み、進め。▽

「うつし世はかなしきゆゑに」と歌ってありますが「かなし」とは、人生は本質的に悲劇的だといふことです。人間の生命は有限であり、二度と繰り返しはない。だからこそ、その有限な、はかない命のリズムを詩に刻印するのです。満目荒涼たる冬の野の地熱のやうに、すべて

が枯れ果てて最後に残るものは祖国のいのちである。生命は刻々に流動して停滞することのない一つの持続です。その生命、個人の生命にしろ、国家の生命にしろ、生命防護の戦ひには一瞬の遅滞も許されないのである。それが武力にしろ、誤まれる思想にしろ、われわれの健やかな生命を圧殺せんとするあらゆるものに対して戦へといふのです。「いのち」としての国家は、かういふ芸術的表現によって初めて感知されるものなのでせう。

同じ三井甲之先生に「蕨機関長故福田氏をしめびまつる」といふ詞書を持った短歌がありません。「蕨」とは軍艦の名前で、福田氏は恐らく殉職されたのでせう。

△ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を▽

またも「悲しきいのち」です。国家といふものは自然現象ではない。人間の意志の継承によって支へられるものです。日本が今まで続いて来たといふのは、一つしかない命を捧げても守るに価する国だったからでせう。国家の運命といふものは、われわれの外にあるものではありません。国家の内容とは、われわれがそのたゞ中に生きてゐる文化なのです。文化を守るとは自分の命を守ることです。だから、自分の生命を防護することと、国家の生命を防護することとは同じことなのです。国家は抑圧の機関で、自分とは違ふ、誰かがやってくれるだらうといふやうなところから、一步踏み出していただきたいと思ひます。その決意の有無が日本の将来を決定すると思ふからです。



今こそ日本への回帰を

国民文化研究会理事長  
小田村寅二郎



観音堂への道

人生にとりくむ二つの視点

乃木大将とステッセル將軍

国と国とのつきあひ方

国を成立させる三つの要素

物質文明と精神文明

国家防衛について

## 人生にとりくむ二つの視点

最初にレジメの冒頭の部分を読ませていたゞきます。ここに書きましたことは、ごく普通のことのやうですが、まづここにしっかりと足をふみとゞめていたゞきたいと思ふのです。

「世間では『この世は生存競争の一語に尽きる』とよく耳にする。——たしかに人間同士が常に競争し合つてゐるのは事實に違ひないが、人生をそのやうなものだと決めてかゝるよりも、この世の一人一人の人間は、自己の人生をより一層充実したものに、より一層生き甲斐のあるものにしていきたいと努力しながら、お互ひに励まし合つて生きてゐるのだと把へる方が、格段に、人生についての眼識が養はれてくると思はれるのだが——」

このやうなことを言へば皆さんはそれぐらゐはわかつてゐるとおっしゃるでせう。

しかし皆さんが大学を出て実社会におはいりになつて、大学時代とは違つた非常にトゲトゲしい零囲気に包まれるやうになると、矢張り人生は生存競争だといふ気持ちに追ひこまれてゆく人が少くはないと思ふのです。だが一体それでいゝのだらうか、いづれにしても、この二つの視点のいづれに重点を置いて物事を考へるかによつて、世間や社会の見方に大きな格差が生じてくると思ふのです。

すなはち、この世を生存競争といふ方から眺めると、相手に対して、恐怖感、憎悪感、嫉妬、侮蔑、優越感、劣等感、卑屈感などさまざまな対立意識や彼我意識が自己の心を占領し勝ちになります。さうした中から生れてくるのが権力萬能主義であり、その権力をわが物にしなくては意味をなさないとし、最後には、階級闘争こそ社会正義に通ずるとするやうな思想を生み出してくるのです。

これに対して、この世の人々はお互ひに励ましあって生きてゐるのだと考へる、さういふ視点に立たうとする人たちは、同じく競争相手を強く意識する場合でも、相手をわが好敵手として扱へることが出来るのです。“好敵手”の“好”とは、“好ましい”“大切な”“尊敬に値する”といふニュアンスをもって使はれるのです。このやうな気持で競ひあってゆけば、相手に對して憎悪や、敵対感ではなしに、相手の人格や力量に對する敬意が生れ、ひいては、相手の存在そのものに感謝する心が自然に生れてくるのです。さらにそのことは、自己と相手との、すなはち「自他の関係」において、自己の立場を正しく整へてゆくことが、人生においていかに大切であるかを、肝に銘じるやうになってゆくのです。

このやうに言へばそれは後者がいいに決つてゐるけれど、世の中はそんなに甘くはないといふ答がかへってくるでせう。しかし日本人は昔からこの後者の考へをこの上もなく大切にしてきました。血で血を洗ふやうな生存競争といふうけとめ方ではなく、競ひあひ励ましあふ生き方の





中に、人間関係の豊かな情感をたしかめあってきたのが、他ならぬ日本人であった。現に日本の歴史を繙いてゆけばそのやうな心豊かな生き方をした人が無数に見出されるのです。

ここではその最も典型的な、最も美しい例として日露戦争の旅順開城の折の、露西亞のステッセル將軍と、わが第三軍乃木司令官との会見の模様を、皆さま御存知の「水師宮の会見」といふ歌に沿ひながら御話してみたいと思ひます。この歌は佐々木信綱の作詩ですが、出来上つたのは明治四十三年七月、旅順開城より五年後のことです。なほこの年には、明治天皇も乃木大將も御健在であつたといふことに注意していただきたい。といふのは、この歌は過去の英雄をことさらに美化してよまれたのではなく、明治といふ時代の、いはゞ「平常心」の中で生れ、「平常心」の中で歌ひ出された歌であつたといふことです。

(編者注　ここで講師は会場の中の国民文化研究会々員に歌唱を依頼され、一番から九番まですべて唱ひ終つたあと講義を続行された)

## 乃木大将とステッセル将軍

明治三十七、八年、日本は国運を賭して勝利を収め、日本の独立を守り通したのですが、そのあと国民の緊張が次第に弛んでくる。さういふことから勤儉尚武の気風も薄れてきた。このやうな時にあって、日露戦争の姿を何らかの形で子供の心に伝えておきたいといふ思ひもあって、この歌が生れたのかもしれない。さて歌詞は次の通りです。

一、旅順開城約成りて 敵の將軍ステッセル  
乃木大将と会見の 所はいづこ水師宮

ステッセルと乃木大将、その間は、先ほどの二つの見方のうち、前者の見方からすればまさしく憎んでも憎みきれない相手であるはずです。しかしその二人の気持は決してさういふものではなかった。

二、庭に一本なつめの木 弾丸あともいちぢるく

くづれ残れる民屋に 今ぞ相見る二將軍

そのあと乃木大將はまづ口をきるのです。

三、乃木大將はおごそかに 御めぐみ深き大君の

大みことのり伝ふれば 彼かしこみて謝しまつる

この場面は戦地において、いはゞ降伏の条約を締結するやうな場面ですね。ところがその一番最初に出てきたのは、天皇が敵將に対して与へられた、御めぐみ深い言葉であった。それは、  
「（小田村） 労りの御言葉でもあったでせうし、武勇を讃へる御言葉でもあったでせう。」

皆さんは学校で、日露戦争は侵略戦争であったと聞いてこられた方が多いと思ふ。もしさうであれば、勝利者は敗者に対して、生殺与奪のすべての権を握るはずで、しかもこの歌のどこにさういふ姿があるか、それが決して侵略戦争などではなかったことは、この歌全体に流れる情感、特にこの三番の歌詞を見れば、誰の目にも明らかでせう。

四、昨日の敵は今日の友 語ることばもうちとけて

我はたゝへつ彼の防備 彼は称<sup>た</sup>へつ我が武勇

二人の謙虚なまなざしが目に見えるやうです。

五、かたち正して言ひ出でぬ 「此の方面の戦闘に

二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ」と

ステッセルは乃木將軍が二人の御子様をなくされたことに弔意をさゝげます。ところがこれに對して

六、「二人の我が子それぞれに 死所を得たるを喜び

これぞ武門の面目」と 大将答へ力あり

ここには大変重要な言葉がよまれてゐます。今のひねくれた見方でこの歌を見ようとする人は、乃木大將は子供の死を歎けば武士としてみっともないと思つて、こんな強がり言つてゐるといふに違ひない。これは単なる建前だといふでせう。しかし私はさうは思はない。勿論大

將の心は悲しみに閉ざれてゐたでせう。しかしそれと同時に、二人の子供がそれぞれお国のために立派な最期をとげてくれたことに對するよろこびがあったことも疑ひのない事実です。そこには日本の武士の魂が脈うってゐる。そのはりさけるやうなかなしみと深いよろこびが、乃木大將の心の中には同時に成立してゐる。言葉をかへて言へばその二つが同時に一つの心中に存在し得たところに乃木大將の偉大さがある、心の深さがあると言つてもいい。大將の言葉に力があつたのは、その心の深さの表現なのです。

七、兩將<sup>ひろ</sup>昼食<sup>げ</sup>共にして なほも尽きせぬ物語

「我に愛する良馬あり 今日の記念に献ずべし」

八、「厚意謝するに余りあり 軍のおきてにしたがひて

他日我が手に受領せば なかくいたはり養はん」

この七、八番は對話になつてをります。自分にはすばらしい馬がある。その馬をさしあげませうといふステッセルの言葉に對して、大將はお礼を言はれるのですが、その中で特に心をとめていたゞきたいのは、大將がその馬を「軍のおきてに従つて、受領いたします」と答へてゐ

ることです。たゞ一頭の馬ではないか、それをもらふことなどその場で出来さうなと思ふのが私達の感覚です。しかし乃木大将はそのやうな軽々しい言葉は言はれなかつた。「他日我が手に受領せば」——後日正式の手續きを経て自分の手に渡ることがあれば、といはれるのです。乃木さんの態度の立派さもさることながら、当時の軍の規律がいかに厳しかったかが偲ばれます。しかもステッセルが「愛する良馬」と言ったのに対してすぐその場で「ながくいたはり養はん」と答へる。その相手の心を直ちにうけとめる反応のすばらしさにも心をとめて下さい。そして最後は

九、「さらば」と握手ねんごろに 別れてゆくや右左

砲音絶えし砲台に ひらめき立てり日の御旗

といふ鮮かな描写でこの歌は終るのです。

実に立派な歌だと思ひますが、こんなすばらしい歌が現在では戦争にかゝはってゐるといふだけで遠ざけられてしまつてゐます。しかしこの歌のどこに侵略戦争の面影があるか、むしろこの歌が教へてゐるのは、いかに厳しい戦であつても、その戦が終つたあとは、敵味方の将軍が対等につきあふことが出来た、その心豊かな時代が明治といふ時代であつたといふことでせ

う。そのすばらしい精神的遺産を惜しげもなく捨ててしまつて、日露戦争を単に戦争であるが故に否定してしまはうとしてゐる。何といふつまらない考へで教育の世界がかきまはされてゐるか、本当に残念でなりません。

なほこの水師宮の会見の写真が残つてをりますが、それで見ますとステッセル將軍は軍刀を帯びてゐる。これは世界の戦史上全く異例のことであつて、敗戦の將軍は必ず丸腰になつて挨拶に行くといふのが通例なのです。実はこれには歌の中にもありましたやうに明治天皇の思召しがあつたのです。それは明治三十八年一月一日時の參謀總長山県有朋から乃木大将に電報が打たれたのですが、その中に

「敵將ステッセルより開城の提示を成したる趣きを伏奏せしところ、陛下には敵將ステッセルが祖国のため尽したる勲功を嘉し給ひ、武士の名誉を保持せしむることを望ませらる。」

といふ言葉があつたのです。従つて乃木大将は、その天皇の御志を体してステッセル將軍に軍刀を帯びさせるやうに取り計らはれたのでせう。このこともまた日露戦争を語るときに忘れてはならぬ事実、是非心にとめておいて下さい。

ここでもう一つ明治時代最後に出て来た小学唱歌「冬の夜」について申し上げておきませう。御存知の方も多いと思ひますが、一番は

燈火ちかく衣縫きぬふ母は 春の遊びの楽しさ語る

居並ぶ子供は指を折りつゝ、日数かぞへて喜び勇む

囲炉裏火はとろとろ 外は吹雪

非常に素朴な、情感のあふれた歌ですね。この一番には心温かな母親の姿が描かれてゐますが二番では父親が主題になります。

囲炉裏のはたに縄なふ父は 過ぎしいくさの手柄を語る

居並ぶ子どもはねむさ忘れて 耳を傾けこぶしを握る

囲炉裏火はとろとろ 外は吹雪

ここには当時の国民がどういふ気持ちで日露戦争をうけとめてゐたかが、実によく表現されてゐると思ふのです。この歌が作られた時から数へて七年前、過ぎしいくさで立てた手柄を語る父親の姿に、子供たちは目をぱちりと開いて、父親を見つめ、さうして耳を傾けて父親の話に聞き入り、こぶしを握って誇り高い父親の功績を幼い胸の中にかみしめるのです。これは好



戦的な歌でも何でもない。時代の真実のすばらしい表現だと思ひます。水師營の会見の歌と一緒によく味はって下さい。

### 国と国とのつきあひ方

ではこれと同じことを国と国との付き合ひについて考へたらどうなるか、それが次に申しあげたいことです。国と国の場合も一般には食ふか食はれるかといふまことに殺伐な形にとらへられているやうです。しかしこの場合もさまざまな民族が一緒に励まし合つて生きてゐるのがこの地球ではなからうか、さう考へていかうではないか、私はさう思ふのです。もっともこのことは一般に言はれるやうに「世界中のさまざまな国は、お互ひに對等の資格をもつて扱はれなければいけない」といふ国家間の権利の主張とは少しちがひます。勿論對等であるのは結構だが、そのやうな建て前論よりも、もっと内面的にお互ひの国が尊敬しあふやうなつきあひ方をしなければいけない。すなはち、黒上先生のお言葉をおかりすれば外的な平等ではなく内的な平等感を国際間においても確立しなければならぬ、さう思ふのです。その為には優越感をもつて相手に接したり、卑屈な態度で相手の機嫌をとつたりするやうな姿勢をすべて改めなければなりません。その内的な平等といふことを考へないで、外側だけの権利の平等といふやう

なことばかりを叫んでゐる人がいかに劣等な精神状態にあるか、それを直ちに見破らなければならぬ。それは個人間のつきあひと全く同じです。如何に相手が力をもつてゐようと堂々と立ちむかふし、弱い国にむかつていたはりの心を無限に發揮するといふ、さういふ人間本来の姿、それが国際平和を維持する原則でなければなりません。

なほ国際間の問題を考へるときに、われわれが平和を願ふのは当然ですが、そもそも平和とは何ぞやといふことについての考へが余りにも浅薄になつてゐることを深く反省しなければなりません。すなはち人々は戦争のない状態、それが平和だと單純に考へてゐる。だが一体現世界の各国が現状のまゝであり続けさへすれば、それが平和の名に値するのでせうか。さうなれば国家の興亡もなくなるし、怠惰な国民も勤勉な国民も、その報いを受けることなしに、たゞ現状通りに存続し続けるといふことになるのですが、一体それでいいのか、人類の歴史は長い長い過去にさまざまなことを経験してをります。その中には幾多の戦争が行はれたのですが、それもふくめて民族と民族の激しい接触の中に切磋琢磨が行はれ、さうして人類はここまで生きてきた。私はこの実人生的な国際間の諸活動の中に息づいてゐる理念として、「平和の意味合ひ」を考へ直すべきだと思ふのです。とすればそこに求められる平和、それは先程から申し上げてまゐりました、個人一人一人の生活の中で希求する平和と同じ内容のもの、それを基幹とするものでいいのではないか。単に戦争のない状態といふだけではなく、もっと高度の「心

の平和」を、もう一度かみしめてみなければいけないと思ふのです。

### 国を成立させる三つの要素

次に私たちは「国」といふことをいま一度考へ直してみなければいけないと思ふ。通常、国家といふものは、土地と人民と主権の三つの要素から成り立ってゐると言はれます。しかしこれでは具体的にこの世に生き続けてゐる国家そのものを理解するにはまったく不十分です、それに固執しますと、間違つた国家観におちいると思ふのです。勿論国家成立の三要素、それはそれで間違ひではないでせう。しかしこのやうな、どの国にもっていても適用するやうな普遍概念だけで、具体的な、生きてゐる国そのものを理解することは到底不可能です。もしこの普遍概念に固執すると、結局どの国も単に同じ資格で平等にならんでゐるといふことになつてしまふ。かうして一つの国は地球上にたくさんあるうちのひとつといふことになる、とすれば人々がその部分的なものに命をさゝげるといふのはばからしいと考へるのも無理もないといふことになるのです。それで私はそのやうな三要素ではなく、「国家とは一定の土地、一定の言語、一定の伝統といふ三つの要素から成る」といふやうに考へるべきではないか、そしてその各々の「一定」の内容について正しい認識が立てられなければならない。さうしてはじめて国

家といふものの本当の姿が見えてくるのではないか、さう思ふのです。ここでは日本の国についてこの「一定」の内容を考へてみませう。

まづ日本は、南から北へ細長くつゞく日本列島といふ一定の土地をもつてをります。真中に山脈が走つてゐるため、川の流れは早く、澄んだ美しい水が流れてゆく、大陸からの風、南方からの季節風、台風、さらに国の周囲を流れる寒流、暖流、それら数多くの條件のもとに春夏秋冬、さまざまな、きめこまかな季節の変化が見られる。絶えず気候が変化していきますから、次に訪れてくる気候の為に常に心の用意をしてゐなければ自然の動きについてゆけない、そして刻々に変化する自然に接してゐるため、今日といふ一日を最も充実して過さうとする意欲、そして次の状況に常に対応しようとする進取の気象と柔軟な思考法を身につけることになつたのです。従つてもし万一、日本人がこの日本列島を追はれてしまふやうな事態が生じれば、日本人はもう日本人ではなくなるのです。この私たちをとりまいてゐる日本列島の自然がどれほど私たちの心に強い影響を与へてゐるか、よくよく考へていたゞきたいのです。

次に一定の言語。私たち日本人はいふまでもなく日本語で話しあつて生きてゐる、この合宿では言葉をきびしくみつめ、大切にしてみますので一層その感が切実にされると思ひますが、日本語は日本列島に住みついた人々がこれまで育ててきたもの、地球上どこにも存在しない、たゞ一つの言葉、それは日本人をして日本人たらしめてゐるもの、日本人のいのちそのものな

のです。ここでは日本語のもってゐる大切な特徴を二、三あげておきませう。その一つは人間関係を表はすことばです。すなはち一人称、二人称、三人称が実に複雑に表現されてゐることです。例へば一人称は英語では I<sup>アイ</sup>一語なのに、日本語では「私、僕、われ、わが輩、拙者、おれ、手前、身ども……」数をあげてゆけばきりがありません。何故こんなに沢山の言葉が生まれたのかそれは日本人が人と人の付きあひをこの上もなく大切にしてきたからだと思ふのです。付きあふ相手次第で直ちにこちらの心をととのへてゆく、その気持がこのやうに沢山の言葉を生んだのです、さういふことを民族全体が納得してこれまで何千年、何万年といふ長い月日をすごしてきたのです。さらにこのことは、一つの事実に対して一つの言葉を用意するといふやうに、共通性に流れることなく、個々の具体性をじつと見詰め、大切にするといふ民族の性格も示してゐると思ふのです。

又このことと関連しますが、現在、一般に個人とか社会とかいふ言葉を使って人間関係を説明しますが、元来日本語にはこの個人とか社会とかいふ言葉はなかつた。私は父に対しては子であり、妻に対しては夫であり、先生に対しては弟子である、そのさまざま人間関係が同時に成立してゐる、それが私といふ一人の人間なのです。それを日本人は個人といふ抽象化された形ではとらへなかつた。常に具体的な人間関係の中で見つけてきたのです。社会といふ言葉も日本人が昔から使つてきた世の中といふ言葉と比較しますと明らかな抽象的性格がある。そ

ここに日本語の特徴、日本民族の性格があるといへると思ふのです。

ここまでお話しすれば、次の「一定の伝統」はすでにその中に含まれてゐるのがおわかりだと思ふのです。例へば日本には科学が発達しなかった。それを人々は非常にいけないことのやうに言ふのです。しかしいまのお話でおわかりいたゞけたと思ひますが、日本人は共通性を求めるよりも、個々の具体的な事実の微妙なニュアンスの相違に心をとめてきた。そのこまやかな違ひを正確に把握したのが日本民族であつたといふことと不可分の関係があると思ふのです。だから多くの現象の中に共通の規範性を求める科学といふ学問は発達しなかつたけれど、科学の基本である、対象を観察するといふ力についてはすばらしいものをもつてゐた。従つて明治になつて西洋から科学が輸入されると直ちにこれをマスターすることが出来たと思ふのです。良きにつけあしきにつけ、日本人はこれまでつみ重ねられてきた伝統の中でしか生きることが出来ない。その伝統が日本といふ国家を成り立たせてゐる不可欠の要素なのです。

なほこれはいふまでもないことですが、人々は自分の国を理解出来る素質を充分にもつてゐる。しかし他の国については全くレベル以下の理解しか持つことが出来ないし、また持てないのが当然であるといふ、はつきりした自覚をもつことが肝要事となるのです。すなはちどこの国の人々も自分の国のすばらしさを理解するいとなみをつゞけてゐるし、日本人である私たちも、それに負けないやう、それ以上に日本のすばらしさを理解していかなければいけない。た

だ他の国に対してはレベル以下の理解しか出来ない、それはやむを得ないことですし、それが現実なのです。といふことをはっきり認識すれば日本人が世界に貢献する道は、底の浅いコスモポリタンの生き方ではなく、日本の国の働きを通じて行ふ以外にはない、といふことがはっきりわかってくると思ふ。私達はこのような基本的な認識をしっかりと身につけなければいけないと思ふのです。

### 物質文明と精神文明

かうして私たち日本人は、日本人としての自覚を正しく持つ必要に迫られてくるわけですが、それには先づ第一にどういふ心構へが必要か、それを私はレジメに「物質文明の進歩に伴ふ精神文明の混乱と退歩に目を向ければ心は晴れやかに新しい進路に向ふことが可能となる」と書きました。といふのは日進月歩に進歩してゐるのは物質文明だけの話で、精神文明は逆に退歩してゐるといふことに気づいてほしいといふことです。早い話が、ソクラテスと釈迦と孔子とキリストの四聖人はキリストを除いては、紀元前五〇〇年前の人、キリストはいふまでもなく今から二〇〇〇年ほど前、いづれにしてもこのやうなすぐれた人が生きてゐた時代は遠い遠い昔、そのころ精神文明は大変なレベルに達し、それ以後の人類はそれらの聖人を仰ぎ、そ

れを生きる道のよすがとしながら生きてきたのです。日本でもすべての人が生きてゆく規範として仰いできた聖徳太子は千三百年昔の人です。

そのやうな心を整へたあとで「一定の土地、一定の言語、一定の歴史伝統」につながってゐる自己を、しっかりと自覚し直して出発し直さなければいけないのです。さらにここで特に申し上げておきたいことは、日本といふ国家を考へる際には天皇に対する見方を正すことがその眼目になるといふことです。見方を正すといふことを端的に申し上げれば、これまで外来思想をうしろだてにして論じられてきた天皇観に訣別して、日本人本来の、わが祖先たちの天皇観を謙虚に学び直さなければいけないといふことです。

精神文明も時が経つにつれて進歩してきた。従つて昔の人の考へは幼稚だったと考へる人には天皇を遠い昔の人が尊敬してきたといつても何とも思はないでせうが、昔の人の精神のレベルの高さを思ふ人は、昔の人が尊敬し大切にしたものももう一度その理由を自分の目でたしかめなければいけないと考へるはずで、かうして私達は正しい研究のスタートに近づくことになるのです。現在は天皇ときへ言へば逆コースといひ、過去の迷妄そのものだといふやうな考へが教育界、思想界を支配してゐるやうですが、私達はこのやうなとんでもない錯覚から一日も早く脱却しなければなりません。

昭和五十年、歌会始の折に今上陛下は、「祭」といふ題で



わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

とお詠みになってをられます。宮中には天照大神を祭る皇霊殿、三種の神器の鏡をお祭りしてある賢所、さらに天神地祇をお祭りしてある神殿といふ三つの社がございますが、陛下はこの三つの社に毎朝御参りになって、ご祖先の神々に国と民の平らぎをお祈りになってゐらっしゃいます。「祈る朝々」といふ御言葉に限りない大御心を偲ばせられます。その天皇様が元日の朝まだき、皇居内の御宮にお参りになるため出発なされる時、皇后様がその御様子を御覧になっておよみになった歌が

星かげのかゞやく空の朝まだき君はいでます歳旦祭に

といふ一首です。

この両陛下の清らかな御歌、そこには一点のかげりもない。まさしく無私の心によってのみこのやうなお歌が生れてくる、と思はれます。理論はいろいろございませうが、私はそこにこそ天皇さまの御政治の基本がある。天皇の問題について詳しく申し上げる時間はございません

が、ここにしっかりと視点を据えてさらに勉強をつんでいたゞきたいと思ひます。

### 国家防衛について

最後に国家防衛の問題について一言申し上げておきます。皆さま御存知の通り、北方のソ連から迫ってくる脅威に対して、自国防衛の義務が叫ばれてをります。だがこの事態に対して自衛隊が防衛機能を十二分に発揮し得るためには一体何が最も重要な課題なのか、そのことについてさまざまな議論が行はれてゐる。特に現在にはそれに対して防衛費をGNPの何パーセントにするかといふ議論が盛に行はれてゐるやうです。勿論そのことも結構でせうが、何といつてもいまだ大切なことは防衛の第一線に馳せ参じる人々、それは自衛隊の人々だけではなく、いざといふ場合には国民全部をふくむわけですが、その人達が果して国のために命を捧げて悔いなしといふ気持になれるか否かといふこと、そのことにつきるのではないでせうか。そのことを不問に付したまゝで防衛費のことだけが問題になるといふのはどう考へてもおかしい。このやうに言へばそれは愛国心の欠如の問題であらうと言はれます。たしかにさうなのですが、私がここで問題にしたいのは、愛国心といふより、私達が生命を捧げる対象そのもの、国そのものが空漠としてゐるところに問題がありはしないかといふことです。祖国防衛といつても、「祖

「国日本」の意味内容が多種多様に放置されたまゝであつてはどうにもならない。さういふ意味で、私はこれまで、国家の問題、天皇の問題を考へなほしていたゞきたいと申し上げてきたのです。

国を守るために命をかけなければいけない。人の命は地球よりも重いといふ、しかしその重い命を捧げてでもなほかつ国を守らうといふ気持が生れなければ、国家を防衛することは出来ないのです。祖国のために命をかけなければいけない時が自分の一生に必ず一度はあるはずだ。それは決して日本だけではない。これまで何千年の間、全人類すべてが経験してきた厳粛な事実です。さういふことを全く考へないで生きてゐる、自分の生涯にそんなことはあり得ないのだと考へてゐるのは、何千年、何万年の歴史を通じて、昭和二十一年以来の日本人だけではなからうか。たしかに日本は周囲を海にかこまれてゐますから、これまで外敵を強く意識しないで生きてきたやうに思ふ人があるかもしれない。しかし事實は決してさうではなかつた。命をかけて国を守らうといふ気魄があつたから、外国が攻めたくても攻めてこなかつたといふことだつて何回もあつた筈です。上代から幕末に至るまで、さういふことは沢山あつた。さういふ外敵の力を国家防衛の強靱な意志ではねかへして日本はこれまで生きてきた。しかしその時代の人々にとって守るべき祖国の姿、命を捧げるべき対象は実に明確だつた。しかし現在はそれが実に曖昧になつてしまつてゐる。これでは、日本人本来の、伝統的な、没我報国の死生

観が躍動するといふことは殆んど不可能だと思ふ。この問題についての対応の急務が、今日ほど要請されてゐる時はない。今日の演題を「今こそ、日本への回帰を」とした所以です。



講

義



# 世界の平和に貢献する道

—国際情勢と日本の対応—

元外務次官・元駐ソ連公使参事官

法 眼 晋 作



観音堂の庭 I

最近の国際情勢

バランス・オブ・パワー

自衛力の増強

ソ連は防衛的な国か

北方領土問題

△質疑応答▽



まづ最初に申しあげたいことは、私は七十才、次第に老齢化するわけでございまして、我々のあとを継いで日本を背負って行くのは若い皆さんを措いてはないわけです。どうかこの上でもご研鑽をお願ひしたいと思います。

現在の日本は大変な局面に立ってゐると思ひます。日本のみならず世界の国々は、これで平和を維持できるのか、また人々は人たるに値する生活を今後続けることが出来るのか、といふ大問題に直面してゐるわけでありませう。

一九八〇年代においては何が大事な問題かといふ質問をされますと、私はつねに、第一はソビエト社会主義共和国連邦を中心とする勢力に対して、日本を含めて自由と平和を愛する国々、人間の尊重と申しますか、人道主義に基く国々は、いかに対応すべきであるか、それが第一の問題であると考へ、またさう答へてまいりました。

第二はエネルギー問題の解決です。エネルギーの主要な供給源である石油は、産油国が法外に価格をつりあげてをります。七十三年から始つた第一次石油危機では、価格を四倍に押し上げ、最近でも二倍にあがってをります。産油国はオートマティックに価格をあげようと考へてゐるのです。

先般のベニスのサミット会議において「石油消費は全エネルギーの五十三%を占めてゐるが、今後十年間にこれを四十%まで引き下げたい。そのためには石油消費を節約し、代替エネルギーを開発しよう」といふことを決めました。大変結構なことだと思ひます。なぜか、それは石油依存の程度を下げれば、需要供給の原則に基いて石油価格が決るといふ経済法則が適用されることになるからです。

この世の中に経済法則が機能することは極めて大事なことです。就中、基礎物質たる石油がその法則を無視して価格があがっていく、といふことについては、我々は一考も二考も三考もしてその対策を樹てねばなりません。私は、石油消費を節約し、代替エネルギーを開発する——その結果として産油国の無法な要求によって世界経済の発展が阻害されることの無いやうにしたいと思ふのです。

### 最近の国際情勢

#### ハソ連の緊張緩和（デタント）政策▽

従来人々、特にマスコミは、世界は緊張緩和に向つてゐると言つてまゐりました。ところで戦後から今日まで、局地戦争といふものが十回以上もありました。朝鮮戦争、インド亜大陸に

おける戦争、アラブ・イスラエル戦争、その他アフリカにおける戦争等々です。しかもその中の二、三の戦争は、ソ連が背後から教唆してやらせた形跡があります。ソ連は自らが世界の緊張を激化してゐる——にも拘らず「緊張緩和」を唱へる。これはどうしたことだ、それを考へなければ我々は実態を把握することができません。

「緊張緩和」といふのは、ひと口で言へばソ連の外交政策なのです。ところが世界の人人は、ソ連の外交政策を緊張緩和そのものと混同してきたのです。世界各国には共産党などのソ連を支持する勢力、進歩的文化人、また不勉強な学者もゐます。それらの諸君がソ連に同調して緊張緩和を唱へるものですから、人々は本当にソ連が緊張緩和に向つてゐると錯覚したのです。

私がかねがね申してゐるのですが、ソ連の指導者の発言を、その原文について研究すれば判断を誤ることは少いのです。それをしないで、第三者の頭の中を通過したものを読んで判断するから誤つてしまふんです。

事実「緊張緩和」を唱へながら、ソ連は一九六〇年代の中ごろから軍備拡大に狂奔してをります。一般にはソ連の軍事費はGNPの十三％程度と言はれてゐましたが、最近の英国戦略研究所の報告によれば一九七五年には十五％に達し、本年は十八％に達するであらうといふことです。

例へば次のやうなことがありました。ソ連では五年に一回、共産党大会を開きますが、七年の第二十五回共産党大会においてブレジネフは、「ソ連は今後とも緊張緩和の政策を続ける。この政策がソ連と共産圏全体の利益になった。」と演説してをります。

ところがそれより三年前、七十三年にプラハで行はれた共産党の首脳会議において、ブレジネフは秘密演説をしてゐるんです。これをイギリスの情報部がキャッチしてアメリカのCIAへ持ち込みましたが、キッシンジャーはこれを見て、「ブレジネフは他の共産党の首脳をなだめるためにこの演説をしたのではないか。」と言って採りあげなかつた。

そこには何が書いてあつたかと申しますと、ブレジネフ曰く「諸君はデタントが早く進みすぎで驚いてゐるかも知れない」と。なぜかと申しますと、この前年に米ソの第一次SALT（戦略兵器制限条約）が成立、その直後だつたからです。「デタントが早く進んだから諸君は当惑してゐるかも知れないが、実はこのやうな緊張緩和の政策はソビエトの軍事力と経済力を増強するための大戦略である。フルシチョフが握りこぶしを振りあげて達成しようと思つてゐたことを可能にする大戦略である。従つて一九八六年までにはソビエトは十分に強大になつて、世界の至る処で相手に対して自分の政策を押しつけることができるやうになる。これぞ諸君と我々の共同の利益ではありませんか。」と、かう言つてゐるのですね。キッシンジャーは、これを他の共産党をなだめるためのジュスチャーだと判断したにも拘らず、その後の事實はブレ



ジネフの言葉が嘘でなかったことを証明してきてゐるのです。

ところでなぜイギリスはこの秘密情報をキャッチできたのでせうか。私の解釈によれば、共産圏諸国の指導者といへども心からソ連に心服してゐるわけではない。チェコの如きは五個師団のソ連軍が駐屯してゐてどうにもなりません。従つてもしこのブレジネフ演説の通りになれば、自分たちは永久にソ連の桎梏から逃れることはできない。だから彼等は秘密演説を流すことによつて、自由諸国に警告を發したのではないか、私はさう思つてゐます。

問題はいかういふ実態が事実だといふことです。私の結論は、「ソ連が核兵器と通常兵器の分野に於て、軍備縮小を自らやらざれば、ソ連の唱へる緊張緩和は絶対に信用できない。」といふことです。私はかういふことを、日本人は勿論多くの外国人に対しても前々か

ら言ってきました。

### △米国の自信喪失▽

かつてのアメリカは世界の指導者として自信をもってをりました。しかし戦争目的の明確でないベトナム戦争に巻き込まれ、次第に自信を喪失してまゐります。五万五千の若者を戦死させ、多数の負傷者を出し、一五〇〇億弗もの軍事費をつぎ込みながら、遂に一九七五年撤退を余儀なくされました。およそ戦争遂行のためには、戦争目的が明確でなければ国民はついてこないのです。

このアメリカの自信喪失は、ソ連に大きな利益をもたらしました。ソ連は爾来、アンゴラ、エチオピア、南イエメン等にキューバによる代理戦争をもって介入しました。キューバはなぜ代理戦争をしたのか。私は、それは血債とでも名づくべきものだと思います。キューバは二十数年に亘ってソ連から莫大な援助をうけましたが、それが返済できない。だから勇敢なる国民の血をもって贖ふ、といふ形でソ連のための代理戦争をやってゐるわけです。

ところがその間アメリカは何らのなす術もなく終始してまゐりました。それはその自信喪失症の故なのです。かうしてソ連はアンゴラ等三国に介入して一応の成功をさめることが出来ました。そこで、アメリカの大きな反対はないだらうと思つてやり始めたのが、今回のアフガ

ニスタンへの侵略なのです。

△ソ連のアフガニスタン侵略▽

ソ連のアフガン侵略は、事件を年代順にたどればわかるのですが、ソ連の自作自演、自らが演じたドラマだと言ふことができます。

私は三年前、一九七七年に招待されてアフガンを訪問しました。私どもの国際協力事業団が経済協力をしてをり、そのための視察にでかけたわけです。ホラムといふ計画大臣が私のホストでしたが、そのホラム大臣との会談中に、突然拳銃を持った男が侵入してきました。私はこんな時には周章あはててはいかんと思ったので、黙って知らん顔をしてをりました。男はホラム大臣と議論を始めましたが、しばらくして表へつれ出しました。それから数刻の後、ホラム大臣は路上に引き出されて射殺されました。

では何故アフガンの国内はこんなに乱れてゐたか、当時からはっきりしてゐたことは、ソ連勢力のアフガンへの侵入です。七十八年四月末のダウド大統領を殺害した革命は、ソ連の援助によること歴然たるものがあります。そのソ連の援助をうけてできた共産政権は何をやったか。土地所有権の没収、男女同権の強行、宗教の弾圧です。男女同権は望ましいけれども、後進の封建社会で強行すれば反撥が生じます。そしてゲリラが発生する。かうしてダウド大統領

を殺害して政権を獲ったタラキ政権も、タラキを殺害して政権を獲ったアミン政権も、共にどうにも制圧できず、ソ連に援助を求めました。筋書きがうまくできてゐるんです。かうして、あらかじめ結んでおいたソ連・アフガン善隣友好協力条約といふものがありますが、その条約を援用してソ連の援軍がカブールに着いたのが昨年（一九七九年）十二月末のことでありました。（ソ連は同じ友好協力条約を日本にも提案してきてゐます。日本の中でもこの条約を結べと言ふ諸君もをりましたが、今はふっ飛んでしまひましたね。）ソ連は「わが出兵によってゲリラは鎮圧できる」と思つてゐたのでせう。しかしここでソ連は三つの誤りを犯しました。

一つはアフガン国民の反対がそれ程強いとは予想してゐなかつたことです。ソ連においては、政府に都合の悪い報告はあまりなされならしい——それは担当者が減点されるのを恐れてゐるからだ、と私は推測してゐるんですが、それは兎も角、ソ連が弾圧すればする程ゲリラは強くなりました。アフガンの全国民が反ソなのです。ゲリラは、ゲリラだけでは活動ができません。水の中を泳ぐ魚の如く、水がなければゲリラは泳げません。水とは国民全体です。だからゲリラは何処にでも泊れるし、食糧も手に入ります。現在ソ連は、このゲリラ討伐のために極めて残酷な手段をとり始めました。南部では村全体を焼き払ってゲリラを討伐しました。ソ連やベトナムは、自分たちの野望を達成する為には、いかなる非人道的な手段をもとりかねない国だ、私はさう思つて見てをります。



第二の誤りは、非同盟諸国の反対があれほど強いとは思はなかったことです。国際連合で一〇四対十八でソ連を糾弾する決議が通りました。もっとも国連総会の決議は勧告以上の力をもつてをりませんから、強行できないわけですが。

第三の誤りは、アメリカの反撥があれ程強いとは思はなかったのです。オリンピックの不参加を呼びかけるとか、穀物輸出を禁止するとか、いろんな措置を講ずることによってソ連は次第に困ってきてゐることは事実です。

ソ連はそれにどう対処しようとしてゐるか。まづソ連がやったのは愛国心の喚起です。元来ロシア人といふのは愛国心の強い国民なんです。共産党は嫌ひでも、こと祖国の危殆にかかはる時には起つといふのがロシア人なのです。ヒトラーがソ連を攻撃した時も「祖国防衛の戦争」と名づけて戦ひ抜きました。しかし現在までのところ、ロシア人の愛国心に火をつけるまでには至ってをりません。私の推測ですが、六十年を超える共産党の政治といふものは、国民を押しやる措置によって運営してきた。従つて多くのソ連人の十分の賛成は得られてゐない、と私は見てゐるわけです。愛国心がまき起らぬ所以であります。

バランス・オブ・パワー

国際情勢の動きは以上のやうなことです、そこでいかにして平和を守るかといふ問題です。私は、広い意味におけるバランス・オブ・パワーが維持されてゐることが必要だと思ひます。バランス・オブ・パワーといふ觀念には数多くの要素があります。軍事力、外交努力、経済努力、文化交流等々です。

科学技術の進歩によって世界は狭くなつてきてをりますから、アジアにおけるバランスが壊れれば他の地域にも影響が及ぶ。他の地域のバランスが崩れればアジアも影響をうけるといふわけで、日本としてはアジアにおけるバランス・オブ・パワーの維持強化に力を注がねばならぬことは申すまでもありません。

#### △中国との関係強化▽

まづ外交努力について申しますと、第一は日本と中国との関係をより緊密にすることです。中国は共産主義の国です。そのことからいろいろ議論が出てくるわけですが、私は中国のやることを見てみると、次第に変わつてきてゐるのではないか、といふ印象を持ってをります。

現在の中国を見てごらん下さい。彼らは農業、工業、国防、科学技術の分野で、今世紀中に世界一流の国になりたいと、かう言つてゐるんです。もし彼らが共産主義の手法だけを用ひるならば、到底その目的は達成できないでせう。だから彼らは資本主義の手法を取り入れて大變

な変革をやつてをります。この変革は中国の中に混乱を起すかも知れません。もっとも混乱が起きても起きなくても、日本はこれをコントロールすることはできません。また日本は、彼らの共産主義を変へる力もありません。しかしコントロールできない、といふことに藉口して中国全体との関係を強化することを怠るならば、それは外交とは言へないのです。ソ連に対しても同じですが、共産主義の国だから話し合ひをしない、といふわけにはいかないのです。外交といふものは、倫理観念で律するわけにはいかないのです。

さういふこともふまへて日本がいまなし得ることは、彼らが近代化を達成しようとしてゐる農業、工業、科学技術の分野において、これを援助してやることだと思ひます。



中国との関係を強化するといふことは、巧まずして日本の安全に役立つと私は思ふんです。一つの例を申しあげませう。一九四一年、ヒトラーはソ連を攻撃しました。ドイツ軍はモスコ近くまで迫ったんです。そのドイツ軍が混乱に陥った。なぜか、それはドイツの進攻する右の脇腹に黒海がある、その黒海の制海権、制空権をドイツは取つてゐなかつたからです。現在、ソ連はシベリアを東進して太平洋に出ようとしてゐる。その横腹に中国がある。これはソ連に対して非友好国である。その中国が次第に国内を整へて安定するといふことは、独ソ戦における黒海と同じやうな働きをすると私は見てをります。しかし私たちはいまそのことを言ふ必要はありません。黙つて我々は中国を経済的により進み、より安定した国にするために協力すればいいのです。

さういふことを言ふと必ず二つの反対があります。一つの反対は「法眼さん、そのうちに中ソはまた仲好くなりますよ。その時はどうするんですか」といふことです。それに対して私はつねにかう答へてまゐりました。

「将来中ソの関係は修復されるでありませう。しかし中ソがかつての所謂一枚岩になって、日本を含む他の諸国に敵対することはないでせう」と。なぜか、それは過去においてソ連から蒙つた中国の損害、これはもうこりこりだ、といふのが私の接触したすべての中国人の気持ちでした。

その第一には朝鮮戦争があります。これはスターリンが毛沢東と金日成を教唆してやらせた戦争です。ソ連は大量の軍需物資その他を送って中国の義勇軍と北鮮軍とを援けました。ところが戦争が終った後は、この借金を仮借なく取り立てたのです。中国人が「俺たちは血を流して戦ったんだぞ」と言っても、少しも待ってくれなかった。これは中国人をひどく怒らせました。

第二は、ソ連は中国に対して「海軍を合同しよう」と提案したんです。大きな海軍国と弱小の海軍国が合同すれば、大きい方にその海軍を差しあげたことになりますね。これは毛沢東以下をかんかんに怒らせました。

続いて始ったのは経済協力の中止です。ソ連の専門家は全部引き揚げてしまった。建てかけの工場や建物が完成しない。はじめから造ってくれなかった方が余程いいですね。しかもその代価を仮借なく取り立てる。これでは到底相手にならない国だといふのが、中国人のソ連観なのです。

第二の反対は「法眼さん、台湾をどうしてくれるんだ。敗戦に際しての蒋介石の恩義を忘れることはできませんよ」といふ意見です。私は「いや、いくら中国との関係を強化しても台湾は沈没しません。」といふ答をしてまゐりました。

私の見るところでは、中国は台湾を武力解放することは考へてゐないと思ふんです。彼らは

熟した柿が落ちる如くに時期を待つてゐる。熟柿主義です。将来のある日、何年先かはわかりませんが「北京と台北は話し合ひを始めた」といふニュースを見るのがおちではないでせうか。これを軍事的に見れば、海からの脅威を考へる場合に、中国は台湾をそのままにしておいた方が有利なんです。香港もそのままにしておいた方が有利と同じことです。九竜半島の租借期間はあと十数年ですが、中国は干渉しないでせう。なぜか、香港は繁栄してをり、外貨の供給源です。今のままにしておいた方が中国は有利なのです。

余談になりますが、蔣介石は偉かったと私は思ひます。なぜかと言へば、蔣介石は「中国は一つである。俺は中国大陸を支配してゐる。その主席だ」と、かう言ひ続けたからです。これは擬制、つまりフィクションなんです。国際関係の大道といふのは擬制を嫌ふのです。現実には支配してゐない中国大陸を自分のものだと言ひ張られては困るんです。しかし蔣介石はあくまでさう言ひはってきた。もし蔣介石が「現実に支配してゐる島だけで満足だ」と言ったならば、二つの中国が誕生し、蔣介石は中国の歴史において、中国を二つに割った謀反人だといふ判定を受けたでせう。蔣介石はそれをしなかつた。蔣介石が偉大だったと言ふのは、歴史に対する責任を明確にしたからです。

その蔣介石の偉大さの故に、日本を含む世界の国々が国連における中国問題で奔命に疲れました。しかし今はもうその時期はすぎたと思ふ。私は、将来必ず中国と台湾は一緒になると

思つてゐます。

△朝鮮半島の安全確保▽

外交努力の第二は韓国との関係です。一九五〇年、さき程言及しました朝鮮戦争が起り、一時は北の勢力が釜山まで進出し、日本は恐慌をきたして大変騒ぎました。まさに朝鮮半島の安危は、日本の安危にかかはる問題なのです。

現在の韓国は朴大統領の暗殺以来、困難な事態が続いてゐて、多くの諸君はこれを排撃する意見を發表してゐます。にも拘らず、私は韓国政府に同情的に見てゐるんです。彼等の考への背景をなしてゐる朝鮮戦争の被害は実に甚大であつて、その危機感といふものは我々が考へる以上のものなのです。

私は外務省をやめた直後韓国政府の招待をうけて訪韓しました。金鐘泌首相とも会談しましたが、曰く「日本や欧米は韓国問題を随分と議論なさるけれども、非常事態が起れば一番被害を蒙るのは我々ですよ。あの朝鮮戦争を忘れてはなりません。我々の身になって考へて下さい」と。たしかに現在は一箇師団の米軍が駐留してをりますし、中国の華国鋒首相も発言してをりますやうに、北からの攻撃は当面ないと思ひます。しかし韓国の為政者が、その危機を考へすぎるといふことは無理からぬことだと思ふのです。

その韓国内政が安定し、経済も安定するのが先決です。現在激しいインフレですが、その安定に協力することが日本としては大事なことです。国際協力事業団も技術協力をしてをりますが、ヘクタール当りのお米の生産量は世界一で、日本を凌駕してをります。彼らは勉強します。韓国人は非常な勉強家であるといふことを、私は高く評価してゐるんです。

南北の統一は時間のかかる問題です。北と南との政権が極端に違ふわけですからね。東西両ドイツのやうに仲好く国連に加入すればいいのですが、それも難しいでせう。

#### △東南アジアの諸問題▽

ASEAN（東南アジア諸国連合）は一九六七年、シンガポール、マレーシア、タイ、フィリピン、インドネシアの五ヶ国が反共の立場から結成しました。このASEANとの関係を重視しなければなりません。ただASEANの中には混乱してゐる国があります。インドネシアに対しては日本は大きな援助をしてゐるのですが、そのGNPはさっぱり伸びません。フィリピンは国内の政争が激しく、まだ戒厳令が続いてゐます。現在のところ一番混乱が続いてゐるのはタイで、それは爆発的な難民の流入によるものです。その原因は、ベトナムのカンボジア侵略から生じてゐるわけです。

しかしこのやうな国内の混乱にも拘らず、幸ひなことにASEAN全体としては、外からの



脅威に対して結束して対抗しようといふ動きが強まってをります。

日本もタイに流入する難民の救済について具体的な方策を講じてゐます。しかし、その原因を作つてゐる当のベトナムは、難民によつてどんなに多くの国々が被害を蒙つてゐるかといふことを理解しようとしなさい。ベトナムは本当に困つた国なんです。

アメリカが七十五年にベトナムを撤退した時、長年ジャングルで戦つてゐた兵士たちの動員を解除し、家庭に帰したらよかつたんです。さうすれば南ベトナムは豊沃ですから農業生産もあがつた筈です。それをしないでソ連の援助に頼つてカンボジアを侵略した。この事實は、何としても許されないことです。

カンボジアのポル・ポト政権は悪逆無道なことをやりました。我々はそれを容認するわけではありませんが、だからと言って他国を侵略して併合しようとする——これは断じて認めることはできないんです。

### 自衛力の増強

平和を維持するためには、あらゆる方策によるバランス・オブ・パワーが必要だと申しあげましたが、その中核は何と言つても軍事的バランス・オブ・パワーであります。そこで自衛力

の増強が問題になるわけですが、多くの人々はその自衛力を無視して議論してゐるのではないでせうか。新聞によつては自衛力の増強を悪徳の如く書いてゐます。彼等は最優先すべき国防を何と心得てゐるのでせうか。

自衛力の増強といふことは、アメリカから要請されてやるといふものではないはずで、ところが過去にはあまりもアメリカの圧力を利用しすぎました。元来自衛力といふのは我々自身の問題ですから、世界の現状を見れば当然そこに到達しなければいけないはずで、それを一日のばし二日のばしにして、偷安の夢をむさぼってきたのが今日までの日本ではなかつたでせうか。

日本の積極的な努力によつてアジアにおける軍事バランスを維持し、より強固にする。軍事バランスを怠つたならば、バランス・オブ・パワーにおける他の法則、即ち外交努力も経済協力もすべて徒労に帰してしまふと思ひます。

#### △国を守る気概▽

第一に我々はこの祖国日本を守るといふ精神を堅持しなければならぬと思ひます。我々はこの日本の国土と文化伝統を先祖から受け継ぎ、また後々の世に引き継いで行く、その責任を先づ自覚しなければなりません。

しかるに先般の世論調査によると「日本が他国から攻撃された場合、自ら武器をとって守る」といふ人は僅かに三十％にしかすぎないのです。アメリカ国民の世論調査における「日本はアメリカにとって大事な国だから、日本を援けるためには武器をとって戦ふ。」といふアメリカ人のパーセンテージの方が多いいですよ。これは何たることですか。自分の国は自分で守るといふこと、本然当然のことではありませんか。

さういった意味の国民精神、国を守る気概といったものを、今後大いに振興しなければいけないと痛感してをります。

#### △日米安全保障条約▽

日本は敗戦の結果、平和主義の国になりました。しかし平和主義といふことと、自衛力の強化といふことは矛盾するものではありません。むしろ確固たる自衛力を保持してゐることが平和主義を助長する所以だと思ひます。

ただ現在は、どこの国でも自分の力だけで十分に自分の国を守ることはできません。従つて我々は真の意味の自由を愛し、自由経済を尊重する国々、さういふ基本哲学をもつてゐる国々と相結ぶことによつて、日本の安全を、アジアの軍事バランスを維持するに必要な措置を講ずることが大事だと思ひます。

幸ひなことに我々には日米安保条約といふものがあります。日米安保条約はアメリカから押しつけられたものではありません。私は、日米安保条約こそ日本の自主外交の極致だと思ふのです。日本の選択なのです。

日米関係については「アメリカは日本を援けざるを得ない」といふ関係にしておくことが大事なんです。現在自動車の輸出、電々の資材調達などで多少の摩擦を生じてゐますが、日米経済は相互に扶け合はなければいけないと思ひます。お互ひに利潤追求のみに急であつて相手国の産業をつぶし、失業問題が起るといふことでは世界経済は成り立ちません。調和を図ることが大事ですね。アメリカも世論の国ですから、日米の協調が十分でなくなると「日本を援ける」といふアメリカ人が減ることを考へておかねばなりません。

現に日本に対する侵略があつた場合は、アメリカは支援するとは言つても直ちに即応するとはできません。さういふことからしても我々は当面の侵略を防ぎ得るだけの能力を備へてゐなければならぬのです。人々は日米安保条約は抑止力があるからいいと言ひますが、私は現状では抑止力はないと思ふ。そもそも抑止力とは他から攻撃された場合、それに対して手痛い反撃をなし得る力なのです。それは即ち自衛力なんですが、これを日本としては可及的速かに備へる必要があると思ふのです。さういふことを言ふと「法眼さんは軍国主義者だ」といふ人があります。だが一体軍国主義とはどういふことですか。軍国主義とは、その国の政治経済ま

た教育などを、すべて軍事のために準備し、組織し、軍事力による対外発展を指向する国ではありませんか。私は、自衛力の強化は主張するけれども日本はさういふ軍事大国になることは出来ないのです。核兵器をもたぬ軍事大国はないし、又GNPの1%位を軍事に出して軍事大国といふ国も御座いません。

#### △自衛力増強の優先順位▽

防衛予算はGNPの1%を超えてはいけないといはれてゐますが、防衛予算をGNPの比率で枠にはめるのは間違つてゐると思ひます。十分な自衛力のためにはいくら必要かを算定することが先決なので、その結果がGNPの〇・七%ならばそれでもいいでせうし、算定の結果が二%でなければならぬと出れば、国防は国家存立の基本なので、それもまたやむを得ないではありませんか。

そこで自衛力を強化するについては優先順位を考へねばなりません。日本の地理的關係から考へて、私は海軍、空軍を優先すべきだと思ふんです。勿論陸軍も現在十分ではありませんが、それに比較すれば緊急度は劣るでせうね。

なぜかと申しますと、ソ連の東方計略といふものは昔から變つてゐないと思ふからです。日本が降伏文書に調印した昭和二十年九月二日、その日にスターリンが演説してゐるのですが、

私はそれを見て慄然としました。スターリンは「ソ連が日本を撃つたのは日露戦争の恨みをはらすためだった。日本は日露戦争で南樺太を奪ひ、千島を強化して、我々が太平洋へ出るのをふさいだ。我々の発展の道をふさいだ。」と言って怒ってゐるんです。帝政ロシアの東進政策、それは今日も生きてゐるのです。現在ソ連は国後・択捉に基地を造り、色丹島にも兵を揚げてゐる。これはまさにスターリンの演説通りなんです。敵が攻撃してくるのは北海道だけとは限りません。そこで当面これに対しては海軍力、空軍力を強化して防ぐより他ないのではありませんか。

防大の卒業生は陸軍が一番多い。海軍、空軍を合せたよりも多いのです。ここにも日本は陸軍国だといふ残滓が残つてゐるのです。では何故さういふことになつたか。思ふに、もしも日本が開国した明治の初めに、朝鮮半島には立派な政府があつて干涉の余地がない、中国大陸また然り、といふことであつたならば、日本は地理的關係からいって当然海軍国になつてゐた筈ですね。しかるに朝鮮半島は麻の如くに乱れてゐた。中国大陸また然りでした。当時の世界は弱肉強食の時代で侵略を事としてゐた。それでわが日本は後発の国家として誕生したわけですから、陸軍を多くして大陸発展を指向したのです。その発展が昂じすぎて我々は敗戦を経験したわけですが、現在はさういふ条件がありません。従つて日本の地理的環境からして、私は近代兵器を駆使する海軍、空軍を強化すべきだと思ふのです。

戦車を増強すべきだとの声がありますが、私はかつて苦い経験をもってをります。ベトナム戦争の末期、アメリカからM18戦車の修理を依頼され、相模原で修繕しましたが運び出すことができないんです。一つには抗議デモに邪魔されたんですが、横浜の橋が脆弱でM18が通れない。汽車を利用しようと思ったが、大量に積載すると汽車が動かないんです。一朝有事の際、その戦場へどうして早く戦車を運ぶのですか。日本が戦車を配備してゐる地域に、都合よく敵は侵攻してくるとは限りませんよ。

乏しい財政なので、すべてを一挙に充足することはできません。緊急なものから強化すべきであって、資金を生かして使ふことが特に大事だと思ひます。敵がタンタンと揚陸しようとするときそれを水際で破砕しなければなりません。

### △国民の協力体制▽

世界的規模の大戦略は、あらゆる常識と専門知識、あらゆる科学技術、それらを綜合した深い造詣のもとに策定されるものだと思います。軍人の専門知識に加へて、広い視野に立ったシリヤンの知識、それらの総合的な協力体制が必要だと思ひます。セクシヨナリズムを排した、かういふ協力体制でなければ日本を守り抜くことは難しい、と私は考へてゐるのです。

兵器も旧態依然たるものでは戦へません。日本の兵器産業は進歩してゐるんですよ。なぜ

か、日本の重工業は広い裾野をもっている。その広範な裾野の結晶が立派な発明となって現れてくるわけです。かういふ形での研究を続けて行けば、例へば人工衛生と地上レーダーが連絡することによって、攻撃してくるICBMを撃ち落すことが可能になるわけです。かういった民間企業の活力を活用することによって、新しい兵器を開発する。専門家だけに任すのではなく、皆さんの今後の研鑽と努力によって日本の地理的状况に適合する兵器を開発する必要があると思ひます。

第一次世界大戦のタンク（戦車）はチャーチルが発明したんです。チャーチルは民間人ですよ。ちなみに第二次大戦におけるチャーチル首相とアランブルク参謀総長との共同作業といふものは、大変に模範的でありました。チャーチルは軍事にも堪能な人でしたから、作戦についてもいろいろ意見を述べる。行きすぎがありますと、専門家のアランブルクが押へる。その軍事専門家の発言を、チャーチルは喜んで聞いたといふことです。首相チャーチルと参謀総長アランブルクとの共同作業といふものは、イギリスを救ひました。いや、世界を救ひましたのです。かういふことを、我々は今後の政治家と軍人に期待しようではありませんか。しかし、それをさうせしめるのは他ならぬ皆さんですぞ。皆さんは他人ごとではなく、自分のこととしてお考へ願ひたい。私も老骨ですが自分のこととして考へてをります。もしも外国の侵略があればゲリラもやる覚悟です。その時は諸君にゲリラを勧誘に行くかもしれないよ、その時には。



しかしさうは言っても冒頭に申しましたやうに、将来の主役は諸君ですぞ、諸君を措いてはありません。

### ソ連は防衛的な国か

ソ連は防衛的な国だといふ議論があります。さういふ人々は現にソ連が極東に二個師団を増派し、これは日本に向けてゐると言はれてゐますが、それでもなほかつ脅威でないといふ人もあります。あるひはこれを潜在的脅威だと言ってそれほど関心を払はない。しかし世界が問題にしてゐるのは、その潜在的脅威が困るといふことなのです。

たしかにかつてのソ連は防衛的な国でありました。一九四一年の独ソ戦争の時もまだ防衛的だったと思ひます。ソ連駐在のドイツ大使は、ヒトラーに対して「ドイツが国境に一個師団を配備すれば、ソ連は十個師団配備してくる。ロシア人といふのは一〇〇%の安全保障感では満足しないで、三〇〇%の安全保障感を持ちたい種類の人間です。」と言って、ソ連を攻撃するのを中止するやう進言したのです。また駐米、駐英のソ連大使は、それぞれドイツ進攻の情報を貰ふんですが、それに対して十分に答へない。ヒトラーに攻撃の口実を作られてはいけなと、用心深く振舞ったんですね。そのころは防衛的だったのです。

しかし一九六二年のキューバ事件、これはフルシチョフがひそかにキューバに核兵器を持ち込み、その威嚇のもとでアメリカと交渉しようとした計画してゐたんですが、アメリカはこれを発見し、ケネディ大統領はソ連に対して最後通牒を出すんです。ソ連は、その期限ぎりぎりに最後通牒を呑む返事をしました。そしてキューバに向つて核弾頭を運ぶ途中にあつた二十数隻の船団に帰還命令を發しました。アメリカの完全な勝利でした。

この後でソ連は考へたんですね。もう再びかういつた屈辱をうけてはならないと決心し、軍備拡張に乗り出すわけです。かうして六十八年か六十九年ごろには、ソ連の軍事費はアメリカを上回ります。そして現在は核兵器の分野でもアメリカに追いつき追ひ越さうとしてゐる。ソ連はSS20といふミサイルをヨーロッパにもアジアにも配備した。バックファイアーといふ超音速爆撃機も大量生産し始めてゐます。

もとよりアメリカも目が覚めまして、本年は一五三〇数億弗の軍事予算を計上、あと五年間に海軍の艦艇も九十九隻造ることになりました。パーシングⅡといふミサイルや巡航ミサイルも開発、製造に着手してゐますが、八十三年にならないと配備が完了しない。ともあれいまやソ連はヨーロッパにおいてもアジアにおいても大変な軍事的優勢を示してゐるわけです。一部の研究者によれば、ソ連はいまや東西両面作戦もなし得るだけの力を備へてゐる、といふことです。

軍備の量の拡大は、その質を変へてまゐりまして、現在ではソ連は攻撃的な国になったとは思ひます。にも拘らず、世界の一部の諸君は昔のソ連を見て防禦的であるといふ伝説的な意見が残つてゐるわけです。国際情勢を見るについては、過去もさることながら、その変化を見なければいけません。

私は日ソ国交正常化をした際の外務省の主管者でありますから、日ソの関係は正常であることを希望する一人であります。ソ連は不法にも日本固有の領土を占領し続け、嵩かさにかかった態度をとつてをります。外交といふものは、プレッシャーのもとではやらないのが原則なんです。さういったソ連に対して経済協力をするのも結構でせう。それも結構ですが、ソ連の伝統的な東進政策、それを助長するやうな結果になる経済協力をやっつてはいけないと思ひます。シベリアに製鉄所を造つてやる、ヤクートの天然ガスを利用して重工業の基地を造つてやる——かういふものを基礎にしてソ連のアジアにおける基盤を固くしたらどうなりますか。儲かれば何をやつてもいいといふ時代は過ぎたと思ひます。

経済発展のあり方は、政治と連携して自由諸国が困る結果を招来することのないやうに努力しなければなりません。“経済交渉の基礎は政治にある”といふことは、従来と違つて十分に理解されてきてをりますが、更に一歩進めて、日本並びに自由諸国が押へようとしてゐるソ連の力を逆に誘発することになるやうなことは絶対に避けねばならぬと思ひます。

ソ連はいまや攻撃的になつたといふ事実を認識し、いかに対処するかが今の問題です。基本的な態度として、大きな言ひ方を許して頂くとすれば、これまで申しあげたやうなことを頭において、一方において防衛努力を続けて、安保条約の抑止力を確実にすると共に、他方「経済協力、経済協力と日本側から騒ぐことなく静かなること林の如くしてをれば、ソ連の方から日本に協力してくれと申し出てくる筋合である。」といふことを申しあげておきたいと思ひます。

### 北方領土問題

最後に諸君の理論武装のために北方領土の問題を述べておきます。これに関する基本問題の一つは、「日本とソ連との間の条約のみならず、日本と帝政ロシアとの間の条約も、今日なほ有効だ」といふことなんです

一九二五年、日ソ基本条約を締結しました。この条約によって日本はソビエト連邦を承認したわけですが、実はその第二条に「日本と帝政ロシア時代の全ての条約は、ポーツマス講和条約（日露戦争の終結）を含めて、将来日ソ間に特別の取り決めができるまでは有効である」と決めてゐるのです。ソ連はしばしば帝政ロシア時代の条約は効力がないと言つてゐますが、彼らはこの条文のことを知らないか、知つてゐても知らぬ顔をしてゐます。一八七五年、千島・

樺太交換条約によって「シムムシュからウルップ島までの十八の島が千島だ」と決めてゐるんですが、その中には国後、択捉、齒舞、色丹ははいってゐない。それらはすべて日本の固有の領土なんですよ。そのことを交換条件はちゃんと認めてゐる。その点ソ連はどうにも反駁できない筋合なのです。

なほまた日本はポツダム宣言を受諾して講和を求めました。日本は勿論このポツダム宣言に拘束されるわけですが、ソ連もまたこれに参加してゐる以上ソ連も拘束されるわけです。すなはちポツダム宣言は、「日本から取りあげる領土は、日本が侵略によって他国から奪った領土である」といふ領土不拡張を掲げたカイロ宣言の効力を認めてをります。といふことになればソ連は当然国後以下四島が日本固有の領土であることを認めざるを得ないはずで、しかし彼等はそれを無視して占領し続けてゐるわけです。台湾、澎湖島は日清戦争により、南樺太は日露戦争により取った土地ですが、北方四島は他国から奪った土地ではないんです。

ですからさういふ理論武装をして、あらゆるロシア人に対して「北方領土をどうしてくれるんだ。日本固有の領土だぞ」といふことを発言して頂きたいのです。また国連において日本の代表がつねにこの問題に言及し、「日本に加へられてゐる不正を除かねば、世界の平和は守れない。」と、世界の国々に訴へることも必要ですね。

さらに福田赳夫さんが農林大臣で訪ソした時、また福永健司さんが議員団の団長として訪ソ

した時、フルシチヨフは「アメリカが沖繩を返したら、北方領土は必ず返しますよ。」と明言してゐるんです。当時彼らは、アメリカが沖繩を返すなんて思ひもよらなかつたんですね。ですから彼ら自身、不法に占領してゐることをちゃんと知ってゐるんです。その不正を突いて行かうじゃないかと私は言つてゐるわけです。

すべての日本人が、かういふ理論に基礎をおき、誇りをもってソ連に対し「平和を攪乱してゐる原因はお前たちにあるのだ。」と言はなければならぬ。それが大変な圧力になります。もし将来北方領土を取り返すことができると思へば、さういふ力の結集以外にはないと思ひます。我々自身の問題ですから、道にはづれた力に対し、全国民が結集して当ることが肝要だと思ふんです。

以上いろいろ申し述べましたが、要は、我々の思想と行動とが一波万波をよんで日本中にひろがり、その結果として適正なる自衛力を保持して国の守りを固くする。また世界各国に対して理詰め的外交を展開する。自衛力の充実と共に、何人と雖も否定できない理論、さういった理論武装をしようではありませんか。この上とも研鑽を積まれることを心から希望いたします。

質 疑 応 答

△問▽ 外交交渉によって領土を取り返したといふ事例は、沖縄以外にもあるのでせうか。

△答▽ それはあるんです。波蘭のポルカラウッドといふ処、ソ連が基地をもつてゐたんですが、ポーランドはこれを返して貰ひました。しかしポーランドは代償を出しました。所謂フィンランド化で知られてゐるやうに、ソ連の外交政策に反対しないといふ代償をとつています。もう一つあります。それはイランのアゼルバイジャンといふ地域をソ連が占領してゐたんですが、国際連合の圧力で返させたんです。現在の国連は無力ですが、その頃は強かつたんですね。しかし、これはモロトフ外交の失敗だと言はれてゐます。おそらく希有の例外ですね。

要するに領土問題といふものは、しつこく交渉しなければならぬことで、簡単に領土問題が片づくことはないんです。ですから同じ主張を粘り強く続けるほかはないので、外交といふものはしつこくなければいけないと思ひます。

△問▽ 憲法第九条に「国の交戦権を認めない」とありますが、これについてのご見解はいかがでせうか。

△答▽ 国家成立と共にあるのは国防であり、外交なのです。国防は国家成立と同時性をもつ

てゐる。従つて自衛権といふものは憲法以前の問題であつて、国家に不可欠の基本原則です。

憲法第九条の第一項では、国際紛争の解決手段としての戦争、武力行使を放棄してゐますが、第二項に「前項の目的を達するために」といふ但し書きがあるでせう。この但し書きを裏から解釈すれば、「自衛権は放棄してゐない」といふことになるわけです。自衛権は放棄しようと思つても放棄できない。これが芦田解釈であり、日本政府は一貫してこの解釈をとつてきてゐるわけですね。

たゞし占領中に押しつけられた憲法はハーグ陸戦法規の違反ですから、独立を回復した時、内容が仮りに同じでも国会が議決しなほすべきだったのです。その時第九条も改正すればよかつたのですがね。

憲法の前文をご存じですか。「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とあるでせう。世界は、公正と信義を重んずる国ばかりではありませんね。かういふものに頼つて独立を維持しようといふのは、あたかも木によつて魚を求めが如しです。あんな憲法を子孫に遺してはいけないと思ひます。

しかし一部の諸君は、いまの憲法を護持することによつて、誤つた自分たちの思想を押し通さうとしてゐるわけです。お互に正しい認識をもち、それを広め、選挙において一票を行使することによつて、憲法の妥当な改正に進むことが本当でせうね。



△問▽ ソ連は条約を途中で放棄したり無視したりしますが、条約についてソ連はどんな考へ方をもってゐるのでせうか。

△答▽ ソ連の場合は条約といふものの解釈が違ふんです。彼等は条約を、相手の国を縛るために結ぶんです。例へば日ソ平和友好条約を提案してきたでせう。あれを結べばどうなるかといふと、ソ連から見れば、日本は条約を結んでおきながら領土返還を要求するのは、ソ連に対する日本の非友好的態度だと見るんですよ。彼らの議論はすべて、自分たちの主張を通すために都合よくできてゐるわけです。

普通の国は正直だし、条約は守るためにあるのですから守りますよ。しかしソ連は条約に対する觀念が違ひます。だから日ソ中立条約を破って満州、樺太に侵攻してきました。第一次SALT条約だって破ってゐるんです。彼らは条約を破棄するのは平気なんです。条約を結んで相手を拘束しようとし乍ら、自分に抜け穴があるわけです。

(地名などの表記は、新聞社が使用してゐるものによりました。)



人間の生き方・物の考へ方

文芸評論家・現代演劇協会理事長

福 田 恆 存



観音堂の庭 II

自由とは何か

「自分」からの自由

言葉と論理

過去といふもの

経験としての歴史

△質疑応答▽

## 自由とは何か

たゞ今、御紹介いただきました福田でございます。本日は「人間の生き方・物の考へ方」といふ題に致しましたが、考へてみれば、この中にはすべてのことが入って来ますから、余りに大きな題を掲げてしまったといふ気がします。しかし、現代の評論でも、文学でも、芝居でも、あらゆる文化現象を見てをりますと、すべて人間不在の議論ばかりが行はれてゐるやうに思ひます。言葉や觀念が人間から遊離してゐる。その遊離した借り物の言葉や觀念だけを組合はせて物を言つてゐるだけで、自分の生活にはもちろん、欲望や情熱にも結びつかない。もちろん、人間は言葉を道具として使ふ。が、私達が生まれてきた時には、それより先に道具としての言葉があつたのですから、その道具の在り方や目的にそつて、それを使はなければなりません。といふことは、正確に言へば、私達は言葉に使はれてゐるのです。それでいい。それができれば大したものなんです。今日では、大抵の人が使ひなれない道具としての言葉に操られ、振りまはされてゐるとしか思はれません。

たとへば、「自由とは何か」といふことをまづ考へてみたいと思ひます。自由といふ言葉は、ことに戦後、大いにはやつてゐる言葉ですが、今日使はれてゐる自由だとか、平和だと

か、民生主義だとかいふ言葉は、腹にもないことを、ただこれを言つてゐさへすればいいんだといふやうに使はれてゐるやうに思ひます。自由といふ言葉はいつでも平等といふ言葉と一緒に使はれてゐますが、実はこの二つは相反する概念です。ですから自分の自由を主張し、押し通すためには、「自由」と書いてあるプラカード掲げ、相手が自由を主張してきたら、それを抑へるために、プラカードを裏がへす。そこには、あらかじめ「平等」と書いておいてある。これが今のやり方なのです。第一、自由だの、平等だの言つたつて、本当に皆さう思つてゐるわけではない。そもそも人間には自由といふものが本当にあるか、自分は果して自由といふものを本当に欲してゐるのかと真剣に自分の心をつめることをしないのです。つきつめて考へてみると、私は、自由といふものは絶対にないと思つてゐます。さういふ意味では、私は運命論者だと初めにはっきりお断り申し上げておきます。

第一、皆さんは生れる時に自由意志で生まれて来たのでせうか。生まれるといふ言葉は、生むといふ言葉の受身の形です。英語でも、アイ・ウォズ・ボーンといふ受動態です。母親によつて生みつけられたのです。英語の場合ですと、独立語であるために、BE動詞に過去分詞がついて、受動態であることが形の上ではっきりしてゐます。しかし、日本語の「れる」「られる」(文語の「る」「らるる」といふ助動詞は、受身にも、尊敬にも、可能にも使はれますし、自然発生的な状態にも使はれますから、はっきり受動態だといふ意識は持ちにくいのです。こ

これは、日本語が膠着語であって、「生む」と「れる」の間に、はっきり切れ目がつけにくいといふこともあると思ひます。だから「生まれる」といふ言葉を自然発生的に理解するのです。それも深い意味でなら、立派な認識ですが、浅薄に考へると、自他の対立・区別がつかない、あるひはその意識が弱いといふ意味で、日本語の弱点とも言へます。が、ある意味で言ふと長所でもあります。つまり、生まれるといふ言葉は親に生みつけられたといふよりも、自然といふものに生みつけられたといふことを示してゐる。すなはち大自然といふものが主語であるとも考へられます。そもそも受身が自然発生的な意味を持つといふのは、ある意味では日本人が素直な物の考へ方をしてゐるからだとも考へられます。自分を超えるものとして、大自然といふものを心に感じてゐる。これは日本人の民族性として、見逃すことのできない一つの特徴ではないかと思ひます。従つて「生まれる」といふのは、必ずしも母親に生みつけられたといふのではないので、自然が自分を後から押し出して、自分を生ぜしめたといふ意識が、日本人の中にあるといふことを示してゐるのではないかと思ひます。

ある意味では、古代ギリシヤの人たちなどにも、さういふ考へがあつたやうです。例へば、アリストテレスは自然と人為（人間）を対立的に考へた最初の人だと言はれますが、必ずしもさう言ひ切れないところがあつて、やはりこれを連続的に考へてゐるところがあります。人間の作る道具は、人工品で人間と対立する物と考へられますが、人間もまた自然物だとすると、

その自然物が作ったものは、やはり自然物である。さういふ考へ方がアリストテレスの中に窺はれます。自然物と人間とを対立的に考へるやうになつたのは、大体西洋でも近世以後であり、特に近代になってそれが強くなつて来ました。自然科学は自然を征服するといふ考へ方であつて、それはいはば人間を神とする思想です。しかし人間はやはり自然に支配されるのだといふやうに思つた方がいいのではないでせうか。

先程、私は運命論者だと申しましたが、例へば皆さん方の中には、私の考へ方について行けると思ふ人もあり、ついて行けないと思ふ人もあるでせう。それは皆さん方の生れ育つた時代や環境や性格から出て来るのであつて、それらのものから全く自由に、私の意見を選択することはできないのです。学校教育ばかりではなく、家庭、友人、読書、さういふものによつて、いつの間にか判断の基準が作られてゐる。すべては何かの行きがかりであり、偶然であり、縁なのです。だから、すべては因果の必然によつて貫かれてをり、ある方向を目指して、着々と目的を達成するために動いて来たと思へるのは嘘である。皆、いつの間にかさうなつて来てゐる。私は人間の生き方や考へ方をさういふ風に思ひます。

自由といふ問題でも、皆さんは戦後の日本人の中で、当然のこととして受入れられるやうに仕組まれてしまつてゐる。だから皆さんは何故自由でなければいけないのかといふやうな質問をしたことはないでせう。初めから、自由といふものはいいものだと、文句なしに受取る。さうい



ふ風に受取れるやうに、あなた方は洗脳されて来たのです。洗脳といふと、全体主義国家の精神改造のやうな、どぎつい感じがするでせうが、もう少し間接的な意味で、われわれはその時代に洗脳されながら生きてゐるのです。私は運命論を信じてゐますが、それは何もしないでゐるといふことではありません。たとへ運命に逆らつてまで、やりたいことをやるといつても、結局は運命によって決められたものと思ふのです。すべては運命だ、自由は無いんだとなつたら、何もする気がない。きっとみなさんはさう思ふでせう。が、それは嘘です。自由はない。運命に動かされてゐるんだと言はれても、やりたいことはやってみたいといふ人もゐるし、人間は自由だと言はれても、その自由を發揮できず、行き当りばったり生きる人もゐる。人は皆さういふ風に運命づけられてゐるのです。真の自由といふのは成否に



かかはらず、やりたいことをやる充実した生き甲斐のことだと私は思ひます。

### 「自分」からの自由

さうすると、一体自分といふものの自由はあるのか。どう考へても自由といふものはないと考へた方がいいと、私は思ひます。その次に、自由といふ問題について考へるべきことは、皆が口々に自由、自由と言つてゐますが、人間は本当に自由を欲してゐるのかといふことです。元来自由といふのは、消極的概念でありまして、つまり、病氣からの自由、貧困からの自由、権力からの自由といふやうに、自分が何かによつて邪魔されないといふ程度のものであります。しかし、自分が何かをやりたいと思ふとき、それを邪魔するもの、つまり壁は必ずあります。規則も壁であり、いはゆる交通徳のやうなものも壁であります。すべて壁ならざるはないのです。何かやりたいことがあるといふ時には、——もっとも私は皆さんのうちに、本当にやりたいものがあるかどうかを疑つてゐるのですが——方々に全部壁が張りめぐらされてそれが障害になる。その時、私たちはいろいろの工夫をして壁の向うへ行かうといふ努力をする。それが一種の積極的な自由なのですが、今の人びとは、壁のない状態を作るのが自由だと考へてゐるのではないでせうか。

自分が本当にやりたいことがあるかどうかが問題だと申しましたが、仮にそれがあると仮定しても、戦後はやたらにやれない理由を皆に教へるやうになりました。これが戦前と戦後の大きな違いだと私は思ひます。戦前は、やれないのはお前が悪いからだ、お前の力がないからだといふのが基本的な考へ方だった。ところが、戦後は、やれない原因はどこにあるのかと問ひかけ、例へば政治が悪いとか、社会制度が悪いとか、すべてその理由を自分以外のところに沢山用意するやうになった。かうしてうまくいかない理由を引出しの中に沢山用意して持つてゐることが、知識人といふものの役割らしくなりました。何か問題でも起きると、新聞は必ず知識人の意見を聞きます。その時、世の中がうまくいかない理由を説明する弁護人の役割を果すのが知識人です。弁護人は依頼者自体に悪いところがあるとは絶対に言はない。必ず相手が悪いと言ふ。夫婦喧嘩の場合などでしたら、悪いのは相手といふことになります。もっと大きな社会問題になりますと、悪いのは必ず政治であったり、政治家であったり、学校教育が悪かったりといふことになります。確かにそれは全部が嘘とは言ひませんが、結局は自分が悪いんだ。お前さん、自分を顧みて御覧なさいといふことを言ふ人が、非常に少ない、といふよりも、それがなくなつてしまつた。

私は芝居をやつてをりますが、芝居といふのは、ほかの芸術と較べて、一番実際の人生に近い芸術です。それだけに、何でも人のせいに出来る芸術なのです。例へば、小説や評論や学術

論文などの場合は、相手の読者に理解できなかつた場合、やはり自分が悪いのだと思はざるを得なくなる。ところが芝居の場合には、まづ演出家があり、役者があり、台本、戯曲があり、芝居がうまくできないと、戯曲が悪いといふことになる。シェークスピアのやうに定評のある戯曲の場合には、役者が、あるいは演出家が悪いから駄目なんだと、お互ひに相手のせいにする。虚名にせよ、権威ある演出家の場合だと、役者は相手役が悪いのだと、相手役のせいにすることもできます。自分をさておいて、いろいろの言ひ抜けができるので、あるときは裏方のせいにもできるし、最後にはお客が悪いのだと、お客のせいにすることもできます。これは演劇の場合だけではなく、ほかのものでも、自分以外の何ものかのせいにすることができるものは沢山あります。

それと同時に、出来の良い、悪いといふ評価の問題についても、例へば一つの小説を「これは世紀の傑作だ」といふ人もあれば、「世紀の駄作だ」といふ人も出て来ます。しかし、スポーツや自然科学の世界では、かういふ評価の相違は決して起りません。例へば百メートルを八秒で走つた方が十秒で走るよりもまずいといふやうな見解の相違は絶対にあり得ませんし、橋を作るときに手抜き工事があれば、その結果は後になってはっきりと分ります。しかし今、問題になってをります自由といふものについては、いい加減に喋つてをれば、いくらでもごまかしがきく。そこが非常に危険だと私は思ひます。自由といふ言葉が、時には自分の無能力をこ

まかすための、自分の責任回避に使はれてゐはしないでせうか。確かに社会的条件といふものがあり、自分に不利な壁があつても、それを乗り超えてゐる人もあるのですから、最終的には自分の能力といふことが問題になつて来るのです。

結局はそれと同じことになりませんが、何々からの自由といふ場合、最後には「自分」からの自由といふことが問題になつて来る筈です。現在諸君は自分が何かしたいといふ欲望とか希望とかいふものを本当にもつてゐますか。恐らく諸君の今の年齢では、一生を賭けてこれをやりたいといふものはまだないだらうと思ふ。しかし、ある年齢に達すれば必ずそれが出て来る。その時には、自分がいまやりたいと思つてゐることも、他人やその時代の風潮に影響されて、自分はこれがやりたいのだといふ風に思ひ込んでゐるだけのことではないかといふ風に反省することが必要です。本当に自分が何を欲してゐるかといふことを自分で擲んでゐるのか、言い換へれば、自分といふものを本当に理解し、擲んでゐるのかどうかといふことが一番問題です。

## 言葉と論理

この辺で、言葉と論理といふ問題に入つて行かうと思ひます。論理といふのを、明治の時代

に英語から訳したところに問題があるので、実はロジックはギリシャ語のロゴスから来てゐるのです。ところがロゴスは言葉ですから、言葉と論理といふと、日本語では全く別のことになってしまふのですが、語源に遡れば同じことなのです。考へてみれば、言葉と論理は切り離せないもので、人は論理で考へる、といふのは言葉で考へるといふことになります。言葉なくして人間は物を考へることはできないし、思ふことも、感ずることもできないのです。寒いとか、暑いとか、痛いとかいふやうな感じも、その言葉が無かったら、なんだか訳のわからない苦痛に過ぎません。その違ひを識別し、感じ分けることもできません。さらに自分の心の思ひを伝へる、自分の考へを追求するといふことになれば、言葉なしでは、どうにもなりません。言葉がなければ、考へることも感ずることもできない。言葉がすべてです。



感ずる方は一応おいて、考へるといふ場合に、人間は必ず自分がかういふ風に言ふと、相手はかう反論して来るだらうと予測して、考へたり書いたりします。それは誰かをやっつけるために論敵を予想するといふことではなく、自分で何か物を考へる時に、それと反対のことを意識する。つまり自問自答といふ形をとるのです。すなはち問答形式で物を考へるので、それがディアレクティークといふものです。これを弁証法と訳すのは、ヘーゲルやマルクスが出てから後の話で、元来プラトンが書いたソクラテスの中のディアレクティークは問答です。ダイアローグ（対話）と同じ語源の言葉です。問答によって、自己発見、自己認識が可能となるのです。

先程も申しましたが、自分といふものは何なのか、自分は自分を理解してゐるか、自分の能力は一体どれだけのものかといふやうに考へると、凡そ物を理解する場合、一番理解しにくいのは自分なのです。だからみんな人のせいにするのです。自分の眼で見える外の物ばかり見回して、どこかに悪いところがないか、何か自分の邪魔をしてゐる物はないかと考へて、自分が悪いのだとは思はない。しかし、よく考へてみると、俺が俺の邪魔をしてゐるのだといふことがあるかも知れない。自分の能力や、自分の性格が、自分のしたいことを邪魔してゐることに気づく。それをやるのが自問自答です。自分を発見するといふこと、それが一番むづかしいのです。

このごろは「理解」といふ言葉が、殊に安っぽく使はれてゐますが、オスカー・ワイルドの小説にこんな話があります。ある貴婦人が夜会を開いてゐたところに、若い男女が少し遅れてかけつけて来て、実は二人がよく話し合つて漸く理解に達したので結婚することにしたと言つた。ところがその貴婦人は、それは大変だ。理解といふのは結婚にとつて最大の障害だと言ひます。これはワイルド流の皮肉ですけれども、アイロニーとか、逆説とか言つて片付けられなないので、人間が人間を理解できると思ひ込むこと、これほど危険なことはありません。だから、お互ひに理解して結婚した二人が、一年も経たぬうちに、相手は私を誤解してゐるといふことになるのです。必ず相手のせいにしてしまふので、芝居においての相手役が悪いといふと同じことなのです。そんな身上相談を持ちかけられた時、私は言つてやります。あなたが相手を見てゐる解釈は正しい理解であつて、相手があなたを見てゐる見方は誤解であるかどうか、それほどにも根拠がないだらうと。他人の方が自分をよく見てゐるのだといふ考へ方ができないのかと言ふと、みな不服なのです。しかし自分のことは自分が一番知らないのだといふ考への方がいいのではないかと私は思つてゐます。

アイロニーといふ言葉は、現在では皮肉と訳されてゐますけれども、ギリシャ語ではもともと空とぼけといふ意味です。ソクラテスがいつでもやった問答形式といふのは、あたかもソクラテス自身は何も知らないやうに、相手に問ひかけるのです。例へば、自由といふ言葉でも、



自由といふ言葉は初めて伺ひますが、そりゃ一体何ですかといふ風に、何も知らないことを前提にして話していく。さうすると相手も分つてゐたと思つてゐたことが分らなくなる。それがソクラテスの問答のやり方です。

だから、誰でも自分のことは自分が一番分つてゐるといふ。その自分といふものを分らなくしてしまふ。それは本当の自分を発見するための方法です。問答法といふもの、論理といふものです。従つてソクラテスの言ひたかつた究極のところ「汝自身を知れ」といふことであつたのは当然です。障害にぶつつかつた時、人のせいにしてたりしないで、外へ眼を向けると同時に、内へ眼を向けることです。自分がいましようと思つてゐることは、本当に自分がこれだけは失ひたくない、これだけは欲しいといふ、さういうものなのかどうか。命に代へてもこれが欲しいと思つてゐるのかどうかを問ひかけてゆくことです。そのためには眼を内に向けて問ひを發してゆく。今まで分り切つたものと世間がきめこんでゐるものを、疑つていく。それが本当の意味の懷疑なのです。借り物の言葉、世にはやつてゐる言葉ほど警戒してかゝらなければいけないと思ひます。

### 過去といふもの

最初に自由の問題を申し上げた時に、自分を衝き動かしてゐる大自然、背後から自分を押し出してゐる自然といふことを申しましたが、私は一人の人間の中には二種類の人間がゐると思ふ。結局は一つのものですけれども、仮に一つを集团的自我といふやうに名づけるとすれば、もう一つは個人的自我といふやうに名づけてもよい。この二つを統一して引締めてゐるのが一つの人格なのです。さっき申しました大自然といふものにつながって、それを背後に感じながら動いてゐる自分、それが個人的自我である。自分は大自然の一部分、あるいは一尖端と言ってもよい。

個人は自我の背景に大自然があるのと同じやうに、集团的自我の背景には、日本といふ過去の歴史があります。われわれは、日本の歴史といふものの一部分、一尖端にあるわけです。日本の国といふものを一つの樹木としますと、自分はそのうちの一枚の葉である。さういふ意味で、日本の歴史といふものが自分を衝き動かしてゐるといふことが出来ると思ふ。その日本といふ共同体、集団の中に、町とか家族とかいふ小さな集団がありますが、さういふものも、日本の歴史といふ大きなものの流れの一部をなしてゐるわけです。あなた方一個人をとってみても、過去といふものを失ったら、人格といふものは成り立たない。記憶喪失といふ病気がありますが、記憶喪失者といふのは人格を失ふわけです。

過去とは一体何だらう。一つの国家とか民族とかいふことになる、歴史になりますけれど

も、一人の個人でも、過去といふものを失ったら成り立たない。変な言ひ方になりますが、一体過去といふものは過去なのか。実は過去といふものは現在われわれが持つてゐるもので、消滅したのではないのです。過ぎ去るといふ字を書くものだから、あれはもうなくなつてしまつて、記憶の中にしかないと思ひがちですが、とんでもないことです。

私は自分でもよく分らない一つの経験をしました。それは中学の三年頃だつたと思ひます。昼休みの時間に弁当を食ひ終つて——その前に歴史の講義があつたわけでも何でもないのですが——時間にして十秒続いたか、三十秒続いたか、ふつとある瞬間、平安時代、鎌倉時代、江戸時代、さういふ時代のすがたが過去と現在とが同時存在してゐる感じで、その時私の眼の前にまざまざと見えたのです。あの実感といふものに、私は二度と恵まれないのですが、あれは一種の幻覚だつたのか、何かの放心状態から起つたことなのか。しかし、私はあの時の実感だけは忘れませんし、その実感からも、過去といふものは絶対消滅しないものだと思ひます。

これは実にむづかしい話なので、もう少し諸君に具体的に分るやうに申します。例へばまだ三歳くらゐの子供は、過去の観念を持つてゐません。昨日の自分と、今日の自分を一貫して、統一して生きようといふ意志もなければ、まづさういふ意識そのものがない。われわれの年になると、それがはっきり分る。例へば、今日の何時に会ふと約束したら、それが記憶に残つて

ゐるだけではなくて、それを果さなければならぬといふ意志を持つことになります。さういふものをもし諸君が全部失つたら、人格といふものは崩壊する。それが記憶喪失でせう。だから、人間にとって過去は過ぎ去つたことではなく、現在みな自分の中に持つてゐるものです。例へば仏教渡来が何年、日露戦争が何年と覚えたりするのは、知識の記憶です。さうでなく、一つの実感としての記憶といふものがある。それが本当の意味の記憶であつて、それは決して消えないのです。

日露戦争といふのは、皆さんは知識としてしか保有してゐないでせう。これを経験してはゐない。それから、「今度の敗戦」などといふ言葉を使へば、あなた方は非常に奇妙な気がするでせう。今度の敗戦とか、戦後とか申しますが、日本が敗北して、マッカーサーが乗り込んで来たといふことは、私たちの年の者は現在のこととして持つてゐるものなのですが諸君の場合さうではない。誰もが現代といふ言葉を実に安直に使ひますが、諸君が現代と言ふのと、私が現代と言ふのとは大変違ふのです。私の息子は今大学の教師をしてゐまして、それを言ふと恥ずかしかつて「よせ、よせ」といふのですが、その子が小学校の末か、中学生くらゐの頃だと思ひますが、マッカーサーとペルリを混同してゐたことがあります。息子は昭和二十三年生れですから、マッカーサーを新聞紙上でさへも見てゐない。従つて彼の内ではペルリと同じくらの過去の事実、知識としてしか存在してゐないのは己むを得ないことだと言へませう。

私は別に年をかさにきて言ふわけではありませんが、私の息子の現代と、私の現代を同じにして貰ひたくないのです。私の中には、ペルリは流石に知識としてしかなかく、経験はしてゐないのですが、マッカーサーは経験してゐるのです。若い人たちが、戦争がどうのかうのと批判したりしてゐますが、私はあの戦争の中を生きて来てゐる。その時の自分の気持ちをちゃんと経験してゐる。単なる知識ではないのです。この頃、年とった人間は古いといふ人があつますが、古いといふことは悪いことではない。今の世の中で何となく洗脳されて、古いと言へばかたがつくと思つてゐるのですが、古いことはいいことなのです。多くの過去を所有してゐるといふことは、昔から年の功と言つたもので、これを昭和二十年、三十年に生れた人が、私より大きい顔をされると、私は不愉快になります。そんな馬鹿な話はないのです。

皆さんを前に置いて言ふのは悪いのですが、諸君の持つてゐる過去はせいぜい二十五年くらいしかない。こっちはもっと沢山持つてゐるのですから、私の方が金持ちなのです。その、過去を沢山持つてゐる人間は古いのだと言はれると、それはをかしいのです。

過去といふものは、そのまま過去の経験です。経験として過去を現在所有してゐるといふことです。自分の過去といふものを所有して、現在の自分がゐるわけなので、現在といふものを過去から切り離すことはできない。切り離すことができぬばかりでなく、現在とは過去の集積である。全過去の集積が現在であつて、さういふ風に生きてゐる過去が、実は経験といふもの

なのです。

### 経験としての歴史

諸君が本を読むとき、あるいは活字を読むときに二つのことがある。すなはち新聞の活字といふのは、情報、知識を得るものです。しかし、文学作品とか、歴史の本などは、その内容を経験しなければいけない。といふのは同じ読書でも、経験としての読書と、知識としての読書といふのがあるわけです。例へば年表といふのは、知識としてあるもので、これを経験するといふことはできない。講演や講義でも、私のやうな話は皆さんの知識にはならない。私は自分の経験しか話せないのですから、同じ講義や講演でも、知識としての講義、講演と、経験としての講義、講演があるのです。実際には勿論両方とも多少混り合つてゐて、完全に片一方だけといふことはあり得ないのですが、どちらかに重点を置けば、二つに分かれるといふことです。

つきあひの場合も同じことなので、それが経験まで深まるか、便宜の程度でとゞまるか、それはおのづと年が経てば経つほど、区別もつき、識別もついてくる。名前は知つてゐるといふ程度の人と、自分の生活経験の中に、生涯所有し続ける人間として存在する人とがあるのだ

す。本当のつきあひは経験なので、実はそれが一番大事なことです。過去も同じことなので経験としての過去でないと、本当の過去は出て来ないし、過去を現在として所有することもできないのです。

さうなると、人間は、自分の生まれる前のことは経験できないかといふと、さうではない。さっきも言ひましたやうに、日露戦争を私は知識としてしか教はってゐないので、経験してはゐません。その日露戦争を、昭和十七年に私は経験したのです。当時文部省の外郭団体に日本語教育振興会といふのがあって、占領地の日本語教育の仕事のために私は満洲、支那の各地を廻り、その途中旅順に立ち寄りました。東鶏冠山の堡壘に立って下を見おろした時に、初めて私は日露戦争といふものを経験した。あの山の傾斜といふのは大変なもので、身を隠す遮蔽物は全くない。そこを、乃木將軍の率ゐる第三軍が攻めた。大体、二〇三高地を攻めるか、東北正面の東鶏冠山、松樹山を攻めるかで議論が二つに分かれてをりました。東京の大本営は二〇三高地を主攻方面にしましたが、満洲軍総司令部は東北正面を主攻方面にするといふので、調節がつかず第三軍は非常に困ったのです。さういふ細かい話は別にして、最初のうちは、主攻方面を東北正面にとって総攻撃をやったのですが、これがもう大変な仕事で、死に行くやうなものであった。そこに行つて見て、責任者としてそこに立たされた乃木將軍といふ人間、およびその部下たちの苦衷といふものが、私には初めてよく分つた。今になって、ああすればよ

かった。かうすればよかったといふやうなことを言ふのは全く無責任な批評である。明治維新によつて開国し、諸外国の圧力に抗しながら、全く遅れて出発した日本が、未知のロシアといふ大国にぶつかった苦惱が、一番象徴的に現はれてゐるのがあの地形だといふやうに、私はその時思つたのです。現地に行く、あるいはすぐれた史書を読むといふことによつて、日本の国の歴史といふものを、自分の経験とすることが出来る。たゞ遺憾ながらさういふ歴史書が非常に少ないといふことは事実です。

自分の自慢話をするわけではないのですが、もう一つの私の経験は、私が古代に材料をとつて、「有間皇子」という戯曲を書いた時のことです。これは大化の改新の後少し経つてからのことですが、孝徳天皇の皇子、有間皇子が、蘇我赤兄にそゝのかされて謀反を企て処刑されるといふ事件がありました、そのことは日本書紀の中にたった数行しか書いてありません。たった数行の素材から、一つの戯曲が書きたくなつて書いたのですが、その時私は現地に行きました。有間皇子の生れた市経といふ村、孝徳天皇の御陵、板蓋宮の跡、甘櫓が丘、などといふ所を歩いてゐるうちに、想像に過ぎませんが、有間皇子が馬で駆けてゐる姿まで思ひ描かれてくるのです。さういふことをやらないと、本当は歴史といふものは分らないと思ひます。

歴史といふ言葉には、過去に起つた事実といふ意味と、その事実を書いた物を意味する場合の二つがあります。事実そのものは、経験と同じで、いくら深刻な経験であらうと消えてしま



ひます。しかし、史は文でもありませんから、歴史の本は残ってゐる。歴史を経験するためには、これを手がかりにする以外にはありません。特に日本の古代や中世には、信頼できる歴史書がありますから、さういふものを読むことによって歴史を経験することができます。よく世代の断絶とか何とかいふけれども、われわれとあなた方とは、一つの過去を所有することができます。一つの過去を所有することによって、同じ日本人として生きることができのです。私は先程一人の人間の中に、個人的自我といふものと、集団的自我といふものの二つがあると言ひました。今便宜的に二つに分けただけの話で、これはもともと一つであつて、自然と歴史とが自分を動かして来てゐる。それを共有することによって、日本の国家といふものをみんな所有することができるのです。この事は、国家の正統性、一貫性といふことにも深くつながってくる問題です。

個人も、過去といふものを失つたら人格喪失者になると申しました。それと同じやうに、国家も過去の歴史といふものを否定するやうになれば、その国家がなくなつたといふことになる。だから、革命が起つて全過去が否定されると、その国家は消滅して、別の国家がそこに生じたといふことになる。さうなれば、その構成員である個人も大変です。今まで過去の日本の歴史に背負はれて来たわれわれは、どうしていいのかわからなくなる。個人も存立できなくなつてしまふ。さういふやうに国家と個人は密接につながつて離すことができないものなのです。

過去を保持するといふこと、その一貫性、連続性といふものによって、個人の場合には一つの人格を持ち得る。国家もそれを保持することによって、国柄、国体といふものを保ち得るのである。これを否定したらもうすべておしまひです。諸君にしてみれば生まれる前の戦争ですが、あの戦争を境にして、この一貫性、連続性はかなり危なくなつた。全く失はれてはゐないでせうが、稀薄になつてしまつた。そこに生きて行くといふことは並大抵の努力ではありません。われわれの場合は、まだ過去を保持してゐますし、経験として過去を背負つてゐる。あるいは過去に背負はれてゐるからいいのですが、諸君の場合は何とか努力して、過去を経験しなければ駄目だと思ひます。

最後に補足的につけ加へておきます。さっきから、歴史や言葉の問題を話してまゐりましたが、皆さん誰しも間違へてゐることがあります。それは、歴史を学ぶ、言葉を学ぶ、自然を学ぶといふ風に思つてゐる。さういふ考へ方は間違つてゐるので、われわれは歴史に学ぶのです。歴史がわれわれを教へる。われわれは歴史から教はるので、自然から教はるので、言葉から教はるので。それは、さっきの知識と経験といふことも関連してくるので、歴史を学ぶといふ場合には、知識として学ぶといふことになりません。それは逆で、歴史が私たちに教へてくれるのです。歴史から学ぶのであって、歴史を学ぶのではありません。かうして歴史から学ぶ、言葉からも学ぶといふ態度が大切だと思ひます。

質 疑 応 答

△問▽福田先生が旅順に行かれた時、日露戦争を経験したといふふうにはなりましたが、それは実際にその情景が見えたといふことでせうか。

△答▽情景が見えたといふことは確かなのですが、それだけではありません。乃木將軍あるいは第三軍の將兵の苦痛だけではなく、日本が当時置かれてゐた苦しい立場、当時の日本の国運といふものが見えたといふことです。これはやはりイメージジョン、想像力によるものであつて、想像力といふのは空想ではない。歴史も想像力によって創造されるので、これは言葉の洒落ではありません。想像力がなければ、いくら歴史書を読んでも駄目です。また、想像力を刺戟してくれる史書でなかったら駄目なのです。本当の想像力はクリエーティブな、物を創り出す力です。さういふ力によって歴史とつながることができなのです。

△問▽福田先生がさきほど、国家が過去を失つた場合の、連続性とか正統性とかいふことにふれられました。もう少し具体的にお聞きしたいのですが。

△答▽例へば、今でもギリシャといふ国がありますが、それは古代ギリシャと同じとみなすことはできないでせう。一貫性、連続性がないのです。民族や何かはずっとつながつてゐるで

せうが、同じ一つの共同体として、今のギリシャが古代ギリシャの都市国家の生き方を、そのまま、自分の過去として生きてゐるわけではないのです。一貫性、連続性を失ふと国家が違ふ国家になってしまふ。あるいは国家でなくなつてしまふ場合もあります。一番簡単な例で言ふと、個人も過去の全部を切つてしまつてごらんさない。その人間は、その人間でなくなつてしまふのです。その人間の個人としての一貫性、連続性といふものは、今までの過去を引きずつてゐるといふことです。国家も同じことで、細かいことの変化といふのは当然あるでせうが、国家の本当の中核をなすやうな共同体としての生き方、それを變へてしまふといふやうなことが起つたならば、国家は別の国家になります。過去の自分に責任を持たなくなつてしまつたら、国家も個人も駄目になつてしまふといふことで、これは非常に簡単なことのやうに思ふのです。

△問▽自由主義陣営の中で、日本にとって民主主義とはどのやうなものでせうか。

△答▽民主主義といふのは、今、目的のようになつてゐますが、あれは手段でせう。政治をする一つの手段です。しかし現在の日本の民主主義はちょっと特異なもので、「戦後日本の民主主義」と限定しなければいけないものではないか。多少似てゐるとすればアメリカでせうが、やはりアメリカとも違ふ。ましてヨーロッパの民主主義とは違ふ。さきほど御紹介のあつた『私の英国史』（中央公論社）の中でも書きましたが、イギリスのポール・ジョンソンとい

ふ歴史家が言つてゐるのは、イギリス国民が一三世紀末のエドワード一世以来、今日に至るまで望んで来たのは、自分たちを守ってくれる最も強力な王様、近代国家になってからは最も強力な中央政府であるといふのです。強力な政府は決して民主主義と矛盾するものではないのです。イギリス流の民主主義は、第一に自分たちを守ってくれる強力な政府、王様は誰か。それを国民が選ぶこと、第二にそれを守ってくれる弱い王様には抗議するといふのが、民主主義の機能といふものです。言ひ換へれば、民主主義は「待った」をかけるチェック機能である。積極的な意味では、自分たちを守ってくれる人間を選ぶといふこと、それが主権在民なので、リーダーシップを持つてゐるのは誰か。それを選ぶ権利を持つてゐるといふのが主権在民の真意なのですが、第二の消極的な意味でのチェック機構の方ばかり発達してしまつたのが、戦後の日本の民主主義で、国防白書一つ出すにも、野党の顔色を伺ひ、新聞論調を気にするやうなリーダーシップのなさでは、真の民主主義国家とは言へません、いや、国家とは言へません。だから、今の日本の民主主義といふのは、誤解から生じてゐるのです。

△問▽私は最近言葉といふものについての不信感を持つてをりますが、先生はさういふことをお感じになつたことはございませんか。

△答▽いはゆる名文を書くといふのではなく、自由に自分の思ひを託せる文章を書くとき、あるいは言葉で相手に話したりするときにも、言葉といふものの限界はあります。「汝自身を

知れ」といふと簡単なやうだが、実は自分を理解することさへ永久にできない。まして他人を理解することは絶対にできない。言葉によって伝達できるといふことには限界がある。といふよりも、絶対言葉によっては伝はらないといふものがあります。それは言葉を信用しないといふ意味ではなくて、人間といふのは常に孤独であるといふこと、それを覚悟しなければならぬといふことです。文章であらうと、言葉であらうと、あるいは言葉を使はない行動だけの場合であらうと、他人が自分を完全に理解してくれるといふことは、究極的にはできない。さつき、オスカー・ワイルドの言葉を引いて言ひましたが、人間の相互理解といふのは不可能なことである。いい加減なところで自己欺瞞をしてゐるのが常である。それを破るために、汝自身を知れといふことを申し上げたのですが、それが分かるかといふと結局は分らない。永遠に分らない。だから、もっと謙虚に、人間にとつては不可知のものがあると考へた方がよい。それは不可知論といふことではない。何かわれわれのうかがひ知れないものがある。さつき、個人的自我と言ひましたが、われわれは、自分を押し出してゐる背後の自然の目的といふものを理解することはできないのです。それを、生意気にも、さういふものが分かると思つたら大間違ひです。その何ものかの存在といふのは、神と言はうと、天と言はうと、どういふ言葉を使つてもいいけれども、さういふものは人間には分からないし、何のために自分を生ぜしめて動かしてゐるのかといふことも分からない。だから、何でも分かると思ふのが間違ひです。長

い間つきあってゐるたった一人の人間、たとへば女房の気持ちでさへ、私などにはまだ分かりはしないのです。けれども分らないながら、いや、わからないものを相手が持つてゐるからこそ、信ずるに値すると思つて附合つてゐるわけです。分らないから誤解といふものが生ずる。誤解といふのも一つの理解の方法だ。理解の一つの型です。だから、自分が自分を誤解することもあるし、人を誤解することもある。さういふものの積み重ねで人間社会ができてゐるといふ風に覚悟した方がいいと思ふのです。一番いけないのは、自分の小さな理解力で理解できるやうに、相手なり、神なりを、その枠内に閉ぢこめてしまふことです。考へてもごらんなさい。簡単に分かつてしまひ、説明し、分析してしまへるものは、まづつまらないものに決まつてゐるではありませんか。





■ 古典と短歌



「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」

―輪読のしをりとして―

高千穂商科大学教授 高木 尚一



長島中佐，寺尾少尉自刃の碑

黒上正一郎先生について

三経義疏にみる聖徳太子の御思想

聖徳太子の寺院建立の御事業について

山背大兄王御一家の御最期について

△本篇は合宿教室の講義をもととして講師の手により、新たに起稿されたものである▽

### 黒上正一郎先生について

私は今から五十年前、昭和四年四月に旧制第一高等学校に入学し、五月に黒上正一郎先生が指導されてゐた聖徳太子の讃仰研究会である昭信会に入会し、毎週一回の校内例会に出席すると共に例会後、学校の近くにある、先生の下宿に会員と一緒に行っては色々なお話をきいてゐた。

そこで先づ最初に先生の御略歴や人柄について述べることにする。

黒上先生は明治三十三年九月に徳島にお生れになった。小学校を卒業されてから、徳島県立徳島商業学校に入学された。お家は徳島の素封家、染物の藍の問屋をやつてをられ、亡くなられた父上は阿波商業銀行の頭取をされてをられ、一人息子さんと、母上がまことに信仰心の篤い懇切丁寧な方であった。先生も同様に謙虚で親切であられると共に、信仰心の篤い意志の強い方であった。

十七、八才の頃既に独学で親鸞、聖徳太子の深い研究を始められたやうだ。二十才で徳島商

業を卒業されて阿波商業銀行に入られ、二十五才で退職され二十七才でもう講演を始められてゐる。大正十五年に二十七才で東京帝國大学教育学部教育学教室に於いて「聖徳太子の研究」といふ講演をされ、昭和三年以降第一高等学校の瑞穂会といふ文化団体で「聖徳太子の人生観と日本文化」といふ連続講義をされたのである。それが縁で指導教官の沼波瓊音その他と交はられ、親友であられた一高生の梅木紹男先輩とも協力された。そして瑞穂会で黒上先生の連続講義を聞きに行つてゐた数名の一高生と一緒に昭和四年に一高昭信会といふ会を作られ、同時に相前後して当時の高等師範学校に副島羊吉郎氏、廣瀬勝雄氏らと共に信和会を作られた。この間の事情は、小田村寅二郎著『昭和史に刻むわれらが道統』に詳細に載つてゐる。

黒上先生の印象は背が高く色は青白く弱さうであつたが、骨格はがっちりとした方で手紙や原稿など非常に力を入れて大きな字で書かれた。歌も沢山作られ、手紙や葉書によく書いていた。

非常に丁寧で親切で、目が澄んでゐて、一緒に對座してゐると吸ひ込まれるやうであつた。銀行に五年勤められた時も、対人関係はきちんと細心になさつたであらうし、いはゆる學者ぶるところは全然ない方であつた。しかしながら「志」の立て方の問題になると、自分のみの修養とか人格完成のためなどといふ心を持ってゐると直ちに看破され、親鸞の本を持たせてご自分も同じ所を読み乍ら、その心情をきつく叱られたのである。



先生は親鸞の浄土真宗の信仰を近角常観師ちかずみから伝へられ、思想は三井甲之先生から教へられた。三井甲之先生の著書『明治天皇御集研究』の終りに載ってゐる研究方法を黒上先生は聖徳太子研究の中に必死の努力で導入されたのである。この箇所は非常な難解なところで先生は甲府の三井先生のお宅へ泊り込まれ、夏の最中、蚊張を頭からかぶって二時間位仮眠をとるだけで勉強し細部にわたり質問をくり返されたこと、三井先生は追悼の長詩の中に書いてをられる。畢生の著作『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』は、かうして日夜先生の手によって書きつゞられ昭和五年九月徳島 先生が亡くなられた直後に、影の形により添ふ様に先生につき添ひ、原稿を整理しつゝ、あった一高昭信会新井兼吉先輩の整理と黒上家の御授助により、騰寫刷

の本として発行され、これをテキストとして読み合せし乍ら一高昭信会は活動をつづけたのである。

この本はその後昭和十年には黒上家の御援助で立派な装丁の本となり戦後、国民文化研究会の手により註訳付の現在の本となり、全国の同志諸君の協力により読み合せがつゞけられてゐる。

国文研叢書『いのちささげて』『続いのちささげて』にはその後、かうした思想運動に命を捧げた若い人々、戦士の憂国の思ひがつゞられてゐて、聖徳太子の精神は絶えることなく伝えられてゐる。

黒上先生に生前お目にかゝれなかつた友らも先生の教へを慕ひ、わざわざ徳島にある先生のお墓に参る人も絶えない。

左に掲げる碑文は先生のお墓の横に立つ石碑の一部である。

碑の一部

為<sup>レ</sup>人温雅<sup>ニシテ</sup>而<sup>レ</sup>恭儉<sup>ツカヘ</sup>事<sup>レ</sup>長交<sup>ハリト</sup>友<sup>ト</sup>藹然<sup>トシテ</sup>有<sup>二</sup>情誼<sup>一</sup>。體本不<sup>レ</sup>強健<sup>ナラ</sup>而<sup>レ</sup>好<sup>ミ</sup>学<sup>ヲ</sup>、求<sup>レ</sup>遂<sup>ニ</sup>獲<sup>レ</sup>病不<sup>レ</sup>起<sup>タ</sup>。可<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>殉<sup>スト</sup>學<sup>ニ</sup>。

道<sup>ヲ</sup>之<sup>レ</sup>篤<sup>ク</sup>、数<sup>シ</sup>々<sup>シ</sup>廢<sup>ス</sup>寢食<sup>ヲ</sup>。友人或<sup>ハ</sup>恐<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>傷<sup>レ</sup>。生勸<sup>ムルニ</sup>以<sup>テ</sup>少<sup>シク</sup>休養<sup>ヲ</sup>、君不<sup>レ</sup>介<sup>セ</sup>意<sup>ニ</sup>。



人となり温雅にして恭儉長に事へ友と交はり藹然として情誼あり。體本強健ならざれども学を好み道を求むること之れ篤く、数々寢食を廢す。友人或ひは其の生を傷けんことを恐れ勸むるに少しく休養を以てするも、君意に介せず。遂に病を獲て起たず。學に殉ずと謂ふべし。

右は徳島市佐古清水寺内の黒上先生の墓石の横に建立された丈余の石碑「黒上君之碑」五二〇文字(封南岡本由撰并書)より、本会副理事長小柳陽太郎氏が墓参の際写し取って来られたものであるが、黒上先生のお人柄がまことによく誌されてゐて、今尚ほ先生に接してゐた当時の思ひ出が蘇ってくる。

「長に事へ友と交はり藹然として情誼あり」といふ藹然としてとは「おだやか」「まめまめし」といふ意味であるが、先生は先輩後輩・友人・弟子それぞれに対し、本当に手厚い交りを持たれた。「世法を捨てず」といふ懇切さが、相手に伝はってくるのであらうか。当時の学園に吹き荒れてゐた共産主義運動の嵐の中で、いつも先生の周辺には、和やかな雰囲気漂つてゐたことは事実である。

「和を以て貴しとなす」といふ聖徳太子の御言葉が、先生の口を通して語られると、その言

葉がそのまゝ、周囲を支配する、その雰囲気の中に私共は融け込んでいったのである。

先生は五十年後の今日人生の帰趨に迷つてゐる日本民族の現状を予想されてゐたのであらう。その語られる言葉の中に「人生の帰趨」といふことが何度となく出て来て、「帰すう」といふ発音が今でも私の耳に残つてゐる。

三井甲之先生はその永訣の書である『平和の大海に注ぐ一滴の水』（三井甲之遺稿刊行会）の中で、「ゲーテは、独逸哲学の末路を予言してをった」と書かれてゐるが、ゲーテの詩魂はシュペングラールの「西洋の没落」からナチスにいたつても完全にうけ継がれぬまゝ、今日に及んでゐる。その終末、カラストロフィを豫表した親鸞の教行信証の精神伝統は、遠く聖徳太子にもさかのぼることが出来る。

今日私などが黒上先生のことを語るのは、単なる思ひ出話などといふものではない。

黒上先生は今も我らの先頭に立たれて、太子のみ教へを説きつゞけて居られるのである。

碑文の中に、黒上先生が身体が強健でないのにしばしば寢食を忘れられたと書かれてゐるが、当時昭信会に集つた一高の学生の中には、先生の下宿を訪れて徹夜で質問した者もゐたのを覚えてゐる。かうした事が先生の健康を損つた原因であつたが、当時の先生の心境は、何かしら天地自然と一体になられた大乘菩薩に通ふものがあつた様である。「私はいまかうしてゐることが一番楽であり、楽しいのだ。苦しいことはない」といはれてゐた。その心操の高さには今

日益々至り難いものを感じてゐる。弟子としてもはや我々の及ぶところではないと諦めるのは「道」ではない。

微力乍ら力を出し合つて協力してゆくのが今日の我々の任務であり、太子のいはれた「四生の終帰、萬国の極宗」である。

当時のマルキストの学生も、共産主義革命は我らの手でといった気負ひを以つて、寮の二階の寢室に消燈後もローソクを立て、資本論などを読みふけてゐた。今日ソ連を中心とする共産主義諸国の生産の上らぬ窮状をマスコミも認めてゐる現状では、学生連中もその当時の様な情熱を傾けてマルクスの事をよむ熱意が湧かないのは当然であらうが、それだけに若者の無気力が今日では問題である。

黒上先生のかゝられた結核も今日では不治の病ではないし、アメリカ軍の手によつて、日本に小作制度が無くなつて共産党は小作争議を煽動出来なくなった。労働環境も戦后三十年で大いに改善され、科学技術は世界一流の域に達した。これから先は、人間の心の連絡、継承、無窮の生命をさとり、覚らしめつゝ易姓革命、闘争革命の残酷破壊活動に対して、和の精神の相続開展に身心を捧げる活動が展開されねばならない。

こゝに黒上先生が聖徳太子の御精神御教示に全身心を捧げて迫つてゆかれた意義があるのであり、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の一書を書き残された意義があるのである。

聖徳太子の研究書は色々あるが、太子がお書きになった文献、憲法十七条、三経義疏（勝鬘、維摩、法華の三経の御釋）の内容を究め、その文献文化史的研究は、一部の註釋書以外には黒上先生の御著書のみといつても過言ではない。

### 三経義疏にみる聖徳太子の御思想

黒上先生の思想的師であられた、三井甲之先生はその前掲の著述『平和の大海に注ぐ一滴の水』の中に、聖徳太子について、左の如くいはれている。

「維摩經『方便品』に居士（維摩居士）の大徳を讚し『心大如海』とあるを大陸諸師がいつれも、其心境の広大をいふとなせるに對し、『萬機に達して遍照せざることなしと明かす』と国民的実生活に徹入して積尊の世界的宗教をその教義から解放して四生の終歸、萬国の極宗としての仏法僧の三宝を現実国民生活に密着せしめ『大陸思想は太子の御心に於いて、その生命化の郷土を見出したのである』と黒上正一郎氏はその主著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の中でいってをる」

右の文章はまことに重要な点を指摘されたもので「心大いなること海の如し」といふ維摩經に出てくる在俗居士である維摩居士の心境を、支那大陸の仏教の有名な諸師達が、たゞ抽象的に心境が海の如く広大であると讚嘆するだけであるのに対し、太子の御釋は「菩薩の大悲心は萬機に達して(すべての人々のもろもろの機根に通達して)遍なくすべおさめ照してゐる」と表現せられ、そこに具体的現実的なる太子の、天皇の摂政としての国家統治の御活動が表現されてゐる事が記されてゐる。

第二次世界大戦に於いて、ドイツは国を挙げて戦ひつゝも、その国歌が示す、ドイツチュランド、ユーバー、アルレス(ドイツは凡ての上に)といふ思想が相手の反撥を誘発して、共感共鳴の世界を実現出来なかつたが故に、東西に分割されてしまつたのは歴史の示す通りであつて、これは悲劇といふ外はない。

大正六年(一九一七年)ロシア革命が起り、その思想宣伝の波が日本に押しよせ、日本の国體の变革を實行しようとする思想運動が、昭和のはじめにかけて猛烈に行はれた。その勢は当時私達が学んでゐた高等学校、大学に根強く及んでゐたのは歴史の示す通りである。

黒上先生が第一高等学校と高等師範学校に、昭信会と信和会を創立され、著述に講義に昼夜を分たず、病身の身を省みず努力された御精神は、今頃になって漸く分りかけて来たのである。

黒上先生が長上に対してはどこまでも礼義正しく、しかも志は高く、宇宙人生に徹入する

雄々しさを持ってをられた事は、御著書の到る処にみられるのである。

最近私は同志と共に、聖徳太子の勝鬘經義疏の研究を行つてゐて、勝鬘經を中心となす如来蔵の意義について、仏教辞典に従つて「真如の煩惱中にあるを如来蔵といふ」「如来の性徳が煩惱の為に隠覆されてゐるのを如来蔵といふ」などと解釋して、低迷してゐるとき、もう一度黒上先生の御著書をよみ通してみた。

すると四十四頁から四十五頁にかけて次の如く書いてある。

「即ち宇宙人生は如来蔵であつて、法身と生死と、感覺と靈性と、それらは分離すべからざる全一的存在である。こゝに八地の菩薩が一念の中に萬善を修めて、一切の衆生と感應交通し、現実世界の裡に佛陀の至徳を開発せしめ、又別體三寶に即して一體三寶を仰ぎ、動乱萬差の実人生に眞實生命の一道を実現する如きは、即ち宇宙人生の真相に随順する宗教的大道の實修となるのである。」

右の文章で、如来蔵は宇宙人生であるといひきられてゐる。簡明直截の表現は先生の志操の高さを示してゐる。

また今度の講義レジメに引用した第一編「聖徳太子の人生觀と政治生活」七十四頁七行目から「勝鬘經義疏」(二乗章)の中の太子のお言葉

「仍ほ大小を辨ぜば、自ら度せんことを求めず。物を濟ふを先と爲して佛果に等流するを称

して大乘だいじやうと為し、物を化することを患うれひと為し、但ただ自ら度せんことを求めて、彼の無實むじつを蔵くらするを名づけて、小乗しょうじやうと曰いふ」

について説くと、「なほ、大乘小乗の区別についていふと、自らのみが救はれることよりも他を濟度することを先として、他と共にひとしく、佛の教に帰入しようとするのを大乘といひ、他の衆生を教化することをわづらはしく思ひ、此の世をはなれた、実体なき空想世界であるところの彼岸ひがん(彼とは「彼岸」のこと)を蔵くらし(好み)、これに執着し、これに心ひかれ、他を救はんとしないのを小乗といふ」といふ意味である。煩惱は消滅しようとする努力はしても之を消滅出来るものではない。これを消滅しようとのみ努力するのではなく「大士はその身の苦を忘れて苦を同じうして化す」といふことを、太子はくり返し三経義疏の中で説かれ、黒上先生もこれを説かれるのである。

### 聖徳太子の寺院建立の御事業について

黒上先生の御著の中で最近気付いたことは「太子がその一代に建立し給ひし寺院の数は比較的多からず」といふ点で、宗教教化の道場に社会救済の事業を兼行せしめられた御業績について述べられた点を、御著の中から引用して(二十八頁—二十九頁、「聖徳太子の体験過程」感想を

述べてみたい。

「太子がその一代に建立し給ひし寺院の数は比較的多からず、又その建立寺院には頗る異説多く之を悉く明確にすることは出来ぬのであるが、法武帝説には『太子七寺を起す』として『四天王寺、法隆寺、中宮寺、橘寺、蜂丘寺、池後寺、葛木寺』の七箇の寺の名を挙ぐるのである。太子の造寺造塔は決して単なる外的功德崇拜のためではない。四天王寺は対外関係の必要と共に、当時外交の関門たる浪速の地に建立せられたともいはれるのであるが、又其の伽藍には敬田院を中心として療病・施薬・悲田の各院を置かれ、宗教教化の道場に社会救済の事業を兼行せしめたのである。又法隆寺は學問寺として、毎年法華等三經を講読し、又佛教習學の子弟を養育せしめ、これら寺院に各々實質的意義を帯びしめ給うたのである。

同時に堂塔建立を中心として信仰に基く文教藝術の振興に盡させたまひ、法隆學問寺の如き永遠に國土を莊嚴にして衆生を薰化する偉大の建築の出現は、また太子の指導精神にもとづくことを考証さるゝのである。佛像彫刻に於いても、佛師一派を始め、優秀の製作が残され、彼らは帰化人であったけれども日本の朝廷につかへ、大和の自然に親しみ、殊に太子の御指導のもとにその藝術的行業を励みしものである。その形式は三韓を介して支那南北朝の様式をつたへたものであるけれども、法隆寺本尊、薬師佛、夢殿觀世音、中宮寺彌勒像の如きに於けるその光背の火焰の揺らぐが如き生きたる力、またその尊容の朗かにしてかなしき



緊張をたゞふる微笑との対照は、永く太子を中心とする時代の精神生活を象徴するのである。」  
右の文章にみられる緊張した調べは、太子の堂塔建立のもつ宗教学術藝術的意義を力強く伝へてゐる。

そして太子が自ら僧侶と儒生を指導せられ、勅を奉じて、宮中に於いて經典を講説し給ひ、「親しく執政の任に当る群臣の心田を開化し給うたのである」と書かれてゐる。さらに、黒上先生は法王帝説に太子御講經の相状を述べた箇所の、

「戊午ほごの年四月十五日、少治田せうぢだのすめらみこと天 皇上宮王に請ひて勝鬘經を講ぜしむ。其儀僧の如く也。諸王公主及臣連、信受して嘉よみせざる無し。三日の内、講説をわ訖る。」

とあるを引用され、摂政の太子にして又僧の如くあられたことが「真俗相依の理想を実現せられたものである」と述べられてゐる。

今日伝へられ、日本の高額紙幣にも印刷せられてゐる聖徳太子の尊像は、僧形でなく、衣冠束帯のお姿である。非僧非俗といはれる所以であるが、日本の現代の政治家とは比べものにならない格調の高さといふ外はない。

いま右に述べた非僧非俗といふ言葉も、表面的に解してゐると所謂どちらつかずといった一知半解に陥る恐れは充分にある。勝鬘經にいはれる煩惱蔵にまっはりつかれる如来蔵といふ表現も、概念にとらはれるといつまでも真実がつかめない、堂々めぐりに終始して開展しない。

黒上先生がそれを断ち切られて、如来蔵とは「宇宙人生」であると喝破されたことは、並々ならぬ思想体験から発せられた表現といふ外はない。

太子は「十七条憲法」の中で「私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり」といはれた。公に向ふ心、静止せず流動し躍動し向ってゆく、きりひらいてゆくところこそ、生きてゆく人間の心である。偉大なる教へに心打たれ、藝術作品に心打たれ、或時は迷ひ、或時は怒り悲しみ打ち沈む、それが生きた人の心である。固定した心は死物であるとは、本居宣長も論じてゐる。それ故に、太子は同じ十七条憲法に「信は是れ義の本なり、事毎に信あるべし。」といはれた。「事毎に」とは、つねにゆれ動く生きた人間の心をしっかりと見透しておいになるお言葉である。

宗教の開祖は発明者ではなくて改革者であり、精神の開展を示すコトバが文明の原動力であり、滅亡しない文化財であると前掲の書の中に三井先生は説かれてゐる。

憲法十七条は特に朝廷にあって行政の任に当る諸官吏を主な対象として述べられたもので、礼を重んじ、訴訟を公正に行ひ、嫉妬し合つてはいけない等々、世俗の事を直接とりあげ乍らも、「和を以て貴しと為す」「篤く三寶を敬へ」「事毎に信あるべし」と信仰思想を貫かれてゐる。真俗相依とは、かうしたことをいふのであり、太子の寺院建立の御事業にはかうした御精神が充ち溢れてゐたことを見逃してはならない。

## 山背大兄王御一家の御最期について

推古天皇三十年(六三二年) 聖徳太子は四十九才を以て全國民哀悼の中に薨去された。

それまで太子の御威厳により抑へられてゐた蘇我氏はまた専横のふるまひをはじめ太子薨去後六年にして推古天皇崩御と共にいよいよその勢を拡げ出した。推古天皇の後を継ぐ方は、聖徳太子の嫡子山背大兄王が最も自然な順序の方であり、推古天皇の御遺志もそこにあられることを山背大兄王も承つてをられるのに、馬子の死後大臣となつた蝦夷は畫策して敏達天皇の皇孫田村皇子を推戴しようとして、推古天皇の遺詔を故意に歪曲しようとした。山背大兄王は自分は決して皇位をむさぼらうとするものではないが推古天皇の遺詔を下された時、数十人の人がお側にをり、田村皇子も側にをられたと主張された。しかし蝦夷とその子入鹿はあくまで田村皇子を推し、多くの群臣は蝦夷の言に追隨した。しかし山背大兄王に味方する者もあり、馬子の弟で聖徳太子の恩顧を蒙つた境部さかひべの摩理勢まりせは山背王を奉じて蝦夷入鹿と一戦しようとしたが、山背王は父聖徳太子の遺戒「諸悪莫作諸善奉行」を守つて皇位を争はうとはされなかつた。しかし摩理勢は蝦夷に反いて殺された。

そこで田村皇子が即位され舒明天皇となられ、蝦夷入鹿の勢は益々強くなつた。

天皇は十三年後に崩御なされ舒明天皇の皇后が即位されて皇極天皇となられた。天皇の即位元年に、蝦夷は自分の祖先の廟を立て、天皇のみが行はれる八佾舞を行ひ、天皇の御陵にまさる立派な墓を二つ造った。一つは大陵おほはかで自分のため、一つは小陵で入鹿のためのものである。その造営に上宮王家の領民を使役して山背大兄王の親族の方が激怒されたので、反蘇我的空気が次第に強くなり、山背王への同情の念が周囲に強くなり、蘇我氏にとり山背王が次第に邪魔となり、ついに無道にも入鹿は皇極天皇二年に突如兵を出して斑鳩いかるがに山背王を攻めた。王は一時生駒山に逃れ、また斑鳩寺に帰られた処を再び入鹿に攻められた。

山背王は最後まで父上聖徳太子の御精神を体して、一身の故に萬民を勞することは本意ではない。「吾が一身を入鹿に賜ふ」といはれて王はじめその妃妻、子女悉く自害され、上宮王家は全滅した。

山背大兄王子御一家の御最後については後世史家が色々な私見を加へ、特に現代の著書の中には時には読むに耐へないひどい議論をしてゐることもあるが、吉川弘文館發行の人物叢書『聖徳太子』に東大名譽教授坂本太郎博士が書かれてゐる記述は史書に正確にしかも深い心情をこめて山背王の御最期を記述しておられるので左に紹介したい。(右の書の二二頁から二二三頁にかけてその事が書かれてゐる。)

まづ坂本氏ははじめは、山背王がなぜ自分の一族の中誰かはこの世に残して、上宮王家の跡

を絶やさないうやうに心がけられなかったかと思つてゐたが、それは煩惱を絶ちきれぬ人間の凡慮であり、大乘仏教の教へを太子から受けた山背王はもつと深遠な宗教心から一身一族を法のために捨てられたものと気付いた。これは聖徳太子も講義なされ、注釈書も出された「勝鬘経」摂受正法章にある通り、勝鬘夫人が仏陀に向つて摂受する善男子善女人は法の滅せんとするときは、身、命、財の三種の分を捨てることを誓ふと誌された通り、山背王は実践されたとみるべきだとされてゐる。

蘇我氏の専横がその極点に達した時、山背王一族の捨身は国中を覆つてゐた暗闇に一すぢの光明をきり開き、二年後に、蝦夷と入鹿は中大兄皇子、藤原鎌足らにより誅せられ、蘇我氏は一挙にその権力を失ふのである。

逆に上宮王家は滅亡しても、残された教は藤原頼長、源実朝、道元、親鸞、山鹿素行らを中心に信承されて今日尚若い人々にまで伝はつてゐる。

また大工、左官、鍛冶屋などの工匠たちの間に(室町時代の末頃からといはれる)民間信仰として太子講の組織が伝へられてゐる。

大正十年に太子の一千三百年御忌の法要が営まれ、聖徳太子奉讃会に発展したが、まことの太子奉讃は太子のお言葉に直接ふれ直接仰ぎ、人生の道として心に刻みこむこと以外にない。以上が坂本太郎博士の論述の大略である。

さて前掲三井甲之著『平和の大海に注ぐ一滴の水』にホイットマンの言葉として次の言葉をあげられてゐる。「民族の興廢を決するものは結局かれらがいかに死に面するか、いかに苦痛と病氣にたへるかといふに帰するからだ」「戦争の実相はつひに書物には載らないだらう」「宗教は『人類の詩歌』である」

同書十頁には更に「ことばの科学と宗教」と題し、次の如く記されてゐる。

「聖徳太子の十七条憲法や三経義疏を読むと驚きと共に希望の光明をみとめ確信を得て安心立命する。日本人として今日の運命におかれたことに素直に従はうとする。この憲法も義疏も漢文であるが、これらを漢文としてでなく、日本語として取扱ひ得るといふことに意想外の意味があるのである。」

「聖徳太子といへば太子建立の法隆寺は名高く内外一般に知られて居るが、太子の憲法や義疏は専門家の外には余り問題にされない。コトバは焼亡しないから文化財として、これを重要視しなければならぬ。」

○

日本には建国以来うたを中心とする言葉のつながりが絶えない。

最後に黒上先生が十九才の時に詠まれた和歌を左に引用する。

手紙のはしに

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし  
みことばにつなかりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび  
こののぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのこちするかも

あゝ一信海われもつながらむと求むるこゝろそのこゝろにこそわれは生くるか  
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

右の歌は伝聞するところによると京都に住んでをられた原理日本につながる聖徳太子研究家  
井上右近氏を訪問された時の歌である。「あひまつりしその日」とはそのことを指してゐる。

大正時代は表面は朝鮮、台湾、樺太にまで伸びた領土をもつ帝国であったが所謂大正デモク  
ラシー、ロシア革命思想によってゆるみが見えはじめ一方には「アカネ」「人生と表現」「日本  
及び日本人」といった雑誌の詩歌欄を中心に深い思想をさぐる精神の緊張と苦悩が味はれる時  
代であった。殊に朝鮮の如く比較的新しい領土の行政は内地の思潮を反映して独立運動が早く  
も潜行してゐた時代である。

一二〇〇年前聖徳太子が当代大陸の思想學術を究明せられつゝ随との国交、三韓との国交に  
努力された御精神が、若い学徒の協力研究によりしきしまのみちを中心に再生したのは、日本

民族の生命の若さであり、威力であった。しかしそれは名利をなげうつ志の承継であって、太子のいはれる「信」である。昭和二十年の敗戦により、我国は明治以来得て来た領土、朝鮮、台湾、樺太から、従来からの領土であった千島四島、沖繩までを悉く失った。沖繩は後に米から返還されたが、他は独立国となり又千島の如く未だにソ連の占領中である。その間三十年にわたり日本人はたゞひたすら働いた。そして経済大国などいはれる様になったが、独立国としての精神文化は未だ混乱状態である。

我らは益々精進して太子の御言葉をくり返し唱へ究めてゆかねばならない。



短歌創作について

国民文化研究会副理事長 宝 辺 正 久



はじめに

言葉に感動するといふこと

すぐれた歌との出会ひ

(一) 柿本人麿の歌

(二) 今上天皇の御製

(三) 正岡子規の歌

短歌の作り方

## は　じ　め　に

合宿の日程が進んでたいへんお疲れのことと思ひますが、このあとで仁田峠までの遠足があり、その間に短歌を作るといふことになってをります。お天気もこの霧が晴れてくれればいいのですが、それはそれで疲れも洗ひ流されるやうな、心の開かれる一刻一刻を経験されることだらうと思ひます。

さて、皆さんがこの合宿に参加する前に、必ず読んでくるやうにとなつてをります「短歌のすすめ」（夜久正雄・山田輝彦共著）を、私も何度か読み直してみました。皆さんの前でお話しすることを心に掛けながら読んでみますと、いはゆる現代歌壇の短歌が子規以前には啄木と茂吉の数首を除いて、全く出てこないことにも気が付きました。目次を開いて御覧になればわかることですが、一番最初に「短歌のつくり方」とあつて、この合宿教室に参加して初めて歌を作った人達が、どんな経路で歌を作つていったか、実例を以て示されてゐて、短歌の原則、歌をつくる目的、と読み進めば、よくわかつて、本当にいろいろなことに気づかされてまゐります。私があらためて申し上げることはなささうな気がいたします。それから、正岡子規の歌と歌論、現代短歌批判とつづき、学生諸君の作品も紹介されます。第二部は「短歌のいのち」

と題されて、万葉の防人の歌、源実朝の歌、戦国武将の歌、幕末志士の歌、大東亜戦争戦没学徒の遺歌、最後に天皇の御歌といふ順序で記載してあって、歌の作り方と同時に日本の歌のいのちの伝統が心をこめて説かれてゐます。いはゆる歌壇もしくは世の短歌人を超えて、実に多くの日本人が有史以来、短歌といふ形で心を詠んできたことがわかります。どうぞ皆さんも、いはゆる歌よみにとらはれず、取り組んでいただきたいと思ひます。

もう一言付け加へますが、私共が学生の時分、歌を勉強するテキストとして、先程山田先生も御紹介になつた三井甲之先生といふ方の「明治天皇御集研究」をよく読みました。いま国文研叢書として復刊されてゐますが、その中の一節にかういふ言葉があります。「和歌を作りまた味ふことは、個人にとってはこの上もなき内心の楽みであり、また同時に国民教化の基本である。」近頃非常に実感を以て味はれる言葉でありますし、「歌」とはそのやうなものであらうかと思はれます。

### 言葉に感動するといふこと

歌は作者が実際に感じ、感動したことを言葉に表現したものですから、人の「言葉」を眞実受けとめようとする心構へがなければ味はへるものではありません。頭の前から出るやうなお

しゃべりの空しさ、思ったまゝを言ふことのむづかしさを、つくづくと経験したのは特に昨日の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を輪読した時ではなかったでせうか。各班に分れ、前後四時間をかけて随分熱心に読みました。「世間虚仮」といふ言葉がいきなり出てきた。字句の意味を辿り、文脈を辿っていくこと自体が精一杯ながら、苦勞してその意味を尋ねてゆく。本当にむづかしい文章をよくも途中で放棄せず、一所懸命に読まれた。それほどあの文章は何かわれわれを惹きつけ、抱納するやうな非常に深い心の籠った文章だったからでせう。さういふ文章を読んで、さあどう思ふか、と班長さんが皆さんに問うてみました。自分の言葉が中々出てきません。普通のおしゃべりで返すことの出来ない沈黙が続き、非常に大きな意味のある



文章から受けた思ひが、自分の言葉になってこない。そこを努力して、自分の本当に感じたことを言葉に出してみる。拙いとわれながら思ったにしても、小さい声ではあっても、それは自分の心をうちつけに言っているわけですから、聞く人の心を打ち心を開かせます。自分もそれによって、十分ではないが何か言ひ得た、といふ喜びを感じます。感じたままを「言葉」に言ふ、そのむつかしさと同時に、言葉の重み、言葉によって開かれるお互ひの心の交流といったものが痛感された輪読であったと思ひます。歌もさういふところとながってゐるのであります、大きな感動を前に、言葉を整へてゆくといふことは大変な努力がいると思ひます。

私事に互つて恐縮ですが、若い時にかういふ経験をしたことがあります。兄が支那事変で満洲に出征したその留守中、長姉が伝染病に罹つて急死しました。父親がそのことを出征中の兄に手紙で報せるのですが、あとで兄がその手紙のことを私に語ってくれました。何月何日にこれこれで姉が亡くなった、お前の兄弟をここでかういふ不慮の伝染病で死なしたといふことは誠に相済まぬ、といふ意味の手紙だったやうで、受けとつた兄の感動がそのまゝ私に伝えられて実に忘れ得ない思ひ出となつてをります。一家の嘆きはもとよりですが、兄の感動は父の手紙の文章にあったのです。わが家にとつての大事件は、無駄な言葉を押し殺して非常に簡潔な文章で事実が報告され、済まなかつた、といふ身を切るやうな一言が、いつまでも胸に鳴り響いた、といふのです。肉親の間に往き来することばですから、忘れ難いと言つても取り立てて

いふ程のことではありませんが、一つ付け加へますならば、一つの事実の簡単な報告も、痛感の一言も、親子だから当然とはいへ、心の通ひ合ふ世界の中でこそ、深刻に響き合ふ「言葉」が出てきて心にいつまでも消えない、といふことが言へるのではないでせうか。

聖徳太子のお言葉を読んでもみます。

「上やはら和下睦あげつらびて事を論かなふに諧おのづかひぬるときは、則ち事理おのづか自ら通ふ。何事か成らざらむ。」

これは憲法十七条の一に曰く、「和を以て貴しと為す」に始まる第一条の結びのお言葉です。国家の大事を、お互ひそれぞれの担当部門の奉仕者として語りあってゆく時に、上に立つものも下に順ふものも、我が身に拘らずお互ひに心を偲び合ひ、心を通はせて議論を進めてゆくならば、事態の筋道はそれぞれの人の心に納得されて相通ふ。さうであるならば、何事か成らざらむ、といふ意味でせう。互ひに心を通はせ合はうと努力して、真実のことばに触れることが「諧かなふ」といふことでありませうから、自ら努力して真実のことばを言はうとし、そして人の言つてゐる言葉を本当に心傾けて聞くといふ時に、言葉は大きい力となつて国家の大事を整へてゆく、事理自ら通ふ。一座をリードする言葉はまことに感動的な言葉であります。手前勝手な、力や知識をひけらかすやうな話の仕方からではなく、「上和下睦あげつらびて」心を通はせ合

はうとする一座の中からこそ、人の心に響く感動的な言葉が生れてくるものと思はれます。  
さういふ感動の籠った言葉、言葉の姿に気づいてほしいと思ひます。

### すぐれた歌との出会ひ

短歌が五七五七七といふ音数律で一首をなすといふことは、皆さん御承知のことですが、「これが短歌といふものか」と初めてわかった気になるのは、その歌の調べといふか、言葉の姿といふか、それに感じて、いゝ歌だなあ、と思ふやうな歌に出会った時だらうと思ひます。その好きな歌をよんで、作者の喜びや悲しみや、嘆きや感動の仕方に自分の心を置いて、作者の心の深さを味ふ、そしてその感じ方を学び、感じ方をまねて自分も歌を作ってみる、歌の作り始めはさうしたものであらうかと思ひます。私も今迄いろいろな歌に接してきて、いゝ歌だなあと思つた歌は数限りなくありますが、いゝ歌に出会ふことほど、歌を作らうとするものにとつて勉強になるものはありません。そのうちの二三をこれからお話ししようと思ひます。

### (一) 柿本人麿の歌



淡海あふみの海夕波千鳥な汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ  
（万葉集卷三）

私が学生の頃ならつた歌です。歌を作り始めの頃知つた歌ですが、年経つにつれて受ける感動が加はつてまゐります。「淡海あふみの海」の「海み」を「淡海あふみの海うみ」とも訓みますが、鹿持雅澄といふ幕末土佐の、志深い学者の著述「万葉集古義」の訓に従つて「淡海あふみの海み」と私はよみ慣れてきました。

万葉集卷一には同じ人麿の「近江の荒れにし都を過ぐる時作れる歌」といふ長歌があつて、天智天皇が定められた大津の宮が、壬申の乱後廢都となつて荒れ果ててしまつた、その跡をたづねて詠んだ有名な長歌です。「玉たま禰なすき 畝火うねびの山の 櫃原かしばらの」と始つて、建国の初めから御代御代のすめらみことが宮居を定めてこられた大和の国から、先のみかど天智天皇にはどう思はれたのか、奈良やまを越えて琵琶湖のほとりに都をお定めになつた、その大津の宮が、壬申の乱後は再び大和に遷都があつて当時の御殿ごとく荒れはてしまふ。「百敷ももぢきの 大宮どころ 見れば悲しも」と歌はれてゐます。

「いにしへ思ほゆ」といふ「いにしへ」は、この「過近江荒都一時」の歌をうけて、大津の宮に天智天皇がしました当時を回顧するにとどまらず、歴代天皇の御代々々の遠い「いにしへ」までも込めて人麿の胸中を去来するものではなかつたでせうか。

「夕波千鳥」といふ言葉がまた大へん美しいと思ひます。夕波の上に飛んでくる千鳥を、そのまゝ「夕波千鳥」といふ言葉に詠みあげるといふことは、非常に優れた詩人的感覚だらうと思はれます。鹿持雅澄先生がさう指摘されてゐたと思ひます。「心もしぬに」といふのは、草木がしほれるやうに、つまり心が躍動する、高揚してゆくのは反対に、心が沈むやうな淋しさをもって、いにしへが偲ばれると歌はれてゐる。これも大へんやはらかい、心に沁み入るやうな言葉だと思ひます。

人麿は慟哭の詩人といはれてゐます。まさにさうだと思ひます。先輩の誰かが朗読されるのを聞いて、いゝ歌だなあと思つたのです。「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬに」、音律に限られる一言一言が、やさしく、深く、歌ひ継がれて、「いにしへ思ほゆ」と結ばれてゐます。いにしへが思はれる、といふ作者の心の深さが迫ってきます。鹿持雅澄先生はこの歌を評釈されたあと、「あはれ堪へがたし」と感想を述べてをられます。この言葉にもまた深く感じさせられます。

(二) 今上天皇の御製

桜

(昭和五十五年御歌会始の御題)

紅くれないのしだれざくらの大池にかけをうつして春ゆたかなり

毎年新年に、宮中で御歌会始の儀が行はれますが、今年は一月十日に行はれました。一月十日に行はれますと、その日の新聞の夕刊に、天皇、皇后の御製、御歌をはじめ、皇族の御歌、一般の入選歌などがすべて掲載されます。ことしのこの御製を新聞で見まして「い、お歌だなあ」と非常に感動しました。

わかり易いお歌で、「紅のしだれざくらの」と「の」が重って、たいへんおほらかな悠々たるしらべで歌ひ出されてゐます。短歌は御承知のやうに、五七五七七と歌ふわけですが、上句下句に分けて五七五で句切り、七七とつなぐ詠み方はよくないと思ひます。たとへば「紅のしだれざくらの大池に」で切り、「かけをうつして……」と詠むと意味が中断されて味はひ方が阻礙されます。短歌は「一首一文」を原則としますから、よむ場合も一息に、作者が一首に籠めてをられる感情をまっすぐに受けとめるためにも、一息によんで味はふべきだと思ひます。途中でちょっと間をおくとするならば、「紅のしだれざくらの」で半呼吸をとり、「大池にかけをうつして春ゆたかなり」とよんだらいかと思ひます。

宮中の吹上御苑に大きな池があつて、それが大池と呼びならはされてゐるさうです。私も写真で拝見しましたが、その広い大きな池のほとりに、樹齡何年とも知れない大きなしだれ桜が

ある。しだれ桜ですから枝がすーと何条にも垂れ下ってゐる。陛下が御覧になつてゐるものは、それが満開のしだれ桜でありませう。揺らぐともなくれなるの枝垂れ桜と、大池に映るそのかげと、広くみそなはして、「春ゆたかなり」と結んでをられます。充実した情景に御目を止められつゝ、心は「春ゆたかなり」といふ無限の世界、無限の広がりをお憶念させ給ふ。終戦と、その後の幾多の苦難を「よろこびもかなしみも民と共にして」堪へつゝ、あられる陛下にして、「春ゆたかなり」と御実感みなぎる感懐をお詠みになられた、その「春」はまた「民と共に」ある春でありませうし、あるいは古人が幾度となく詠ひあげた、心深い「春」でもありませう。このお歌を拝読する我々にとりまして、作者と同じく現実の感覚の中に、みづみづしい「春」を偲ばしめられるのであります。

さう言へば、人麿の「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ」といふ歌も、うつつに見、感覚する情景に耳目は集中しつつ、心は限らないにしへを思ふて慟哭してゐます。一つの心が一本にまっすぐに、一首に息づいてゐます。すぐれた歌に共通するところかも知れません。一首の中で、折れたり切れたりしてゐない。一首は一本の大きな心によって、感情によって貫かれてゐる。「一首一文」をたふとしとする、歌の原則を、これらの歌をくり返しよんで学びたいと思ひます。

(三) 正岡子規の歌

金槐和歌集を読む（明治三十二年）

人丸の後の歌よみは誰かあらむ征夷大將軍みなもとの実朝

大山のあぶりの神を叱りけむ將軍の歌を読めばかしこし

路に泣くみなし子を見て君は詠めり親もなき子の母を尋ぬると

はたちあまり八つの齡を過ぎざりし君を思へば愧ぢ死ぬわれは

鎌倉のいくさの君も惜しけれど金槐集の歌の主あはれ

鎌倉の三代將軍源実朝は、万葉集に深く傾倒し「金槐和歌集」といふ歌集を残しました。子規は短歌を学び、古今集以後の歌風に強い不満を抱いて短歌革新を志しますが、源実朝の歌を、本当にすばらしい歌だと発見して非常に喜ぶのです。この「金槐和歌集を読む」といふ子規の歌は、実朝の有名な次の歌を読んでの連作であります。

時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめ給へ  
いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母を尋ぬる

子規連作の二首目の「大山のあぶりの神」といふのは、相模の大山にある阿夫利神社で、古くから雨乞ひの祈願をする社となつてゐます。「はたちあまり八つの齡」といふのは二十八にもならないうちに亡くなつてしまつた実朝を悼んで歌つてゐるのです。

私など人から歌をもらふと非常に嬉しい。私あてにと呼びかけて歌つてくれた歌をもらふのは嬉しいものであります。あるいは私の方から、友人に歌を書いてはがきで送ることもありまゝす。そして「ああ、君の歌読んだよ」と言つてくれただけで実に嬉しいものです。だから歌といふものは、あるいは言葉自体、直接自分に向けられてゐると感じた時に、その言葉は生きて受けとめられるわけです。人に贈る歌、返す歌、相聞の歌は全部さうなのですが、さういふ歌には昔からいい歌がたくさんあります。

この子規の歌は、源実朝に差し上げる歌、亡くなって既に久しい実朝の歌に感激して、その人に返す歌ともいへるのではないかと思ひます。「親もなき子の母を尋ねると」といふ風に、実朝の歌の言葉をそのまゝ、繰り返すことにも、何のをかしいところはありません。その言葉から子規が受けた感動が、そのまゝ、子規の言葉として繰り返して使はれたやうにさへ思はれます。

人丸の後の歌よみは誰かあらむ征夷大將軍みなもとの実朝

人丸とは先程申しました柿本人麿。子規が仰ぐ人麿に次いで聳え立つ歌人は、征夷大將軍たりし源実朝であらうか、と実に力強く実朝を賞揚し、病体を顧みず短歌革新の事業に渾身を傾けた子規の実朝評価がうかがへます。

皆さんがこれから歌を作られますのに、霧の中の仁田峠を歌ふ方もをられるだらうし、合宿中いろいろ受けた感動を歌にしようとする方もあるでせう。いまこの子規の歌をよむと、友におくる歌、感動した言葉に答へる歌なども大いに作っていたゞきたいと申し添へておきます。

### 短歌の作り方

○ 五七五七七の音数律は日本語の詩の固有のしらべとして、口に出しやすく、耳に入りやすい調子だと思ひます。国語は二音三音四音のものが多く、自然、二三（三二）、もしくは三四（四三）の組み合せが多くなるから、五音もしくは七音に落ちつく運命をもつてゐる、とは最近出た大須賀乙字といふ人の俳論集（講談社学術文庫）で読んだ事ですが、さうではないでせうか。日本語がさうであるのなら尻込みすることはありません。指折り数へることも初めのうちは当然かも知れませんが、先づ思ひきつて作ってみることです。

先程は、いゝ歌だなあと思ふ歌について感動を申し上げましたが、それらは皆、切実な感動が歌はれてゐる。本来、歌は、歌ひたいといふ切実な感動がなければ歌にはなりません。その感動をすなほに表現しようとするのが、歌の道であらうと思ひます。あることを感ずる、自分だけが感ずることの出来た、人とはちがふその感じを歌ひたいと思ふことがあります。その、人とはちがったもの、といふことにこだはると、よそ目を飾らうといふ気持ちに知らず知らず陥ることになります。それがすなほでないといふことになりませう。

昨日、松田信一郎さんが「青年研究発表」の時にこの壇上で、「合宿が終つて汽車に乗つて熊本に出る間、今迄気のつかかなかつたくらゐに、目が洗はれたやうに景色が美しく見えた」と言ひました。景色を見て歌を詠まうといふより、景色を見て、あゝきれいだなあと思ふ心が先だらうと思ひます。かと言って、何を見てもあまり美しいとも思へない、といふこともありませう。さういふ状態の時に、歌を作れと言はれて困る方もをられることせう。けれども、こゝに来てひぐらしの声を聞く、ふつと母親のことを思ふ。あるいは友達の何気ない一言に、自分の心が開かれていったといふ経験をされた方もありませう。何か感じないわけはありません。その感じたことを五七五七七の形に作ってみることで、作ってみようと努力しますうちに、いろいろなことに気づかせられます。確かに、感じてゐることにはまちがひない、その事を歌にしようと考へてをりますと、その感じた事はいふ事だったのか、と新しく気づき、その



感じ方が深まるといふことをよく経験します。だから先づ歌を作らう、といふ努力から始める他にはありません。

○ すなほに表現する、といふ事は思ふことをありのままに、といふことであります。明治天皇の御製に、

歌

思ふことありのまにまにつらぬるがいとまなき世のなぐさめにして (明治三十七年)

歌

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ (明治四十年)

虫声非一

さまざまの虫のこゑにもしられけりいきとしいけるもののおもひは (明治四十四年)

とあります。明治天皇は御生涯のうちに九万三千余首もの歌をお作りになってゐます。維新と独立を成就するために、国歩艱難の先頭に立たれて国の礎を固めるといふ、想像を絶するばかりの御心労の御一生を通じて、これだけの歌をお作りになるとは、これまた余程の御努力を傾

けられての御修業であつたと偲ばれます。さういふ「いとまなき世のなぐさめ」となるものこそは「思ふことありのまにまにづらぬる」ことだと歌つてをられるのです。「月」とか「花」とかにまつはる勝手な空想にひっぱられて、「ありのまにまに」歌はうとしないのは、まことの歌ではあるまいといふ御述懐ではなからうか、と二番目の御歌からは思はれます。

「月花のもてあそび」とは、「月」といへば「ものおもふ」といふやうな連想の型にとらはれるな、といふことでせうが、ものをよく見ないで、ありのままに見ないで、頭の中に既にある言葉をつらねてしまふ、といふことにもあてはまることだと思ひます。たとへば、杉の木がすゝとまっすぐに立ってゐる。これを天を突くやうに立ってゐる、と言つたとすれば、それは、天を突くやうに、といふ言葉が先にあつて、それが口をついて出たのであつて、もっと確かに見て言葉にしなければならぬ、あるいは、まっすぐに立ってゐる、とそのままに言つた方が少くとも正確でせう。今この雲の間から日が射してくる、さうすると、雲間を破る日の光、といふやうな言葉がつい出てしまふ。これも同じことで、雲間から日が射してきた、と詠むのがありのまゝに詠むといふことになります。頭の中にある言葉を並べてゆくといふのでは、感じたまゝを述べたことにはならないからです。

我々が感じ、また思ふことは、予め用意されてゐるものではなく、音を聞き、ものを見、ものに触れて産み出されるものでせう。あはれに心揺らぎゆく、その感じ、その思ひに随つてゆ

くことが「ありのまにまに」思ひ、また感ずるといふことにならうかと思ひます。「さまざまの虫のこゑにも知られけりいきとしいけるもののおもひは」その「思ひ」は、夜の秋草にすだくさまざまの虫の声に聞く、作者の胸に、実感的に偲ばれる生けるものゝ思ひであります。

○ 俳句には、独立した句の連結、錯綜といふ知的作用があつて、そこにおもしろみがあるのですが、歌にはその反省工夫の余裕をあらしめないところに特色があるとされてゐます。一首の中に充実した内容をもちながら、あるいは変化の微妙をたゞへながら、一首を一文にして、簡単な形の中にをさめるといふのが短歌の原則であらうと思ひます。先に挙げました今上天皇御製の「春ゆたかなり」、柿本人麿の「いにしへ思ほゆ」のやうに、ことばのつづき全体に作者の精神がゆきわたって一文をなす、といふところを学んでゆきたいと思ふのです。

従つて、一首の中にあれもこれも歌ひ込まうとすると、焦点がばらばらになつてしまひます。作者の気持としてはどれもつながりがあるのだと言っても、形ではばらばらになつて一首の統一感はなくなくなつてしまひます。焦点を一つに絞るといふことが大切だと思ひます。然しながらまた、大抵の感動は、波うつやうな感情でありますので、その波に乗つて打ち出す言葉そのままの詩は、一首の長さにはいり切れず、一首を歌ひ、更に一首二首と歌ひ継いでゆく連作の形をとることにあります。独立短歌から連作短歌へと発展してきたことは、極めて自然の展開で

あらうと思ひます。

最後に、連作の実例を御紹介してお話を終りたいと思ひます。実例は未熟な点が多々あるとは思ひますが、作者の太田文雄さんは、防衛大学校に在学中、この合宿教室に何回か参加してきた海上自衛官です。現在、一年か二年の予定でアメリカの兵学校で教官をしてをられるさうです。この太田さんが今年のお誕生日に宮中参賀に行かれた時の歌です。

天皇誕生日に参内して (五五・四・二九)

太田文雄

宮城に向ふ砂利道ふみしめつ気は高ぶりて足どり急ぎぬ

五月晴れまぶしきばかりの日を浴びて人皆つどへり日の丸を手に

テラスからすめらみことは出でませりみ手打ちふらしほほゑまれつつ

日の丸を高々とあげ打ちふりつ感きはまりて涙こみあぐ

ふと見ればとなりの人もハンカチで目がしらおさへ涙ふくなり

我を忘れ天皇陛下萬歳と声はりあげてさけびをりけり

日の本の国の姿はかくありぬ受けつきゆかむ千代に八千代に

この第一首は、彼の行動の順を追ってゆくための説明ではありません。宮城に向ふと思ふだけで砂利を踏みしめる音に、彼は気分の高揚を感じてゐる。彼の感動は、この砂利を踏みしめるところから、天皇陛下萬歳を唱へるまで、一貫した感動を、波うつまゝに順を追って詠んでいったのです。これが連作の作り方のコツだと思ひます。

では感じたこと思ったことを言葉にのせて歌を作ってみて下さい。楽しみにしてをります。



「断然自ら任ぜずんば、  
何ぞ後世に待つことを得んや」

九州大学医学部四年 長澤 一成







今日、演題に挙げました「断然自ら任ぜずんば、何ぞ後世に待つことを得んや」は、幕末の志士吉田松陰の言葉です。私は、現在九州大學で醫學を専攻してをる學生で、何も吉田松陰や古典の研究をしてゐる譯では御座居ません、このやうな場で御話し出来るやうなことは何もないのですが、數年來吉田松陰の文章を愛讀して参りまして、私の心を強く捉へた松陰の言葉についてお話いたしたく今日、登壇致しました。

さて今日御話し申し上げます「講孟餘話」とは、安政三年(一八五六年)に成つた、吉田松陰の代表的著作であります。字義通り『孟子』に觸れての随想録といつたものですが、之が成つた経緯に就いて、少し御話し申し上げねばなりません。嘉永六年(一八五〇年)六月三日、ペリーが、和親通商を求めて日本を訪れてより、時代は、一気に動乱の様を呈してゆく譯ですが、その四年後の安政元年正月には、先に幕府が保留した開國通商の諾を得んものと、再びペリーが神奈川沖にやって参ります。此の時松陰は江戸遊學中でしたが、志士の間では、ペリー斬るべしの聲が盛んになってゆく。がしかし、三月三日、幕府は米國と和親條約を締結、戦端を開く名分もそれと同時に消滅し、危機は去ります。松陰は、江戸に出てより、西洋の科學技術や文化に對して非常な興味を示してをり、烈強の侵寇に日本が對處してゆくには、どうかして、これを攝取してゆかねばならぬと思ひ定めてをったやうです。事實、ペリー再来の前年九月、長崎に露艦が来航した折、これに身を投じて海外に向けて出國しようとしてをります。

結局、松陰の長崎入りと露艦出航とに僅かな行違ひがあり、この時は失敗してをります。その松陰にとって、ペリー来航は、正しく僥倖であった譯で、彼は自らの眼と膚で、西洋といふものに接觸しようとしたのです。三月五日、京橋の酒樓で、極く近い知己七名に、自分の決意を語ります。大方の友人は、これに賛成するのですが、唯一人、無二の親友である宮部鼎蔵だけが、強硬に反對致します。恐らく宮部にしてみれば、松陰を失ふことを恐れたのかも知れません。その時のことを、松陰はかう書いてをります。

「余乃ち毫を揮ひて曰く、『丈夫見る所あり、意を決して之を爲す。富嶽崩ると雖も、刀水竭くと雖も、亦誰れか之れを移易せんや』と。宮部其の留意なきを知り遂に之れに同ず。佐々（肥後藩士、宮部の門人）痛哭流涕して曰く、『神州の陸沈此處に至る、君其れ何の術を以て是れを維持せんと欲する』と。余も亦覺えず流涕、遂に共に誓つて曰く、『寅巳に断然危計を行ふ。固より自ら期す。一跌して首を鈴森きんもりに梟きやうすることを。然れども諸君今日より各々一事を成して國に酬いば、其の間成敗なきに非ずと云ふとも、何ぞ國脈を培養せざらん、如何々々』と。」

當時の幕府は、一武士が、海外に渡航することを許さなかつた。やる以上、決死の覺悟である。列強諸國は、我物顔にアジアに侵寇、中國を始め近隣諸國を蹂躪してゐる。そのやうな中であつて、私が事敗れて、刑場に首を晒すことになつても、此處にゐる諸君一人一人が、身を

「断然自ら任せずんば、何ぞ後世に待つことを得んや」(長澤)



投じて一事爲すことあれば、その間、様々な挫折や失敗はあるかもしれぬが、必ず日本の命脈は保たれる。松陰の此の言葉を聞き、同席の七人も思はず流涕、彼等に送られながら、松陰は永訣を告げ、その場を辭します。その後彼は、萩郊外、澁木村出身の足輕金子重之輔と落合ひ、下田に向ひます。三月十八日には下田に入り、機を伺ふこと数日、廿七日、午後八時頃、夜陰に乗じて、下田に投錨中の米艦隊旗艦「ポーハタン號」に小舟で漕ぎつけます。一旦は乗船したのですが、既に和親條約を締結してゐた米國使節が、國禁を犯さうとしてゐる日本人を助ける筈もなく、通詞ウキリアムスとの談判空しく、ボートで濱に送り返されます。長崎に續いて、此處でも松陰の行は、挫折した譯です。翌廿八日朝、金子重之輔と共に、下田番所に自首、数日の後、取調べを終へた松陰達は、平滑ひらなめといふ番人の獄に下ります。その時の様を松陰は、かう記してをります。「獄只だ一疊敷、兩人膝

を交へて居る。頗る其の狭きに苦しむ。番人に借りて、三河風土記、真田三代記等を讀む。又皇國の皇國たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の惡むべき所以を日夜高聲に稱説す。獄奴、蠢爾しゅんじと雖も亦人心あるもの、涙を揮つて吾が輩の志を悲しまざるなし。」（『回顧録』）彼等は、當然のことながら、刑死を覺悟してゐた。もはやこれ迄と覺悟を決めた侍二人が、僅か一疊の牢で、諸外国の横暴を語り、日本の歴史を語り、人が人である所以を語り合つてゐる。その姿に感じた獄卒は、牢の傍で涙を流しながらこれに聞き入つてゐる。眼前に、その様が髣髴とするやうな文章です。

その後、四月十日には、江戸傳馬町の牢に送られるのですが、此の歳の夏頃から、金子重之輔が病みがちになり、九月十八日の裁定申し渡しの際は、既に立つて之れを聞くことが出来ず、仰臥した儘、之を受けます。裁定は、松陰らの覺悟にも拘はらず、藩に幽閉といふ寛大なもので、十月廿三日、唐丸籠に入れられた儘、二人は入萩致します。道中、松陰は必死に金子を励すのですが、衰弱し切つた金子の餘命は幾許もない様子で帰國したのです。その後直ちに松陰は「野山獄」へ、金子は、その向ひの「岩倉獄」に投ぜられます。「野山獄」には、當時十一名の獄囚がゐたのですが、彼等は、實際に罪を犯したといふ譯ではなく、世間の生活に馴染むことが出来ず、その家人ですら、扱ひ兼ねるといった者達だったやうです。家人の申出によつて、借牢といふ形で、入牢してゐたのです。最年長者は七十八歳、在獄四十四年、一番若年の

者で三十六歳、在獄四年です。時に松陰廿五歳。彼は、獄因に就いて「吾が徒、終に此處に死  
 せんとするのみ。復た天日を見ることを得ざるのみ。」と書いてをります。このやうな獄中に  
 は、無気力と怠惰が風靡し、凡そ學問とは縁遠い生活であった様子は想像に難くありません。  
 此處でとりあげました『講孟餘話』は、実は、此の獄中で行った、囚人達との『孟子』講讀の  
 記録なのです。しかも、松陰の一方的講義といふ形で行なはれたのではなく、各人の輪講とい  
 ふ形で行なはれた。しかし、弱冠廿五歳の若者が、このやうな獄に入つて、獄囚と『孟子』を  
 語る迄には、想像を絶する苦闘があつたやうです。時折、松陰の實家から小豆を送つて来る。  
 そのやうな時には、獄囚に呼び懸けて、米を供出し合ひ、粥を炊くのです。又、獄囚が病に伏  
 した時、醫者は、なかなかやつて来ない。傍で見兼ねた松陰は、知人の蘭方醫に教を請ひ醫書  
 を研究、醫術の心得を得ます。又、急な金銭の入用に對して、皆で金を積立てておくといふ工  
 夫を提案、實に心細やかに彼等と接してゆきます。しかも、彼自らは、相変らず、學問と述作  
 に励んでゐる。因みに、松陰が、野山獄在獄中一年間に讀破した書物は、彼が書き留めてゐる  
 だけで六百十八冊にのぼります。決して孤高を保つてゐる譯ではないが、怠惰に流れもしない。  
 この頃から、獄囚達も、このやうな彼に興味を感じ始め、俗人と異なる松陰の姿に、徐々に心  
 を開かれて行つたやうです。安政二年正月十一日、病篤かつた金子重之輔が、遂に回復せぬ儘、  
 廿五歳の若さで世を去ります。松陰は慟哭してこれを悲しむのですが、金子の友人、知人に書

簡を發し、弔歌、漢詩などからなる追悼文集『冤魂慰草』を作ります。又、獄死の金子には、墓を建てて遣ることが出来ない。決死の行を共にした松陰としては無念でならなかった。そこで彼は、獄での食事から菜を抜き、その餘った分を蓄へて金子の碑を作ります。食事が日々の生活の中で最大の愉しみであった獄囚達にとって、此の松陰の姿は、衝撃であった。このやうな松陰の姿を、日毎傍にあって見てゐる獄囚達は、次第に、松陰に問を投げかけるやうになつてゆきます。松陰も、逆に、彼等が得意とすることに就いて教を乞ふ。さういふ日々を送り、安政二年四月六日『獄舎問答』脱稿。これは、當時の國際情勢や日本の歴史に就いて、獄囚が問ふたことに對して、松陰が答へてゆくといふ形で成つたものです。そして遂に四月十二日、松陰は獄囚に諮り、孟子の講義を開始。六月十三日には、獄囚達による輪講がスタートします。その後十二月十五日、松陰は、藩主の特恩を以て出獄。實家杉家に御預けといふことになります。獄中での孟子講讀は、安政二年十一月廿四日迄續けられ、『孟子』萬章上篇を以て獄中執筆を終つてゐますが、出獄二日後の十二月十七日には、家人と共に、引續き孟子講讀を開始してをります。そして、安政三年六月十三日、奇しくも獄囚達との輪講開始一年にして、孟子全篇の講義を終へ、その五日後、六月十八日に、この「講孟餘話」を脱稿したのです。

その『講孟餘話』の序文の一節を引きます。「夫れ孟子の説は固より辨を待たず。然れども之れを喜びて足らざれば乃ち之れを口に誦み、之れを誦みて足らざれば乃ち之れを紙に筆す、

亦情の已む能はざる所なり。則ち割記さつきの作、其れ廢すべけんや。」

「割記の作」とは『講孟餘話』のことです。松陰は、『孟子』を一つの完成した姿と見てゐる。後世の自分が、これに、あれこれと注釋をつけ加へる餘地など無いのだが、『孟子』を讀んでゐると、孟子と自分が、しっかりと結ばれるやうな喜びが沸々と湧きあがって来る。抑へようとしても抑へきれぬ喜びは、自づと朗誦や筆写に松陰を導いてゆく。その感激が、「割記の作、其れ廢すべけんや。」といふ強い表現になつて現れてゐるのでせう。松陰の學問への意欲とその實踐には目を見張るものがありますが、彼は、決して今流の、客観的に書物を讀むことが學問であるといった態度はとらなかつた。いつも、自分の全身全靈をもつて古典にぶつかつて行つた。それは、彼が京橋の旅籠や野山獄中で友人達に對した態度と寸分變るところがありません。この序文の簡潔で勁つよい書き様は、『講孟餘話』が、『孟子』の研究書といったものではなく、孟子にぶつかつて動いた、松陰の心の生きた證あかしであることを、率直に傳へてをります。

讀書・學問といふものは、誰にでもわかる普遍的事實を理解、表現するものではない。私自身、何に心を動かされ、どう生きてゆかうとしてゐるのかを明確にしてゆくことだ。松陰が、かう考へてゐたといふ事は、この序文の一節が、明らかに傳へてゐるところです。

扱て、次に引用しますのは、『講孟餘話』告子上篇、第七章であります。

「理義の我が心を悦ばすは、猶ほ芻豢すうかんの我が口を悦ばすがごとし。

程子曰く、此の語親切にして味あり。須らく實に理義の心を悦ばすこと、眞に猶ほ芻豢の口を悦ばすがごときを体察得して始めて得べしと。余謂へらく、本文、程説、並びに親切といふべし。試みに余が体察得する所を説かん。余理義に於て固より敢へて自ら得る所ありと云はず。然れども好んで書を讀み、最も古昔忠臣、孝子、義人、烈婦の事を悦ぶ。朝起きてより夜寝ぬるまで、兀々孜孜ごうごうししとして且つ讀み且つ抄し、或は感じて泣き、或は喜びて躍り、自ら已むこと能はず。此の樂しみ中々他に比較すべきものあるを覺えず。況や更に良友を得て奨勵切磋し、肝膽を吐露し、互に天下の大計を論じ、身を以て大難至險に當らんとするに當りて、満心の愉快比すべきものなし。此の樂しみ到る所居る所吾れと相隨はざるはなし。過ぐるものは追思して之を樂しみ、来るものは豫算して之を樂しむべし。今美肉嘉肴かこうありと云へども、一飽の餘復た顧みるに意なし。麥飯菜羹ばくはんさいこうと云へども、一日三食すれば復た求むるものなし。且つ理義の樂しみ胸中に充溢するに方りては、孔子の所謂肉の味を知らざる如きものあり。蓋し飢ゑて食を忘れ、渴して飲を忘れ、寒して衣を忘れ、寝ねて寐ひを忘るる者、是より甚しきはなし。是れ余が自心体察得する所なり。故に余断じて云はく、理義の我が心を悦ばすは芻豢の比すべきにあらずと。」



「芻豢」とは牛馬などの肉を指し、美食のことであり、理義とは、自分が今生きてゐることの意味、自らの人生の意義とでも申しませうか。牛馬の肉の味は、實際に食してそれを味はふのだが、理義を知る喜びも同様に、體で實感するものである。肉のおいしさは、それを食したことのない人に、如何に言葉で説明しても、本當にはわからない。同様に、理義といふものも頭で理解してゐる間は、死物に過ぎない。思はず身震ひするやうに、體全體でこれを受止めた時に、初めて、教條的言辭としてではなく、生きた言葉として、私達の心の裡に這入ってくる。

扨て、孟子の此の言葉を程子は次のやうに評價します。程子は北宋時代の碩學で、おそらく、學識に於ては松陰など足許にも及ばなかったであらう大學者であります。「此の語親切にして味あり」、親切とは、人生の真相に鋭く切込んでゐるといふ意でせう。そして、「理義」を知る勘所を、程子は、「體察得」といふ一語で表現した。この程子の、要を得て簡潔な批評には、松陰も感心したやうです。では松陰自身はこの文章をどう讀んだか。松陰は次のやうに言ひます。「余理義に於て固より敢へて自ら得る所ありと云はず。」大變謙虚な物の言ひ方になってゐる。たゞ、松陰は、これらの言葉を概念的に定義しようとする気持ちにはなかつた。そのやうなことをすれば、今、自分の心に思ひ出され、湛へられてゐる理義に觸れた喜びが、壊されて了ふのではないか。さういふ思ひが切つたのではないでせうか。従つて、松陰にとって理

義を語るとは、理義を知る喜びを表現することであり、その爲には他ならぬ彼自身の人生事實を具體的に語る他に、術はなかつたのです。

「然れども好んで書を読み、最も古昔忠臣・孝子・義人・烈婦の事を悦ぶ。朝起きてより夜寝ぬるまで、兀々孜孜として且つ読み且つ抄し、或は感じて泣き、或は喜びて躍り、自ら已むこと能はず。此の楽しみ中々他に比較すべきものあるを覺えず。」松陰の心の躍動が如實に傳はつて参ります。そして、此の喜びに満された心は、友人達にも向けられてゆく。友人達と古の「忠臣・孝子・義人・烈婦」を語り、人生を語り、時に激し、時に泣き、その中から、人生の「大難至險」にぶつかつてゆく知力と膽力を自分の裡に培つてゆく。此れに比する喜びが、他にこの世界の何處にあらうか。松陰の人生には、所謂挫折が、いたる所に見られる。しかし、彼は何時も、その中で自分は如何に生きるのか、今、爲さねばならぬ事は何なのかを自らに問ひ續けております。私は、彼の、さういった人生への、すさまじいばかりの活力の源泉を、此處に見る思ひがしてなりません。

「此の楽しみ到る所居る所吾れと相隨はざるはなし」とは、下田の牢や野山獄での彼の振舞ひが證してゐるところです。そして、この喜びには、「孔子の所謂肉の味を知らざる如きもの」がある。孔子は古の聖王舜を敬慕して已まなかつたが、彼が齊に至つた時、その舜を稱へる樂を、三ヶ月もの間、美食の味も忘れて聞き耽つてゐた。これはもう、一種の戀愛であるとさへ

云へさうですが、松陰も、古人に出會ふ喜び、人生を語り合へる知己を得る喜びを、同じ思ひで語つてゐるやうに思はれます。此處迄讀んで参りまして、もう一度、出来れば聲に出して、最初から讀み返して戴き度いのですが、この一節では、理義といふものの、普遍的定義が問題にされてゐるのではない。大切なことは、それを味ふ喜びの深淺にある。これは、定規を當てて物の長さを計るやうに、外から明瞭に計測出来るものではない。私達の生きた心が、松陰の言葉に触れ、彼の喜びの深さを自得する以外に知りやうのないことであります。私には、理とは何か、義とは何かと問ふよりも、此の松陰の喜びの深さをはかつてみるの方が、余程、面白いことに思はれます。

扨て、孟子の「理義の我が心を悦ばすは、猶ほ芻豢の我が口を悦ぶがごとし」で始つたこの文章は、松陰の「余、断じて云はく、理義の我が心を悦ばすは芻豢の比すべきにあらず。」といふ言葉で終ります。程子の釋に感心しながらも、彼は、何か物足りなさを感じてゐたのではないでせうか。筆を進めるうちに、松陰の心に、嘗ての讀書經驗や、或る時は自分を勵し、或る時は激論を交した友人達の倂が、髣髴として来たのでせう。自らの人生を振り返りつつ、自分がかう思ふと、孟子・程子に迫つて行つたのです。この内心の吐露は、決して、孟子・程子に異ならうとする単なる自己主張ではない。其處には、何か釋然としなかつた思ひを齎らしたとでもいふやうな爽やかさがある。さう感じるのは、私一人ではないと思ひます。

此處で、私も、松陰の孟子の読み方に倣って、私自身の人生と松陰の言葉との關りを考へてみたいと思ひます。彼は、古典や歴史に學ぶ喜びを、このやうに活き活きとした言葉で語つたのですが、私達は一體どうでせうか。古典や歴史といふ言葉は、私達にとつて、決して耳新しい言葉ではない筈です。中學校の時分から、古典や歴史を學ぶ時間は多くあり、授業を何十時間と受け、試験も受けて来た。にも關はらず、古典や歴史は、私達にとつて大變縁遠いものとして意識されてはゐないでせうか。中に、古典に興味を抱く者があつても、文學的趣味として片付けられて了ふ。何故このやうな事になつて了つたのか。

今、私は、古典と歴史とを一緒にして話してをりますが、歴史といふものが、言葉で傳へられ、或は書き残されてゐる以上、私達の目の前には、歴史は、古典といふ形をとつて現れざるを得ない。古典は文學であり、文學は歴史と截然と區別すべきであると言はれる方もあるかもしれない。確かに、歴史には、制度や經濟も重要なウエイトを占めて来るかもしれないが、しかし、制度や經濟と云へども、それが、決して今の私達の心にはなく、當時の人々の心には、どのやうに受止められ、驅使されてゐたかに思ひ到らなければ、過ぎ去つた過去に推參することは出来ない。したがつて歴史に學ぶとは、自分が、どれ程人間を理解し得るのか、つまり、私が、心の裡に、他人を甦せることをどれ程爲し得るのかといふ、盡きることのない試みであると思ひます。そして、私達の祖先にも、私達にも、自分の喜びや悲しみを託するに、日本語

を以てする他に道がなかったといふ嚴然たる事實がある以上、歴史に學ぶとは、言葉を學ぶことと同義であると言っても差支へないと思ひます。

私達は、生れて以来、廿数年間日本語を使って生きてをります。そして、現在日本語を使って生活する事に不便を感じてゐる方は、この中には、先づいらっしやらないと思ひます。誰もが、言葉といふものは、自由に操れるものだと思つてゐる。日本語が、私達にとつて、餘りにも親しい爲、友人や家族と喜びや悲しみを分ち合ひながら生きてゐるといふ事を意識的に反省してみることが、殆んど無いといつても良いのではないでせうか。しかし、不自由を感じないとは、不自由を感じないやうな言葉の使ひ方に満足してゐるからであつて、私達が言葉を通じて、互ひの心を開き、語り合はふとすれば、言葉を使ふといふことは、やはり、それ程簡単なことではないと思ひます。私達は、今日迄三日間、班別討論や様々な講義を聞いて参りました。日常の大學生活では得ることの出来ない経験を積んで来た譯ですが、その中でも殊に、他人の言葉を聞くといふことが、如何に困難なことであるかといふことを、沁沁と味はつてゐるのは、私一人ではないと思ひます。私達の日常に氾濫してゐる、深い思ひの籠らぬ言葉は、喋るのも簡単であるし、聞くことも簡単です。しかし、自らの眞剣な思ひを吐露する時、私達は、必死になつて言葉を探すではありませんか。軽々に喋ることは出来なくなるではありませんか。聞く時も、自分を押し立てて、自らに執着した態度で聞くと、さっぱり相手の心が傳つて来ない。

さういふ心を抑へて、相手の眼を見つめ、耳を熟つと傾けなければ、語手の思ひを汲み取ることは出来ない。この精神的努力が、如何にむづかしいものであるかといふことを、この合宿で経験された方も多いのではないかと思ひます。さういふ苦勞を積みながら、友人の思ひがこちらに傳はつて来た時、松陰の言ふ「感じて泣き、或は喜びて躍り、自ら已むこと能はず」といふ世界に私達も連なることが出来る。皆さんは、學校に戻られますと、様々な友人を持つていらっしゃる。勿論、大半の方が、肝膽相照す友人を持つてをられることと思ひます。しかし、私達の今の學生生活には、志としての言葉を聞く、或は自ら述べるといふ経験が、そして、互ひに、その言葉による表現を正し鍛へてゆく機會が、餘りにも少なくなつてゐるのではないでせうか。松陰の此の強烈な喜びの表現に向ひますと、二度と生きることの出来ない、人生の一刻一刻を、冗談や當り障りのない會話ばかりで、無難に生きてゆくといふことが、大變詰らなく思へて参ります。

此處で、先程引きました「講孟餘話」序の一節、「亦、情の已む能はざるところなり」といふ表現を思ひ出して下さい。松陰はこれと同じ意味合で次のやうな言葉を残してをります。「夫れ、古に言を立つる者は、已むを得ざりしなり」と。(未忍焚稿「海國兵談跋」)私は、歴史の主調は此處に盡されてゐるやうに思へてなりません。私達の常任座臥の一人が歴史となつて残る譯ではない。どんなに些細な言葉でも、それが生き續けて来たのは、その言葉に、それ

を残した人の喜びや悲しみ、或は驚きが刻印されてゐるからでせう。誰もが、喜びや悲しみを深く味はひながら生きてゆく。そして、「情の已む能はざる」時に、その情は發露を求めて、言葉になる。皆さんも、御自身の経験で考へて戴くと、思ひ當るのではないかと思ひますが、何か大變美しいものに触れた時、誰かにそれを表現したい。その感激を隣人と分ち合ひたいといふやうな経験を御持ちの方は少なくないことと思ひます。

或は、この合宿でも、先人の和歌を数々讀んで来たわけですが、肉親の死や戀人の死といふ悲哀を、私達の先輩達は歌を詠むことによつて乗超えて来た。松陰の文章にしてもさうですが、歴史として残つてゐる言葉の裡には、いつも、それを吐いた人の強烈な思ひが流れてゐる事を忘れてはいけないと思ふ。見るにつけ、聞くにつけ、心に餘る思ひが歴史の幹を爲してゐる。文字通り、それは心に餘るものであつて、知的な記憶に餘るものではない。ポケットに年表を忍ばせておいて、何年に何があつたといふ事を忘れた時にそれを開いて思ひ出す。恰も備忘録でも讀むかのやうに歴史を讀んだのでは、いつまでたつても、歴史は眞の姿を私達の前に現さうとはしないでせう。私は、古典を讀む、歴史に學ぶといふことは、その姿勢に於て、今の自分の人生に、私がどう處してゆくのか、それを考へ實踐してゆくことと、寸分も變りのないことだと思つてをります。松陰がその両者を統一して生きてゐたやうに、私も、自分の人生と松陰の文章を讀むといふことを統一してゆくことが眞の學問ではないかと思つてをります。

確かに、私達が古典を読む時には、友人と語り合ふやうにはゆかない。先程、人の言葉を本當に聞くことは大変むづかしいことであると言ひましたが、それでも、友人は、私達の言葉に敏感に應じて、反撥をしたり喜んでたり呉れませう。しかし、古典は、いつも沈黙してをります。極端に言へば、私達の読み方次第で、如何にでも讀めることがある。私達がごまかして讀んでも、古典作者が「それは違ふ」と語ることなどありはしません。古典を前にしても、讀まうとしなければ、いくらでも讀み飛すことが出来る。誰も咎めはしない。しかし、先程から話してをりますやうに、古典には、生きた人間の感動が湛へられてゐるのだから、矢張り、その言葉を残した人の、それを語る息遣ひや、胸の高なりを聞くやうに、一語一語を讀んでゆきたいと私は念じてをります。此處に、余人の伺ひ知ることの出来ぬ、言葉に向ふ自分の心を正してゆくといふ、内心の戦があるのではないかと思ひます。自らの心を鍛へながら、日本人の感動の寶庫である、私達の先輩達の歴史に飛び込んでゆく事によって、私達の心は鍛へられ、悲しみは、より深い悲しみとして心に感じられるやうになり、喜びはより強烈な喜びとして心の中に甦って来る。私達は、古典に觸れることによつて、さういふ情感の豊かな世界に連なれるやうに思はれます。

松陰は、野山獄入獄後の安政二年六月十三日より、獄囚と孟子を學び始め、同年十一月廿四



日を以て獄中での執筆を終へます。出獄後も家人、友人達と孟子講讀を續け、安政三年六月十八日、此の『講孟餘話』を脱稿致します。終章は六月十三日に講義され、十八日迄の間に書上げられたものと思はれますが、その一節を讀んでみます。

「然り而して爾あることなければ、則ち亦爾あることなからん。

此の語孟子自任し、又千萬世に向ひて吾が輩を呼び醒すの語なり。吾が輩宜しく驚起して耳を傾け肝に銘ずべし。孟子言ふ心は、孔子より今に至るまで時未だ遠からず、鄒・魯相去ること又近し。然り而して已に見て之れを知るものあることなし。則ち五百餘歳の後、又豈に復た聞きて之れを知る者あらんやと。孟子より今に至るまで二千餘年、其の間見聞知の有無は姑く論ずることなくして可なり。今吾が輩断然自ら任ぜずんば、何ぞ後世に待つことを得んや。

又何ぞ往世に遡ることを得んや。唯だ是れ人々七十年中の重任なり、忽せにすることなかれ。

抑々吾が長門の國たる、西海の隙にあり、海を隔てて西、鄒・魯と對峙す。鄒魯の聖賢を喚び起すこと固より長門人の任なり。余又常に謂ふ、兵家の貴ぶ所は戦陣の魁殿にあり。魁は先驅なり。殿は後殿なり。今日にありて此の道を起隆せん者は此の道の先驅なり。異日に至りて此の道を保守せん者は此の道の後殿なり。……(中略)……人生七十古来稀なり。今吾が輩已に其の二三十を失ふ。餘るもの日に減ず。已に先駟を憚り又後殿を讓らば、尸上の恥辱、勃海を傾けて是を灌ふとも、五百歳千歳を経て滅することなし。如何如何。」

孔子は、道德教義や単なる理想を説いた譯ではない。堯舜といふ、傳説上の二人の王の生き様——先王の道を語ったのです。この二人の王の生き方は、孔子出現迄の千六百年の間、様々な人の意志と努力によって語り傳へられてきたものだものでせう。しかし、千六百年といふ歳月は、堯舜の生き様を、孔子の世の人々にとって、解りにくいものにしてゐた。その孔子から孟子の出現迄僅かに百数十年であります。がしかし、堯舜の生き方は勿論、孔子の生き方すら、孟子の時代には、もう大變わかりにくいものになつてゐた。今、此處で、私が決然覺悟して孔子の志を、つまりは、堯舜の生き様を語らなくては、永久に、これは後世に傳はらなくなる。すると、孔子を始め、意志と努力によって、或る時は命懸けで、堯舜の志を傳へて来た人々の人生は、何の意味を持つことになるのだらうか。孟子は、さういふ所で孔子に共感したのであります。この孟子の意志繼承への強い思ひは、孟子と一年間附合つて来た松陰の心に激しい思ひを齎もたらします。「今吾が輩断然自ら任せずんば、何ぞ後世に待つことを得んや。又何ぞ往世に遡もたらることを得んや。」——先達の志を語り、具現しようとすることについて、このやうにはっきりとした覺悟を持った孔子・孟子に學ぶとは、自らにもその覺悟が要求されるといふことだ。そして、「往世に遡ること」つまり、孔孟と對座して、互ひに眼を見据ゑながら語り合ふことが、自分自身の覺悟の脆弱なものに、どうして出来ようか。孟子の強い意志と、松陰のそれに應へようとする覺悟とが火花を散らしてゐる、眞劍勝負の気魄を感じさせる一節です。

私は、先程、日本の最高學府である大學の中で、私達が深い思ひを湛へた言葉に向ふことも、又それを吐くことも少なくなつてゐると申しました。松陰死して百二十年、私達が、日々の生活を送つてゐる大學の何處で、松陰の言葉が語られてゐるでせうか。今私が、「断然自ら任じ」て此の松陰の言葉と取組まずにゐて、一體、誰が、松陰の思ひを後世に傳へてゆくのでせうか。下田の獄で、平滑といふ獄吏は、松陰と金子の生き様を傍で見ながら、涙を禁じ得なかつた。そして、彼は、屹度、その事を誰かに語つたに違ひない。私も、松陰と孟子の、魂と魂のぶつかり合ひを目の邊あたりにして、其の獄吏と、同じ思ひに駆られてをります。

扱て、此處で、松陰が孟子の志を継ぐと決意したことに就いて、その志の具體的な意味合ひを少し御話し申し上げねばならないと思ひます。安政二年十二月の出獄以後、松陰は萩に留つてゐたのですが、安政五年、井伊大老の獨断による、日米通商條約の違勅調印、勤皇派志士の弾壓の強化に、彼は、居堪まねなくなり、同志十七名と血盟、當時、京都にあって、志士弾壓の陣頭指揮をとつてゐた、老中間部詮勝要撃を企るに至ります。がしかし、この事は、事前に發覺、同年十二月、再び、野山獄に幽閉されます。そして、翌安政六年五月十四日、これは、全くの別件に關する取調の爲、幕府より松陰東送の命が下ります。その後の經緯に就いて、此處で詳述する暇はありませんが、幕府は、決して彼を處刑しようとは考へてゐなかつた。訊問も、極く微罪に關するもので、しかも全て冤罪であつた。尋ねられた事だけを、有體ありていに答へて

おけば、松陰は、或は處刑されずに濟んだかもしれなかった。しかし、幕府の腰の定らぬ對外政策と朝廷に對する傲岸な態度に憤りと不安を感じてゐた彼は、萩出發の時、既に思ひ定めてゐたのですが、幕吏の前で堂々と意見を開陳し、これを批判して行つたのです。これは、逆に幕府に脅威を與へ、幕府は、松陰を恐れる餘り、安政六年十月廿七日、彼を斬罪に處します。松陰三十歳の秋のことでした。

松陰は、その遺書「留魂録」の昌頭に、萩出發の頃を振り返つて、次のやうに書いてをります。「一白綿布を求めて、孟子の『至誠而不動者未之有也』の一句を書し、手巾へ縫ひ付け携へて江戸に來り、是を評定所に留め置しも、吾が志を表するなり。」又、出發の時には、かうも言つてをります。「至誠而不動者未之有也。此の語高大無邊の聖訓なれど、吾れ未だ之を信ずる能はず。此の度、此の語の修行仕る積りなり。」「信ずる能はず」とは、「體察得」することが、自分には出來てゐないといふことでせう。孟子の言葉に、松陰が、如何に厳しい思ひで臨んでゐたか、思ひ知らされる言葉です。彼は遂に志を果せず非業の死を遂げたのですが、先程の『留魂録』の言葉に續けて、えかう書いてゐます。「天苟も吾が區々の惘誠を諒し給はば、幕吏必ず吾が説を是とせんと志を立てたれども、蚊虻山を負ふの喩、終に事をなすこと能はず、今日に至る。亦、吾が徳の菲薄なるによれば、今將た誰をか尤め且つ怨まんや。」彼は、志を果せずに斃れてゆく責を、自らの學問に歸した。そして、果せなかつた志の具現を、後來の友人

達に託し、それを信じて逝った。亡くなる三月前の七月、高杉晋作に宛てた書簡に、次の言葉を讀むことが出来ます。

「世に、身生きて心死する者あり、身亡びて魂存する者あり、心死すれば生くるも益なし、魂存すれば亡ぶるも損なきなり。」

松陰は、一體何を人生の大事と観じてゐたか。此處迄讀んで参りまして、更に附加へることもないので、孟子に學ぶとは、彼にとつて、自分がかう生きたのだといふ孟子の聲を聞くことであつた。その聲を聞いた感激は、孟子との共感になり、孟子が取組んだ事業に、彼も眞向から挑んで行つた。孟子が、此の地上に留つてゐたのは、高々五六十年の間であつたでせう。松陰に至つては、僅か三十年です。しかも、彼等は、現世で、その志を果すことはなかつた。しかし、松陰は、自分が、孟子の志を引き受けたやうに、自分の後を継ぐ者の存在を深く信じてゐた。それが、「魂存すれば亡ぶも損なきなり」といふ言葉の眞意でせう。松陰死して百餘年、しかし、松陰の文章が、私達の心に、はつきりとした感慨を齎す以上、私達の心に彼が生きてゐるといふことになりはしないでせうか。松陰の眼には、永遠なるものがはつきりと映じてゐたと言つても過言ではないと思はれます。

現代を生きる私達には、このやうな緊張した生の只中から發せられた言葉を「體察得」することは大變困難なことになりつゝある。私達は、言葉によつて、古人の心を想像するといふ機

會も少ない儘、各人の現實人生の葛藤と悲哀の中だけに、人生を限らうとしてゐる。しかし、それは、私達が、歴史と自分との直な接触感を持たぬ儘、自分だけの人生に踞踏きよくせきして了はうとしてゐるといふ事ではないのか。今、頭をあげて、私達の先輩達の生きた跡を振返へらなければ、つまり、永遠なるものが、私達の眼に映じて来なければ、私達の人生は、竟つひにかりそめでしかない。松陰の人生は、私達にさういふ事を教へてゐるやうです。「講孟餘話」は「如何、如何」といふ友人達への問ひかけで終るのですが、これは、百年の歳月を超えて、松陰が私に問ふてゐるやうに思へます。君には、本當に永遠といふものが見えてゐるのかと。



青年研究発表





教壇に立って思ふこと

福岡県立豊津高校教諭

堀 田 真 澄





ただ今、御紹介戴きました堀田です。現在福岡県の豊津高校で理科の教鞭を取ってをります。教職に就いて五年になりますが、まだ毎日、四苦八苦致してをります。そんな学校での明け暮れの中で一番残念に感じますのは折角、高校に進学して来てゐながら、生徒達が学校生活の中で、学問の喜びを感じられなくなってゐることです。それは生徒自身の学ぶ姿勢にも原因のあることですが、さらに重大な原因として現在の学校教育で教科毎の知識は教へられてゐるがそれらの知識を自分の生き方と結びつけるため本当に教へるべきことが教へられてゐないことがあげられると思ひます。この問題に関して私が常に生徒達に伝へたいと思つてをりますのは、やはりこの合宿教室で大学時代から今日まで学んで来たことに尽きます。それで、今日は大学時代の経験と最近の感想をお話し致したいと思ひます。

今から十年程前になりますが、私が大学に入学した昭和四十五年当時は大学紛争の余燼が残つてをり学内はまだ騒然としてゐました。度重なるストライキにより授業も満足には行へない状態で、大学は学問を行ふ場として本来の機能を喪失してゐたのです。現在の静かな零囲気の大学で学んでゐる皆様から見るとその当時のことは縁遠く思はれるかも知れませんが、しかし、大学の抱へてゐる問題は根底に於て当ても現在も變つてゐないのではないでせうか。かへって

現在、大学が表面上静かになったため問題の所在がわからなくなっている、そこには当時とは異った新たな問題が加はったといふべきです。当時、新左翼と呼ばれる人達が学生運動をやっていたのですが、新左翼の学生達は自分の生まれた日本の歴史を全く否定してゐました。彼等は戦前戦後を通じて日本の歴史はマルクスの云ふ資本主義体制の歴史であつて、一部のブルジョアが日本人民を抑圧して来たものと規定し自由や人間の平等と云つた民主主義の理念は共産主義だけが実現できると考へ、革命運動を行つてゐたのです。この思想的零囲気は一般の学生の中にも色濃く影響し真実の日本の歴史の姿は教へられもしないし、すっかりわからなくなつてしまつてゐました。そのため自国の歴史と現状は誇りを感じる対象であるよりも塗りかへ、打ち倒す対象であるのが現実でした。もっともその点では現在も当時とそれほど變つてはゐないのではないかと思はれますが。実際、私自身も入学当時は、日本の国情や歴史については暗いイメージを持つてゐました。ですから新左翼の人達の考へには惹かれる点もありました。ただ彼等の暴力的な運動の進め方にはどうしても納得出来なかつたので、彼等と一緒に運動する気にもなれず、かと云つて自分自身の方法がある訳でもないのでむなししい気持で大学生活を送つてゐました。また一緒に遊んだり世間話をする友人はゐましたが真剣に考へ語り合ふ友人はゐなかつたので寂しく現実から逃避してゐました。

その頃、暫くして、私に転機が訪れました。それはストライキを決める学生大会であつたの

ですが、会場を出た時、私は早稲田大学から来たと云ふ人に呼び止められました。その時挨拶された態度が朗らかで清々しく何となく心を惹かれたこともあって、二人でベンチに腰をかけて話を聞いたのです。私も引き込まれて大学生活の率直な感想をポツリポツリと語りますと、その人はジッと耳を傾けてくれました。当時の大学での話

し合ひと云へば自己主張はするが相手の云ふことは聞かないのが一般的風潮でしたのでこれは私にとって非常に新鮮な経験でした。この話し合ひがきっかけとなり、その時紹介された信和会といふ勉強会に参加するやうになりました。信和会では輪読和歌創作などを通じて勉強がなされてゐましたが、日頃の友達付き合いにはなかつた真剣に問題に取り組む先輩方の態度は強く私の心を惹きつけ度々顔を出すやうになりました。けれども、まだその頃はこの勉強と、現実に如何に対処するかの問題との関りに就いて理解出来るといふ訳ではありませんでした。

その年の秋、福岡の南、太宰府にある戒壇院といふお寺で合宿が催され私も参加したのですが、そこでの経験は実に目の醒める様な驚きであったのです。その合宿では小林秀雄さんの



「美を求める心」を輪読しましたがその時前後の脈絡は忘れてしまひましたけれど私は次のやうな感想を述べました。

「日本の現状は公害、政治の混乱、腐敗などでとても自分は誇りに思へない。自分の生まれた国を誇りに思へないことは悲しいことだが今の率直な感想です。一方学生運動をやつてゐる人達はこの現状を切り開くべくやつてゐる。やり方には納得出来ぬ点はあるが共感出来る面もある。」

さう申しましたところ、昨日合宿導入講義をしていただいた小柳先生から次のやうな指摘を受けました。「君は日本を誇りに思へないといふが、日本の歴史を本気で勉強したことがありますか。この本には一輪の董の花を黙って見続けることは本当に難しいと書いてある。しかしじつと心を澄まして見てゐる中に次第次第に董の美しさがわかつて来る。日本の姿も同様で表面的な動きだけ眺めてゐては本当の姿は分つて来ない。心を澄まして勉強して初めて日本の歴史を貫いてゐる本当の姿が現れて来るのですよ。軽々しく行動するよりもある時期には本当の確信が育つて来るまで黙って考へることが大事なこともある。そしていよいよ行動をおこす時には断固としてやらなければならぬ。」

私はこのお言葉に心を刺される思ひでした。それまでも友達と討論することはありましたが、自分の人生姿勢に関はる指摘は受けたことがありませんでした。だから討論でどちらが勝つて

も負けても後に空虚感が残ってしまふが、この時は先生の指摘に私は省みて非常に恥しく感じた、と同時に、今まで私の知らなかった本の読み方を示され、ひいては今まで考へもしなかった世界があったことが予感され、心に充実感が湧いて来ました。

この指摘の中で小柳先生の所謂、「日本の歴史を貫くもの」を少しづつ感じ始めたのは別の機会に今上陛下の御歌を紹介され、読み味ってゆく内に次第次第に陛下の御心に触れることが出来たからです。今日はお手元のプリントにある陛下の御歌を三首皆様と一緒に読み味ってゆきたいと思ひます。

### 社頭雪

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

この御歌は昭和六年に作られました。昭和の初頭、日本の対外関係は風雲急を告げてゐた時です。陛下は、位に就かれてから今日まで毎朝、皇居内の社に国民の幸福と国の平安を祈って来られました。「神のひろまへ」とはその社のことで今上陛下の御祖先の天皇方をお祭りしたお社でせう。このお歌をよみながら降る雪の中で御祖先に祈られてゐるお姿を心に描くとその

清浄な情景と共に陛下のお心がそのまま伝はって来ます。「世をこそ」と強められ、倒置法が使はれてゐますが、この時、日本の時運がいよいよ切迫して来てゐたことが陛下が安らげき世を祈られるお氣持の強さと共に感じられます。

#### 皇居内の勤労奉仕者

をちこちの民のまゐ来てうれしくぞ宮居のうち今日もまたあふ  
戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

この御歌は終戦後のお作です。先程のお歌に現れた陛下の国民のことを思はれるお氣持は、日本が戦争に敗れた時、実際の御行動となりました。陛下は敗戦後、直接国民に会って声をかけ励ますため、全国各地を御巡幸になります。ある時は酷熱の炭鉱の坑道にヘルメット姿で入られ、直接鉱夫の人達に励ましの御言葉をかけられたさうです。一方国民の方でも何か陛下のお役に立ち御心を慰めたいと思つて、空襲で焼けて、すっかり荒れはてた皇居内を片付けるために所謂勤労奉仕の人たちが次々に皇居にやってみります。このお歌はその人たちのことをおよみになったものです。「をちこち」とは全国各地のといふ意味ですが、陛下は遠くから、自分のためにやって来てくれた人達の心を本当にお喜びになつてゐます。そして陛下は勤労奉



仕の行はれてゐる場所までお出でになり直接奉仕の人達に御挨拶されたさうです。この戦争は日本にとって悲劇的な事件でした。戦争中の苦難に堪へた国民の労苦は報はれず敗戦の悲しさを以て終ります。しかし国民との心のつながりは敗戦によって裂かれることなくほ一層強い絆となってむすばれてゐる。この陛下の心からのお喜びは「今日もまた会ふ」といふおことばに強く偲ばれるやうなおもひがいたします。勤労奉仕は大きな国家的事業ではありません。けれども自分の生活だけでも大変な時に陛下のお役に立ちたいと馳せ参じてゆく国民の心、それを陛下が本当にお喜びになつてわざわざ御対面に赴かれた。本当に感動的な場面ですが、詳しくは長い間天皇のおそばに侍従としてお仕へになつた木下道雄先生の「宮中見聞録」に出てをりますので是非お読み戴きたい。この様にお歌を味つて参りますと、この勤労奉仕といふものが日本の精神上実に大きな事件だつたことに気付くのです。天皇と国民の心がかくまで響き合ひ、通ひ合つた姿が、敗戦の苦難を経て実現する。本当の日本の国の姿に触れた思ひです。大学入学当時、日本は誇りに思へないと申してゐた自分をつくづくと恥しく感じる次第です。

さて私は教壇に立ち生徒達にどの様に接したら良いかと日々考へるのですが、その私の心に直接呼びかけて下つた様な明治天皇の御歌を紹介致しまして終りと思ひます。

## 子

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを

「かなし子」は可愛い子といふ意味で国のために命を捧げられた人の遺児です。子供に国のため命を捧げた父親のことを語り聞かせなさい。さうすれば子供は幼心に自分の父親のことを誇りに思ふ。そして父親と同じ心で明日の日本を背負ってくれる子供達が育ってゆくといふお歌です。これは人の親に示されたのですが、私は教師もまた国のため亡くなられた方々のお心を子供達に伝えてゆく任務を負つてゐると思ひます。特に敗戦以来今日まで、日本の本当の歴史の姿は教育の場では教へられてゐません。自分の親、自分の国を誇りに思へなくて、本当の意味で生きる喜び、学問の喜びは感じ得ないと思ひます。私は理科の教師ですから歴史のことなどを生徒に話すやうな機会は少ないのですが、今後も明治天皇のこのお歌を胸に生徒達に接して参りたいと思ひます。

心をはたらかせて

福岡県中間市立中間南小学校教諭 谷口 敏子





只今、ご紹介いただきました谷口でございます。昨年福岡教育大学を卒業し、現在、福岡県中間市で小学校の教師をしてをります。

私は、大学生の時にこの合宿教室に参加しまして、その折に「短歌の相互批評」といふのを経験いたしました。相互批評といふのは、今回の合宿でも後日ございますが、各自それぞれが創った短歌を、「その時の気持ちはどうだったのか。」「歌を創られた時の様子はどのやうだったのか。」と、具体的に思ひを馳せながら、創った人の気持ちに近づくやうに吟味していくものです。

私は、初めての時は何と云っていいかわからず黙ってをりましたが、先輩や友だちは、「その時は、こんな気持ちだったんじゃないの。」「この歌でかういふことを言ひたかったのじゃないの。」と、ていねいに考へ、歌を創った人の身になって一言一言、言はれるのでした。私は、相手の気持ちになるといふことは、こんなにも心をこめていくものなのだあと、とても驚ろかされました。

その後も何度か、短歌の相互批評をいたしました。回を重ねる毎に、創った人の気持ちに近づくといふ事はとてもむづかしい事だけれども、少しでも近づけた時の喜びもまた、大きい

ものだといふ事が少しづつわかるやうになりました。そして、五七五七七といふ短い言葉ではありませんが、心を働かせれば、そこにこめられてゐる創られた人の気持ちが、自分の心に響いて来るものだといふことがわかるやうになって来ました。

この学生時代の体験から、私は、心を働かせて、相手の気持ちを少しづつでも自分のものとして理解できるやうになりたいと思ってきました。教師になりましたから、この「心を働かせることの大切さ」について、また、改めて考へさせられることがございましたので、今日はそのことを中心にお話しさせていただきますと思ひます。

昨年教職につきまして、初めて担任いたしましたのは五年生でした。いざ担任してみますと、私が学生時代に本を読んだり、教育実習を通して抱いて来た子どもとのイメージとは違って、口が達者で乱暴な子ども達が多いのにびっくりしました。しかし、そのやうな子ども達も、きっと心の底は素直で明るいのだと信じて、頑張らうと思ひました。

四月当初、一週間ぐらゐ経った時でしたか、一人の女の子が近づいて来て、こんな事を言ひました。「先生、もっと叱りいよ。(叱りなさいよ) 男子が言ふ事をきかんやうになるよ。前の先生なんか、ピシッと叩きよったよ。」大きな目をまますます大きくして、一所懸命に言ふのです。私が新任なのでとても心配してくれてゐるのだなあと思ひました。よく気がつく子だなあ

と感心しました。

その女の子の名前は正美まさみさんと言ひました。それからも気をつけて見てみると、決して目立つ子ではありませんが、正義感のある明るい女の子のやうに思ひました。

五月には家庭訪問があり、その正美さんの家にも伺ひました。その時、お母さんのお話では、正美さんのお父さんは背椎の病気だとかで入院されてゐるといふことでした。

正美さんにお父さんが病気だといふ事を聞いてはゐましたが、詳しくは聞いてをらず、ひどい病気なのかしらと心配しました。けれど、六月には退院され、動けない状態ではありませんが、家に帰って来られたといふ事で、正美さんはとても喜んでゐました。

その頃、正美さんは作文に、

「お父さんはとても頑張り屋です。ふつうの人ならゆっくり休むだろうに、早く会社に行きたいと言って起き上がる練習をします。けれどそんなふうは無理をするから、また悪くなつて入院する。そのくり返しです。

あせらないで、じっくりなおしてほしい



と思います。」

といふ事を書いてみました。

私は、たまたま私の父も倒れて、半身不随になって寝ついてをりましたので、

「先生のお父さんも病気で寝ついています。正美さんのお父さんとどちらが早くよくなるか競争ですね。またお父さんの事、教えてね。」と、返事を書きました。それから度々、お父さんの様子を教へてくれるやうになりました。

七月のある朝、正美さんが小さな声でそっと教へてくれました。「お父さん、また入院したんよ。そして、今日十時に手術があるんよ。」その日の二時間目、十時近くになると、正美さんがとても心配さうな顔をしました。私は、授業をしながらも、時々気になって正美さんを見てみると、考へ込んでゐる様子でした。心配なんだらうな。勉強どころじゃないんだらうなと思ひました。休み時間になった時に近づいて、「大丈夫よ。絶対手術成功してゐるから。」と励ましましたが、力なくうなづくばかりでした。

次の日に聞きますと、何と手術は夜の八時ぐらゐるまでかかり、お母さんは泊まり込みだったさうです。手術の結果は完全ではなかったらしく、三、四ヶ月入院され、途中、二度ほど手術がありました。家に戻って来られたのは十月だったと思ひます。

正美さんが、お父さんの事を話す時に暗い顔をしましたのは、その頃からでした。じっと寝



たまたまで動けないことなど、話を聞きたびに、容態が普通でない事がわかってきます。また、「先生、お父さん耳が聞こえんやうになって来たんよ。」と悲しさうに言ひます。「それならね、紙に書いてお話ししたらいいやらう。きつとお父さんも学校の事とかを知りたいと思つていらつしゃるよ。」と言ふと、「でも、目もあんまり見えんの。」と、ポツリと言つて黙つてしまふのです。私は返す言葉がなくて、一緒に黙りこくつてしまひました。

何もしてあげられる事がなくて、ただ話しを聞いてあげるだけでした。

これまでが、入院、手術、退院の繰り返しだったことや、退院後の様子から、私も、もしや……と不安な思ひにかられるやうになりました。

そんなある日、月曜日の朝、家を出ようとしてゐた時学校から電話がかかってきました。正美さんのお父さんが亡くなられたといふ知らせの電話でした。

午後、お葬式に参列しました。正美さんの気持ちを思ふと胸がつまりました。出棺の時お母さん、お兄さんの後に続いてうつむいて出て来た彼女の顔は、今も目に焼きついて離れません。真っ赤な顔をして悲しみをこらへてゐるのでした。

私は、学級の子ども達に正美さんのお父さんが亡くなられた事を知らせました。「先生は、子どもの頃、おじいさんやおばあさんを亡くしたことがあります。何とも言へず悲しかった。ましてや、正美さんはお父さんを亡くしました。どんなに悲しいか、辛いかな、正美さんの身に

なって考へてあげてください。」と話をしますと、どの子もみんな真剣に聞いてくれました。五日後、正美さんが学校に出て来た時は、話しかけて気持ちをはきかたててやらうとしてゐる子が何人もゐました。中には、正美さんと話す時は、しばらくは話題にお父さんの事が出ないやうにするのだと言つてゐる子もゐました。さうした友達のお蔭か、しだいに前のやうに明るい女の子に戻つていきました。

けれど、私は、正美さんが明るい表情になつた事を喜ぶ反面、あまりにも立ち直るのが早かつたので不思議にも思ひました。何か訳があるのではないかと思ひ、その理由が知りたくなりませんでした。そんな時、十二月に父兄との個人懇談があり、正美さんのお母さんと一対一でお話しする機会を得ました。

お母さんが言はれるには、「あの子は毎日、家に帰ると佛前にすわつてお父さんにお話をするのですよ。本当に口に出してブツブツしゃべつてゐるのですよ。」といふ事でした。そして、「あの子が、ねえ、お母さん、何でも話していいと。(いいの?) お父さん、何でも聞いてくれるやろか。と言ふので、うん聞いてくれるよ。と言ふと喜びましてねえ。」と、話を続けられたのでした。

私は、ああさうだったのかと思ひました。正美さんのお父さんは、もう目には見えないけれども、生きてゐるんだなあと思つたのです。佛前で、毎日お父さんと話しをする正美さんの姿

が目に見え、胸があつくなりました。

次に、正美さんの六年生になってからの作文の始めの部分を読ませていただきます。

「わたしのお父さん」

六年四組 加藤 正美

「私の父は、長い間病気にかかって苦しんでいた。でも今はちがう。病気のない、苦しみのない、楽しい楽しい世界でくらしている。私は、そんな父のことをありったけにこの作文に書きたい。……」

これが、作文の書き出しです。彼女は、父親の魂がどこかで生きてゐると信じてゐます。それが彼女を支へてゐるのだと思ふのです。そして、現実にはゐない父親だけれども、心を働かせれば、話しをすることもできるのですね。私は、彼女から、心の働かせやうによっては目に見えない所までも、しっかりと受けとめる事ができるのだといふ事を教へられた気がします。

世の中では、表面だけを見て、あれこれと批判する事も多いと思ひます。例へば、私は今年、六年生に持ち上がり、社会科の歴史で子ども達に古事記の話をしましたが、先生方の中には、神話など作り話だから子ども達に話しても無駄だと言はれる方もをられます。けれども、それは、嘘か本当かといふ点ばかりに目を向けてゐるのであって、そこに昔の人のどんな気持ちがあるかを見つめてゐないやうな気がするのであります。私は、遠い祖先の残した文章を心をこめて味

ふことによつて、その時代に生きた人々の気持ちが生き生きと心に感じられるといふ、さういふ体験はとてすばらしい事だと思ひます。

現実ではかうだ、事実としてはかうだと、合理的に考へようとしては、いつまで経つてもわからない事も、世の中にはたくさんあると思ひます。

私は、正美さんとの体験を通して、物事に対処する時、より深い所まで感じ取ることが出来るやう、今後さらにさらに心を働かせていきたいと思つてをります。

# 瀬上安正先生のこと

(株)千代田コンサルタンツ設計部

松田信一郎



油山から博多湾を望む



「東の空に雲仙の、気高き姿仰ぎ見て、北に千々石の灘広き、岡に立ちたる学び舎ぞ……。」  
これは私の中学校の校歌の一節です。私の郷里はこの雲仙のすぐ近くにあります。子供の頃から慣れ親しんで来た雲仙の地で、この様な合宿教室が開催され、そこに自分も参加してゐると思ひますと感慨深いものがあります。

先程、御紹介戴きました様に、私は、熊本大学を卒業しまして、現在の会社に勤務して居ります。橋梁、道路、都市計画等の設計会社であります。勤務地が東京でありますし、仕事も、不規則な事が多いものですから、なかなか毎年は参加出来ないのですが、学生時代から今日に至る迄、合宿教室は私にとりまして、何よりも大切なものである事には変わりありません。私はここで多くの得難い友人に巡り合ひ、生き方の根本を学んで来ました。

合宿第一日目の小田村先生の御話の中に、こゝでは、お互ひの平常心を鍛へ合ふのだといふ御言葉がございましたが、私は改めて、その事をしみじみと感じさせられました。毎日の仕事を支へてゐる私の平常心は、この合宿教室を通じて鍛へて貰つてゐると言へると思ふのです。

合宿教室に私が初めて参加したのは、昭和四十三年の霧島での合宿教室でした。東京の大学に行って居た従兄の誘ひによるものでした。熱心に勧めて呉れたものですから、断るのも

申し訳ないやうな気がして、参加の申し込みをしたのが、きっかけでした。

さういふ訳で、気軽に参加したのですが、合宿教室では、先づ開会式の厳肅なことにびっくりしました。それで随分、気持ち引き締まったのですが、連日の先生方の御講義や班別討論は気の重いものでした。講義の内容は、何とか解るやうな気がしたのですが、どのやうにそれを受け取めたら良いのか解らなかつたのです。合宿教室が深まるに連れ、気の重さは増していったのですが、他の班員の人達の真剣な態度に引きずられて、精一杯、日程には取り組んで居りました。班生活の御蔭で気持ちだけは、集中出来てゐたのでせう。

昨晚、小柳陽太郎先生が、合宿導入講義をされましたが、あの小柳先生が、霧島合宿の四日目に講義をされました。私はその御講義を御聞きするうち、何かしら、光明を見出したやうな気が致しました。そして、今までの重たい気分が、不思議に消えて居りました。その時の気持ちを、合宿最後の感想文——これは皆さんも最後に書かれる訳ですが——で次のやうに書いて居ります。

「私は、この合宿教室によって、先づ心を定めよという言葉に強い感動を覚えました。色々なことを問題にする前に、先づ何よりも自分の信念を持たなければ道は開けないという小柳先生のお言葉にはただただ深く感動するだけでした。私はこの言葉を信じて、大学に帰ってからも人生を語り合える学問の場を目指して、ささやかながら力を尽して行きたいと思ひます。」





かうして私は、参加する時は思ひもしなかつた貴重な体験をして合宿を終へることが出来ました。帰りの汽車の窓から、外を眺めた時の景色の美しさは今もはっきり覚えてをります。自然がこんなに美しかったのかとつくづく思ひました。合宿教室で心が浄められたために、かういふ風に見えるんだなと思ひました。

この合宿での体験を、その後の学生生活の中で、確かめ、深めて行ったのですが、その事について話してみたいと思ひます。

夏休みが終らないうちに、大学へ戻った私は、同じ下宿の友達等に合宿教室での事を話したりしてゐるうちに、合宿での気持ちを持続させるには、環境を変へた方が良ささうだと思ふに至りました。大学の近くの下宿町に居て色々都合はよかつたのですが、それだけ、脱皮するのも難かしい気がしたものですから、出来るだけ大学から離れてみようと思ひました。大学の厚生課に行ったら、丁度、さういふ所が在りましたので、とにかく、引越しました。気分一新位の積りだったので、此の引越しが私の転機

となりました。

引越して間もなく、熊大から合宿に参加されてゐた方に、合宿の礼状を差し上げた所すぐ、御返事があり、その中に、思ひがけない事が書いてありました。それは、私の新しい下宿の近くに、国民文化研究会の理事をしてをられる瀬上安正先生といふ方が住んで居られるので近々に一緒に御訪ねしようといふ事でした。

私も、合宿での地区別懇談会で先生の御顔は拝見してをりましたが、偶然の成り行きに、驚くと共に、とても嬉しい気が致しました。

先生は、五高、東大を出られ、戦後は、熊本県庁に勤務されて居られる方でした。最初は、紹介して戴いた大学の先輩の方と一緒に先生の御宅を御訪ね致しましたが、懇切に接して下さいる先生の御人柄に強く魅かれました。なつかしさが感じられて、初めて、親しく御会ひするやうな気は、全くしませんでした。その時は、先生の学生時代の御話や、合宿の御話など色々話して下さいました。それから、私は先生の御宅を度々御訪ねするやうになりました。瀬上先生は、五高時代、当時東大生であられた、現在の国民文化研究会理事長の、小田村先生に巡り合はれたのが、機縁となられたといふ事でした。先生が当時の事を昨日の事の様にしたのが印象的で、先生の御話から、人と人との出会いの大切さを知りました。吉田松陰の話もよく御

聞きしました。自分の生き方を、定めてゆくべき年頃に、瀬上先生に、御会ひ出来た事は、有難い事でした。

やがて、全国的に大学紛争が起こり、熊大へも波及しました。教養部や、工学部もストライキになり、講義の代はりに、集会やデモが日常化してゆくことになったのですが、私は先生や友達、特に瀬上先生の御指導と励ましにより、この間にあって、学生として恥ぢる事のない生き方が出来たのだと思つてをります。

時習義塾といふのが、熊大にございます。この合宿に参加した者が、大学に戻ってから一緒に寝食を共にしながら勉強して生活してゆく集りの場でありますが、それは大学紛争の後、出来たものです。私たちはそこで、毎週、読書会をしたり、歌を詠んだりして、お互ひに鍛へ合ふのです。塾は、今も、後輩諸君が、引き継いで居りますが、塾が今日まで、成長出来たのも、瀬上先生の御蔭であります。

塾が出来てからは、私も、塾に入りましたが、塾での集りには、先生はいつも来て下さいました。塾生皆で、先生の御宅を、御訪ねする事もありました。私が卒業してからも、この事は同じでありました。私も、帰省した時は、必ず、後輩諸君と一緒に、先生の御宅に御伺ひするのが常でありました。このやうに御指導を仰いで参つたのですが、今は、もう、御会ひする事は出来ません。

先生は昨年九月十九日突然の事故で他界されたのです。信じ難い事でした。

奥様の御話から、先生の御最期の安らかな御様子だけが、浮かんで参りました。先生は、奥様にいつもの如く懇ろに御別れを告げて逝かれたといふ事でしたが、奥様の御話を御聞きしてゐるうち、私は、「死を観ること帰するが如し」といふ、以前岡潔先生に御伺ひした言葉を思ひ起こしてをりました。先生は、学生の頃から、志を同じくする方々と共に、思想運動を展開してこられた方でもありました。この合宿教室も、その御志の継続でありました。

この国民文化研究会につながる多くの同志の方々は、黒上先生を始めとしてすでに世を去つてをられますが、毎年、九月黒上先生の御命日の前後に、東京で慰霊祭が行はれて居ります。黒上先生にとって、その慰霊祭は、亡き師友の方々に、直接に御会ひするやうな御気持ちでお迎へになる厳粛な行事でありました。先生は、遠い熊本の地から毎年歌を献詠されて、御霊を慰めて居られました。昨年も献詠されてゐましたが、それは先生が事故で亡くなられる数日前に詠まれた御歌だと存じます。それは次の三首です。

更くる夜の風つめたきに虫の音のさやかに鳴きて昔思ほゆ

たらちねの母いますごと思はれてふるさとの庭偲ばるるかな

歌の道ふめと教へし母を思ひいまだ成らぬを悲しみて生く

先生は、昨年の慰霊祭が近づいた九月の或る夜、亡き師友の方々を偲んで居られたのでせうが、この御歌は、その時に、自づと出来上がったやうな調べが感じられます。しかし私には、先生が、我れ知らず、この世に別れを告げて居られる御歌のやうに感じられてならないのです。

九月二十二日、東京では慰霊祭が行はれました。それは先生の御葬式の日でもありました。私は先生の御霊が、東京の慰霊祭の場に天翔けてゆかれるやうな気が致しました。

先生は昭和五十年に県庁を御辞めになりましたが、その時、次の御歌を詠まれました。

二十有五年の月日過ぎゆきて我がそゝぎたる生命いのちいづくに

この御歌を詠んでをりますと、先生が私達に、どのやうな気持ちで接して下さったのか、しみじみ偲ばれ、そして、先生の優しい、澄んだ御眼ざしが目に浮かびます。私は仕事に従事しながら、一方で、私達を指導して下さった先生の生き方を、偲びながら、一層、平常心を鍛へ、先生の御恩に報いることの出来るやうな生き方をしたいと思つてをります。

最後に明治天皇の御製を拝誦させて戴き、終りと致します。

国を思ふ道にふたつはなかりけり、軍いぐさの庭にたつもたためも

御清聴有難うございました。

一年の歩み



九州大学法学部三年 金子光彦





昨年九月、日本固有の領土である色丹島にソ連の軍事基地が建設されてゐるといふ事実が明るみに出た。国後捉捉島に次ぐこの北方領土占拠に、私達は、自国の領土を侵犯されたことへの憤りと、ソ連の軍事力の脅威とを痛感した。抑々、千島列島及び南樺太は、日露の戦役において私達の祖先がその尊い命を賭して守り伝へたものである。国家危急の秋、この日本の独立を守らんとして近代兵器を有するロシアを相手に、嚴寒の大陸に、海に、戦ひ斃れていった祖先を憶念すれば、今日のソ連の横暴に対して私達は決して無痛覚ではゐられぬのである。

然るにかうした現状に対して、一閣僚はソ連の軍事行動を「脅威」と考へるべきではないと発言した。又、折から十月初旬の総選挙に向けて各党とも必死の選挙運動を展開してゐたのであったが、選挙の焦点は所謂「財政再建」「政治腐敗の是正」にのみ据ゑられ、日本の国の守りを如何するかといふ国家存亡にかゝる問題はほとんど顧みられなかつた。日本の国政をあづかる政治家が、「防衛」といふ国の大事に真剣に取り組まうとせず、自己の、自党の票あつめのみ汲々としてゐた事実は何を語つてゐるか。それは、個々人の分断された生活のみがあつて、国家生活が顧みられず、国民一人一人が「日本」といふ、魂の帰趨すべき依り所を見失つた現代日本の風潮をそのまゝ語つてゐる。

かうした風潮の根源は、自国の歴史伝統に愛情を持ち得ず、国の運命と共にある自己の生を実感し得ぬ所にあるのではないか。学園においても生きた人間の魂に触れ得ぬ空疎な概念的思

考のみが氾濫し、次代の日本を背負ふ青年達は自国の歴史伝統から切りはなされた儘、自己の生の実感を見出し得ぬ焦燥のうちに心を荒廃させてゆくのである。

私達は、「祖国、学問、人生」といふ三つの分かち難い言葉の実内容を体得せんとして研鑽に努めてゐるが、学問が単なる一専門分野に於ける技術的側面に踞踏せずして、「祖国」「人生」と直結するところにこそ、真に豊かな人間生活があると信ずるのである。さう信ずるがゆゑに、我々にとっての学問とは日本の歴史伝統のうちに生きた先人の言葉を素直に味はふ中に、己れの人生の帰趨を感得してゆくことに尽きるのである。日本の歴史伝統を否定し、人間を概念的に平板化して眺める今日の風潮に対して、私達は人生の信を賭して戦ひゆかねばならぬのである。

昭和五十四年八月、霧島にて開催された「第二十四回全国学生青年合宿教室」が幕を閉じた後、合宿に参加した学生が中心となり、東は関東より西は九州に至るまで全国各地区では輪読会、短歌会、合宿等が行はれていった。輪読会に於いては黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』や吉田松陰の『講孟餘話』等がテキストに選ばれ、先人の言葉のひとつひとつを友等と丁寧に味はってゆく中で、それぞれが自らの生き方を問ふていったのである。又、短歌会では短歌の相互批評が行はれ、言葉を互ひに正し合ふ事によって思想表現の練磨と人生態度の内省が重ねられていった。夏の合宿教室において共に学び合ふ機縁を得た新しい友

△地方合宿▽

等を交へ、諸先生、諸先輩の御指導のもとに、かうした地区の例会が毎週続けられたのである。又、次の表にあるやうに地区ごとの合宿も営まれた。

主催	年月日	場所	参加大学
東京信和会	昭和25年 11月22日～25日	神奈川県、葉山 「大海荘」	高千穂商大・早大・亜大・ 中央大・明大・高崎経済大・ 防衛大
福岡信和会	11月22日～25日	宮地嶽神社「開運殿」	愛媛大・長大・九大・福教大・ 八幡大・福大・第一薬科大・ 西南大・熊大・阪大・岡山大・ 大阪大・佐大
熊本信和会	12月1日～3日	熊本市「三賢堂」	熊大・九大
鹿児島信和会	12月24日～26日	始良郡「加治木荘」	鹿大

昭和五十五年三月、今夏、雲仙にて開催される「第二十五回全国学生青年合宿教室」に全国

西南大信和会 福大信和会	5月24～25日	油山「椿荘」	西南大・福大
九大信和会	5月10～11日	油山「椿荘」	九大
熊本信和会	4月26～27日	熊本市「三賢堂」	熊大・熊商大・九州東海大
女子信和会	3月7～9日	油山「椿荘」	宮大・西南大・福教大・熊大・ 福女大・佐大・鹿大・ 旭川女短大・尚綱大
熊本信和会	3月2～3日	加藤敏治先生宅	熊大
大阪信和会	3月1～3日	大阪府「持経寺」	大阪大・京産大・大阪市大
西南大信和会 福大信和会	昭和55年 2月27日～ 3月1日	福岡県「成田山」	西南大・福大

の大学生を結集してゆく活動の覚悟を新たにすべく、現在迄各地区において研鑽を続けてゐた学生が熊本の太慈禪寺に一堂に会し、三泊四日の合宿が営まれた。太慈禪寺の歴史は古く鎌倉時代に溯るといふ。又、門の脇には当寺を訪れた時に詠んだ夏目漱石の句が記されてゐた。春はまだ浅く寒さは厳しかったが、三十名の学生と十三名の先生、先輩方により緊張した研鑽が展開された。合宿参加者の内訳は次の通りである。

△東日本▽ 早稲田1・高千穂商大2・中央大1・明大1・亜大1

△西日本▽ 鹿大3・福大3・西南大2・福教大1・九州大8・熊本大4・九州共立大2・

大阪市大1

△国民文化研究会▽ 13名

総計43名

合宿は、開会式、自己紹介、リーダー学生発表と続いていった。学生発表においては、吉田松陰、ソクラテス、戦没学徒茶谷武さんの文章、遺書(国民文化研究会刊「続いのちささげて」五十一頁参照)がとりあげられ、自己の人生と国の命運の直結したところに雄々しく生きたこれら先人の言葉に全員で迫っていった。又、この後、はるばる東京より御越し頂いた小田村寅二郎先生は、「国の姿は肉眼で見ることには出来ない。心に実感するしかないのだ。」と語られ、参

加者一同、国のいのちを実感して人生を生きた先人の言葉に真向かふことの大切さをいよいよ深く思はされたのであった。

合宿二日目からは黒上正一郎先生の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読が行はれ

△春季合宿日程▽

3月23日(日) 第三日	3月24日(月) 第四日
(起 床)	
座 禅	
朝の集ひ・朝食	(起 床)
学 生 発 表	朝の集ひ・朝食
	リーダー学生発表
全 体 輪 読	全 体 感 想 表 発
昼 食	
加藤敏治先生講話 御講(質疑応答)	閉 会 式
	昼 食
小野吉宣先輩 発 表	夏合宿へ向けて の 検 討
散 策 和 歌 創 作	感 想 文 執 筆 作 和 歌 創 作
	解 散
夕 食 ・ 入 浴	
班 別 和 歌 相 互 批 評	
夜 の 集 ひ	

一年の歩み (金子)

		3月21日 (金) 第一日	3月22日 (土) 第二日
春季 合宿 日程 表	6:00		座 禅
	7:00		朝の集ひ・朝食
	8:00		学 生 発 表
	9:00		
	10:00		全 体 輪 読
	11:00		
	12:00		
	13:00		昼 食
	14:00	開 会 式	全 体 輪 読
	15:00	自 己 紹 介	
	16:00	リーダー-学生発表	
	17:00	全 体 討 論	
	18:00	小田村寅二郎先生 御 講 話	
	19:00	夕 食 ・ 入 浴	夕 食 ・ 入 浴
	20:00		学 生 発 表
	21:00	班 別 討 論	全 体 輪 読
	22:00		
	23:00		
	0:00	就 寝	就 寝

た。輪読箇所は一三六頁から一四一頁迄である。

黒上先生はその中で「我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隱遁超脱の聖者ではなく、動乱の生に隨順せし情意的人格である」と述べてをられるが、亡き母を思ふあまり「青山を枯山なす泣き枯らし、海河は悉に泣き乾しき」といふ速須佐之男命、倭建命に代はりて走水の海に入られた弟橘比賣命、又、白鳥となつた倭建命を「小竹の荊杞かりこひに御足切り破れども其の痛きを忘れて哭く哭く」追ひ行く后たち、み子たち、これら古代人の生命はいづれも緊張の極を示し、その情意の切実さは読む者の心を直かに動かすのである。

黒上先生は古事記にあらはされた雄大悲壯の情意の世界を憶念されつゝ、次の如く記されてゐる。

「古事記に現はるゝ我が民族の生は外なる戦ひと内なる睦びの錯綜する明暗の交代である。太子が「国家の事業を煩となす」と現生の悲哀に徹したまひ、而も之を同じく群生ぐんじやうに察して大悲息やむなしと告白したまひ、同胞憶念の永久苦闘に隨順して、其の切実体験に大陸の学説教義を生命化したまひし綜合的御精神は、この民族生活の劇的生命を辿つてはじめて理解し得るのである。概念理論に内容をあたへ、抽象教義を生命化せるものは常に現実人生の波瀾に生くる若き民族の情意であつた。▽

大陸文化との交流接触の時代に、同胞憶念の御精神のもとに、国家生活の運命を切り開かん



と苦闘された聖徳太子の御心は、そのまゝ古事記の世界に生きる神々英雄の情意であった。そして、この概念理論や抽象教義にとらはれぬ、現実生命の直叙こそ、日本人の生き方の根底に流れてゐるものであることを強く思はされたのであった。

三日目の午後には、加藤敏治先生（八代市役所助役）に、先の大戦において国にいのちを捧げて亡くなられた同信の方々について御話し頂いた。先生は、国民文化研究会より刊行されてゐる『いのちさゝげて』『続いのちさゝげて』より、生前、先生と親しく交はられた米重政行さん（戦死二十四歳）、和田山儀平さん（戦死二十一歳）、百武禮之さん（戦死二十五歳）、一條浩通さん（戦死二十七歳）、松吉正資さん（戦死二十三歳）、江頭俊一さん（病没二十四歳）の遺歌、遺文をひとつひとつ丁寧に見あげられ、亡き友の一人一人をいまもなほ生くるがごとくに偲んでゆかれた。そして、「遺された文章や歌を読むと、亡き友がこの世に甦って、私に話しかけてくるやうに感じられない」と語られた。あふれてくる思ひに耐へながらお話になるその御姿を、目のあたりにして、参加者一同深く心を打たれたのであった。

次に、小野吉宣先輩が登壇された。先輩は古事記の神々英雄、吉田松陰、戦没学徒の心中に実感されてゐた「祖国無窮のいのち」に対する信を新たに痛感するところに、私達の「永久のつきあひ」が開始されると述べられ、祖国の歴史伝統を否定せむとする傾向の強い現代において、共に「祖国のいのち」に連なり、守らんと「決意」し、一人でも多くの友等に訴へかけ、

「決意から実行へ」移らう、と力強く語られた。そして、全員起立し、明治天皇の御歌五首と、三井甲之先生の長詩「祖国禮拜」の一節を聲に出して読みあげた。この朗唱のうちに参加者ひとりひとりの心がひとつに統べられ、腹の底より力の湧くのを覚えた。

かうして、三泊四日の合宿は緊張した爽快感のうちに閉会式を迎へた。国旗を仰ぎつゝ、歌ふ「君が代」は、開会式の時よりも力強く高らかに響いた。合宿終了後、参加者は夏の合宿に一人でも多くの学友を誘つて参加し、次の合宿地雲仙にて再会することを約して別れたのであつた。

一方、男子合宿と併行して三月七日から九日迄、福岡市郊外にある油山において「第八回女子合宿」が開催された。この合宿には二十二名の女子学生及び社会人が参加し、又、御忙しい中五名の先生方にも御越し頂いた。

第一日目には志賀建一郎先生に「古典輪読導入講義」として、萬葉集の防人の歌を中心に御話いただき参加者全員で一首一首にこめられた古人の瑞々しい情感を偲んでいった。

また、二日目には宝辺正久先生に、昭和二十年日本敗戦直後この油山において自決された寺尾博之さんについて御話いただいた。先生は寺尾さんの遺歌、遺文を御紹介されたが、寺尾さんの母上を思ひ、弟、友を思ふ御気持の深さ、また、祖国防護に対する凜烈の気魄は参加者一同の心を打たずにはおかなかつた。御講話終了後、全員で寺尾さんの自刃の地を訪れ、御魂の

慰霊を行った。

夜には福岡教育大学教授山田輝彦先生が登壇され、「近代化と伝統」といふ題で御講義をされた。先生は、小林秀雄先生の文章を引用されながら、明治以後の日本近代化の過程において、生きた人間の歴史を理論化し、抽象的な概念に置き換へる歴史観が瀰漫したが、さうした歴史観では人間のありの儘の姿とは無縁な歴史の形骸しか見えない、と現代の歴史思想の誤謬を鋭く指摘された。

四月になると大学の構内は今から始まる学生生活に様々な期待と不安を抱く新入生で賑やかになった。私達はかうした新入生に対して己れの信ずる「祖国、学問、人生」に対する態度を訴へかけていった。専門の学問分野に安住するのではなく、生きることの意味や本質を激しく問ふこと——この「人生如何に生くべきか」といふ根本の確立こそ、各自が厳しい内省を通してつかみとらねばならないものである。しかし、気まぐれで安楽な学生生活ばかりが氾濫してゐる学園の現状においては、私達の呼びかけに応へてくれる学生も少なく厳しい現実の中で、自らの無力さを思ひ知らされることも多かつた。が、そのつど真剣な検討会がもたれ、講演会など様々な試みが精力的に行はれ、夏の合宿に一人でも多くの学友を誘はむと間断のない活動が各地で展開されていったのである。

△講演会▽

主催	年月日	場所	講師・演題
西南大信和会	昭和54年 9月8日	四号館102番教室	加藤多夏詩（九大法四）「福沢諭吉に学ぶ」 奈良崎修二（九大経四）「歴史に学ぶ」 酒村聡一郎（西南大法四）「国を思ふ心」
九大信和会	11月14日	教養部11番教室	長沢一成（医三）「生きるといふこと」 亀川龍彦（工四）「人生の目覚め」 久米秀俊（工四）「驚きたいといふこと」
九大信和会	昭和35年 4月23日	教養部11番教室	滝沢寿一先生（西南大学教授） 「日本を考へる―情勢論と本質論について」
熊大信和会	5月10日	教養部A-11番教室	山田輝彦先生（福岡教育大学教授） 「漱石の文学」
福教大信和会	5月24日	四号館102番教室	小柳陽太郎先生（修猷館高校教諭） 「学問―いのちに至る道」 「概念的思考法克服のために」

<p>西南大信和会</p>	<p>九大信和会</p>
<p>6月11日</p>	<p>6月4日</p>
<p>四号館102番教室</p>	<p>教養部37番</p>
<p>志賀建一郎先生（三池高校教諭）          一現代青年の課題」          小野吉宣先生（直方高校教諭）          一大学で何を学ぶか」</p>	<p>小柳陽太郎先生（修猷館高校教諭）          一明治の精神」          一正しい国家観の回復のために」</p>



第二十五回 「合宿教室」の  
あらまし

熊本大学医学部四年

福田

誠







## 開 会 式 まで

第二十五回学生青年合宿教室は、昭和五十五年八月七日より十一日までの四泊五日間、長崎県の雲仙国立公園で開催された。会場は、雲仙の温泉にさしかゝる右手にある雲仙ファミリーホテルである。山の緑に囲まれたこのホテルは、夕べには蝸ひぐらしの声が聞こえ、緊張した心を和ませてくれる。われわれの学問の場所としては、格好の会場であった。

合宿開会の三日前、各地で合宿教室の参加勧誘活動に携ってきた男女学生三十余名と国民文化研究会の若い会員数名が、事前合宿と合宿開催の準備の為、会場に集合した。事前合宿とは、班長・副班長として合宿教室を支へてゆくこれら幹部学生が、お互ひの合宿教室に臨む気持ちを確認してゆく場である。わづか一泊二日の合宿ではあったが、三十余名一同に会しての討論や輪読が真剣に行なはれ、みんなの気持ちは、新しい友を迎へんとする緊張感の中に高まっていった。翌日は、終日、合宿開催準備の為の作業に充てられた。班室表示や仮名簿の作成、名札作り、講義場設営等、多くの作業も分担され手際よく進められた。玄関前には、「友よ、と呼べば友は来たりぬ」（三井甲之）と大書された横断幕が掲げられ、ホテルへの道の脇には明治天皇御製

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

を書いた大きなのぼりも立てられた。夕刻、作業完了。あとは全国から集ふ四百名の友を待つのみとなった。

参加者の内訳は次の通りである。

(学生班 七十六大学)

筑波大 1 埼玉大 1 東京大 1 防衛大 10 岐阜大 1 京都大 2 大阪大 1 岡山大 4  
愛媛大 3 広島大 2 島根大 1 山口大 3 福岡教大 11 九州大 20 九州芸術工大 1  
佐賀大 11 宮崎大 4 長崎大 13 熊本大 33 鹿児島大 14 市立高崎経大 2 大阪市大 1  
大分県立芸術短大 1 早稲田大 4 慶応大 2 中央大 12 亜細亜大 28 日本大 5  
明治大 3 法政大 1 立教大 1 拓殖大 2 青森大 1 高千穂商大 18 学習院大 1  
明治学院大 1 東洋大 1 大東文化大 2 独協大 1 城西大 1 文教大 1 国士館大 2  
明星大 2 上野学園大 1 和洋女子大 1 白百合女子大 1 多摩美術大 1 神奈川大 1  
北陸学院短大 1 金沢経大 1 金沢工大 1 静岡薬科大 1 豊橋技術科学大 1 南山大 1  
同志社大 2 大谷大 1 立命館大 1 関西学院大 1 関西外語大 1 神戸学院女子短大 1

広島修道大1 徳山大1 八幡大2 北九州大2 九州共立大1 第一経大3

九州産大4 福岡女子大3 西南学院大7 中村学園大3 福岡大9 久留米大1

九州リハビリテーション大2 熊本商大3 熊本女子大3 純心女子短大1

計二九四名（うち女子五三名）

（社会人・教員班）会社員 大学教授 小・中・高教員など

計三六名

（招聘講師）二名 （大学教官有志協議会・国民文化研究会）八五名 （見学参加者）二名

（事務局）一二人

総合計四三一名

以上の参加者は、アンケート用紙をもとに八名乃至九名づつからなる班に編成され、各班には事前合宿参加学生及び、国文研の若手会員が班長として割り当てられた。特に本年は、国文研会員が多数、班長に起用されることとなった。男子学生班は二十八箇班、女子学生班は八箇班、社会人班は六箇班、さらにそれらの数箇班からなるブロックが六つ編成された。各ブロック毎に各班の内面把握に心を注ぎ、班長相互の間で指導を深めていった。

八月七日、全国各地より、続々と友は集まってきた。いよいよ合宿の開始である。

午後二時半、参加者は全員、講義室に集合し、開会式が行なはれた。高千穂商科大学商学部三年渡辺卓志君の力強い開会宣言の後、全員で国家斉唱、続いて、戦時、平時を問はず、祖国日本のために尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊に対して、一分間の黙禱を捧げた。次いで主催者を代表して、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が「大学の違ひや年齢の差などにとらはれず、お互ひ一人の人間として合宿に臨んで下さい。そして、力むことなく、みなさんの心の底にある安らかな気持ちを種として、日本人としての平常心をもとに合宿にとりくんで下さい」と挨拶された。続いて参加学生を代表して、九州大学三年金子光彦君が「合宿の一瞬一瞬が二度と繰り返されぬ『一期一会』の経験であることを肝に銘じて、学問、人生、祖国について思ふ存分に語り合はう」と力強く呼びかけ、開会式は終了した。この後、熊本県立人吉高校教諭・田



之上正明指揮班長より合宿生活全般に亘る諸注意が伝達され、休憩をはさんで福岡県立三池高校教諭・志賀建一郎運営委員長の挨拶が行なはれた。志賀運営委員長は、「言葉に対して丁寧に取り組んで欲して欲しい。言葉に籠められた人の思ひを心に感じる努力を積み重ねて欲しい。そのやうに心を働かせ感じるといふ営みが、現在の大学の学問には欠如してゐる」と訴へられた。

その後直ちに、全参加者は各班室に分かれ、自己紹介のあと所懐を述べ合ひ、引き続いて前年度合宿記録『日本への回帰・第十五集』の輪読を行なつた。

第一日目の夜、合宿導入講義、「学問・人生・祖国」と題する福岡県立修猷館高校教諭・小柳陽太郎先生の御講義が行はれた。先生は、「学問・人生・祖国」といふ言葉は分ち難く結びついてゐると述べられた後、まづ学問する喜びについて『論語』の冒頭「学而時習之、不亦説乎」を引用されて、「学ぶことは単に知識を頭に詰め込むのではなく、先人の残した文章に溢れるその思ひを、自分の心で感ずる事だ。自分の心と先人の心とが生き生きと触れあふ所にこそ、本当の学問の喜びがあり、その喜びとは先人と共に歩いてゐるといふ喜びである。この喜びを通して人生の真実に触れる道が学問である」と話された。さらに、小林秀雄氏の「美を求める心」の文章を引用されつつ、「小林秀雄氏の言はれる、黙って物を見るといふ事は難

8月9日(土) (第3日)	8月10日(日) (第4日)	8月11日(月) (第5日)
(起床) 朝の集ひ食 朝	(起床) 朝の集ひ食 朝	(起床) 朝の集ひ食 朝
(講義) 「現代人の思想」 山田輝彦先生 (質疑応答)	(講義) 「今こそ日本への 回帰を」 小田村寅二郎先生 (質疑応答)	運営委員長所感発表
		全体意見発表
		合宿をかへりみて 小田村寅二郎先生
班別討論	班別討論	班別懇談 第二回和歌創作 感想文執筆
昼食	昼食	閉会式 (昼食)
「和歌導入講義」 宝辺正久先生	地区別懇談	
仁田峠散策 地獄めぐり 和歌創作	(講義) 「人間の生き方・ 物の考へ方」 福田恆存先生 (質疑応答)	
夕入散 食浴歩	班別討論	
(講義) 「断然自ら任せずん ば何ぞ後世に待つ ことを得んや」 長澤一成君	夕入散 食浴歩	
(講話)「国家と防衛」 小田村四郎先生	「和歌全体批評」 長内俊平先生	
慰霊祭	班別和歌 相互批評	
班別懇談	夜の集ひ	
(就床)	(就床)	

第二十五回「合宿教室」のあらまし（福田）

第二十五回「合宿教室」日程表		8月7日(木) (第1日)	8月8日(金) (第2日)
	6:30		(起床) 朝の集ひ食
	8:00		(講義) 「世界の平和に 貢献する道」 法眼晋作先生 (質疑応答)
	9:00		記念撮影
	10:00		班別討論
	11:00		昼食
	12:00		(講義) 「聖徳太子の信仰思想 と日本文化創業」 高木尚一先生
	1:00		
	2:00		
	3:00	開会式	班別輪読
		運営委員長挨拶	
	4:00	班別自己紹介 班別輪読	青年研究発表 (堀田・谷口・松田)
	5:00	夕食	夕食 入散
	6:00	食浴歩	
7:00		班別輪読	
8:00	(講義) 「学問・人生・祖国」 小柳陽太郎先生		
9:00	班別討論		
10:00	(就床)	(就床)	

しいことです」といふところに心をとめて下さい。ものを見るとは実体を見ることです。ものを見ても、それを概念に入れかへてしまった瞬間に、ものは見えなくなってしまうのです。人間の美しさ、立派な姿といふものも、黙ってその人物を見るしかないのです。実体と概念の関連をじっくり考へていただきたい」と話された。最後に、吉田松陰の「道は天下公共の道にして所謂同なり。国体は一国の体にして所謂独なり。(人と人との付き合ひの中で互ひに心をくだいてゆく道に違ひはなくとも、国の姿には営々と受け継がれてきたその国にしかない独自のものがある)」といふ言葉を引用され、実体と付き合ふことによつてしか得ることの出来ない「一国の独」なる世界―日本―があることを天皇の問題にふれながら訴へられた。

第二日目は元外務事務次官・元駐ソ公使参事官・法眼晋作先生の御講義から始まった。先生は外交問題の権威であられ、特にソ連問題に關しては豊かな御経験と深い御造詣を持たれた専門家であられることから、日本が厳しい国際情勢に置かれてゐる現在、参加者一同強い関心を抱いて御講義を拜聴した。演題は「世界の平和に貢献する道―国際情勢と日本の対応―」である。先生はまづ「ソ連は、戦後数々の軍事行動を起こし『緊張緩和』といふ美名のもとに軍事力を強化してをります。このソ連に日本がいかに対応するかといふことを、国民一人一人が真剣に考へてゆかねばなりません。世界の平和は、広い意味でのバランス・オブ・パワーによつて維持されてゐます、日本がソ連の戦略に対応し世界平和に貢献する道は、アジアの balan





ス・オブ・パワーを維持することです」と言はれ、アジア諸国と関係を深める為の幾つかの外交方針を示された。「然し、最も重要なことは現在の国際情勢をふまへた着実な自衛力の増強と日米関係の強化です」と強調され、又、「国防の第一義は、自らの手で祖国を守る自覚です」と述べられ、最近の世論調査を例にとって「今の日本人は祖国を守らうといふ意識が大変稀薄です。国民一人一人に日本を守らうといふ意志のないところで、どうして国防を語ることができますか、自分の国を守れないものにして世界平和が語れるでせうか。」と述べられた。齢七十歳とは思へぬ、力強いお話振りで、先生御自身も有事の際には「私は日本国民として、たとへ最後の一人になっても戦ひます」と語られ、参加者一同、先生のはげしい気迫に深い感動を覚えた。

午後の日程は、高千穂商科大学教授・高木尚一先生の輪読導入講義からである。先生は輪読のテキストである

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の著者である黒上正一郎先生の御略歴を紹介された後、この本が、内治外交の混迷期にあって国民生活の運命を荷はれた聖徳太子の御精神を黒上先生が憶念される中で成ったことを語られた。先生は、黒上先生に導かれて友等との学びの道に連ってきたことを述べられた後、学問のあり方について、小林秀雄氏の文章を引用され、実人生を生きる私達の「有るが儘の心」がまことに「脆弱」であること、また、さうであるが故に、共に先人の書を読み、自他の生き方を問ひ正し合ふ学問が大事である事を訴へられた。最後に、「学問は志を高く大きく立てて、自分でかう思ふ、といふ所から出発するのが大切です。自分がやるんだといふ気概をもって進んでほしい」と述べて御講義を結ばれた。

翌日、第三日目の午前は、福岡教育大学教授・山田輝彦先生の御講義「現代人の思想―風化現象からの脱却―」であった。先生は日本の現状に対して「現代日本人は、物質的豊かさを達成し終へ、精神的虚脱状態にある」と日本人の思想が非常に衰弱してしまつた事を指摘された。そして、そのような状態から脱却する為に、明治以降の思想を辿ってゆかれた。初めて統一国家を持った明治の人々の生き方を偲ばれた後、現代思想の原型とも言ふべき科学主義・歴史主義・普遍主義の思想や、戦中・戦後の思想についても言及された。そして、小林秀雄氏の『歴史』に触れられ、「歴史といふものは、感じられなければ、心に蘇へて来なければ、それは単なる事実であつて歴史ではない。歴史を学ぶとは昔の人の体験を追体験することである」と

語られた。さらに「制度としての『外なる国家』に対し、我々が心中で感ずるしかない『内なる国家』、『生命』としての国家がある」と語られ、「国家といふものは自然現象ではなく、意志の継続である。人間の意識的努力なくしては存在しない」と語られ、ここに思ひを致す事によって、西洋思想の未消化による現代の虚脱状態を克服する事ができるのではないかと述べられ講義を終へられた。

夜に入り、九州大学医学部四年・長澤一成君が「断然自ら任ぜずんば、何ぞ後世に待つことを得んや」と題しての古典講義を行なった。長澤君は、吉田松陰の『講孟餘話』に初めて触れた契機や、吉田松陰についての説明の後、実際に『講孟餘話』に触れて講義を進めていった。松陰の、古典や友人との真剣なつき合ひ方を偲んだ後、「僕達は、大学生活の中で上辺だけの付き合ひをしてゐるのではないか」と述べ、さらに「今、先人の残した志・言葉を僕達が後輩や同輩に伝へなくて誰が伝へるのか」と強く語りかけた。学生による古典講義は、今回初めてであったが、長澤君の迫力ある講義に、参加者は強くひき込まれた。

その後急遽登壇された農林漁業金融公庫副総裁・小田村四郎先生は「憲法と国防」と題して短い時間ながらはげしいおもひをこめて国防の急務について訴へられた。先生は「平和憲法」と言はれてゐる現行憲法について、「一国の独立と平和とは、その国を守るといふ非常に難しい激しい努力の下に初めて確保されるものだ」と述べられ、安易に憲法さへ守つてをれば平和

を確保できるといふ思想の未熟さを指摘され、憲法、特に第九条の政府解釈についても、日本は決して自衛戦争を放棄してゐないこと、及び国際法上の自衛権を保有することを、憲法の成立の経緯や福島判決・砂川事件等を引きながら説明してゆかれた。また、現行憲法には幾多の欠陥があるのは事実であるが、要は国民の国防に対する意志であり、それさへあれば防衛力を整備してゆく上では決して大きな制約や障害はない。まして、敵が攻めてきたときに反撃して戦ふことは、いふまでもなく何ら憲法に違反するものではないと語られ、最後に、国防の目的について、市ヶ谷で壮烈な自決をとげられた三島由紀夫氏の檄文中の「生命尊重以上の価値の所在―われわれの愛する歴史と伝統の国、日本」といふ言葉に触れられ、「国の防衛とは、単に現代の国民生活の為にのみあるのではなく、祖先から受け継ぎ、永久に子孫に伝えて行かなければならない祖国の生命、その生命を守るとい



小田村四郎先生

ふことだ。だから、我々は何にもまして祖国の生命を感ずることができ、やうに心を磨くことが大切である」と述べられ、力強く講義を終へられた。

合宿第四日目は、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生の御講義「今こそ日本への回帰を」で始まった。先生は、まづ「世間では、この世は生存競争の一語に尽きる」とよく耳にする。たしかに人間同士が競争し合っているのは事実には違ひないが、人生をそのやうに意識して決めてかかるよりもこの世の一人びとりの人間は、自己の人生をより一層充実したものに、より一層生き甲斐のある人生にしていきたいと努力しながら、すべての人々がお互ひに励まし合つて生きてゐるのだと把へることの方が、格段に人生についての眼識が養はれてくると思ふ。」と指摘された。そして、「後者の視点に立たうとする人たちは、自他の関係の中に自己の位置する立場を正しく整へることが、いかに大切なことであるかを、肝に銘じるやうになつていく。そこに日本人の伝統的な思想の姿が見られてくる。」と説明され、その例として日露戦争における露将ステッセルとわが第三軍の乃木司令官との会見模様を小学唱歌「水師營の会見」の歌詞（佐々木信綱作詞）を追ひながら説明された。次に先生は、同じことを、国と国の付き合ひについて考へてみようかと提案され、「国際間の問題（例へば平和の意味合ひ）は、もつと実人生的な諸活動の中に息づいてゐる理念に生まれ変らなければならぬ。それが刻下の日本の急務ではなからうか」と語られた。また、生き続けてきた国家を理解するためには主権、

国土、国民の三要素といふより、国家とは、一定の土地、一定の言語、一定の伝統の三要素から成ると把へるべきであり、その各々の「一定の」の内容について正しい認識がととのへられなければならない、と指摘された。そしてわれわれ日本人が、日本人としての自覚を正しく持つ為の幾つかの心構へを示された後、最後に、防衛問題にふれられ、「現在防衛の第一線に馳せ参ずるわれらの同胞が、その尊い生命を捧げる対象が空漠にされたままであるが、それを明らかにすることが目下の急務である」と強く訴へて講義を終へられた。

午後の日程に入り、御二人目の招聘講師、文芸評論家・現代演劇協合理事長の福田恆存先生の御講義となった。今回は四度目の御出講であられる福田先生は、「人間の生き方・物の考へ方」と題して、「自由とは何か」「言葉と論理」「個人と国家・その正統性と連続性」「経験といふこと」の四つのテーマを掲げられ、それぞれが関連したテーマである旨を話された後、本論に入ってゆかれた。先生はまづ戦後の言葉の混乱について語られ、「自由」「平等」等々の言葉があまりにも無責任に使はれ、自らの決断と責任に於いて言葉を発し、行ひを成す覚悟が稀薄であると指摘された。現代の人々は人生に於いてのつびきならぬ「壁」にぶつかった時、その「壁」の原因を他に求め、「壁」の無い状態を「自由」と考へる。また、「平等」といふ美名を掲げて己れの「自由」の妨げとなる他人の「自由」を抑へようとする、その様な脆弱で欺瞞に満ちた精神が戦後の風潮の底流にある。このやうな時流にのつた言葉や考へ方を懷疑し、自

分自身の内面を凝視して自問自答を重ねる中で、自己発見の喜びを味はふ事こそ真の「自由」であると語られた。続いて先生は「過去の一切の記憶を失へば、人間に人格はない。自分の過去と日本の歴史を所有し、統一してゐる所に自分がある。」と述べられ、更に「過去は決して消滅しない。過去は現在に生きてゐる。」「単に知識として歴史を理解するのではなく、先人が様々な思ひで生きた歴史をひとつの実感として味はふ、そこに先人の生き方に共感する新しい自分を発見し、本当に生きた歴史が経験される」と語られた。そして、先生御自身の御経験として、昭和十七年に旅順の爾靈山の頂きに立たれ、半身を隠すべき所も無い急峻を見降された時、第三軍を率ゐて苦闘した乃木將軍の心中、また、優秀な軍事力、豊富な物資を持つ西欧列強と伍して国の独立を守らねばならない当時の日本の苦しい立場が実感されたと述べられた。更に、『日本書紀』に僅か十数行の記録をと



地区別の懇談

どめるのみである「有間皇子」の御生涯を追慕され、皇子ゆかりの大和の地を訪ねられた折、皇子達が馬を嘶かせて道を駆けゆく姿や、書紀に記されてゐる小丘や池の跡を想像されてゐる中に、千数百年前の古代の姿がまざまざと感じられたと述べられた。そして、「歴史とは、単なる過ぎ去った事実ではなく、歴史に愛情をもって交わる中に、自づと実感されるものだ」「日本の歴史といふひとつの過去を共に所有し、実感し得てはじめて日本人としての繋りが感じられる。祖先が守り伝えてきた日本の歴史を切断し、否定するところに日本の国は存続し得ない。」と語られ、戦後の歴史否定の風潮の中にあつて、日本の歴史をわが身に実感し、日本人としての自覚を得る事の困難と大切さを述べて御講義を終へられた。

合宿教室では、先生方による御講義の他に、学生相互の研鑽の場である、班別輪読や班別討論が設けられてゐる。今回の班別輪読も昨年にひき続き、昼と夜二回、計四時間余りに亘る長時間の輪読が行なはれた。テキストは黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』である。輪読は先程述べた高木尚一先生の御講義のあと各班に別れて四時間の長さにわたつてづけられた。輪読箇所は、聖徳太子の第一皇子山背大兄王の御最期が太子の御精神の現はれであり、そのやうな太子の家庭的薫化の精神が太子の勝鬘経義疏の中に表現されてゐることを述べられた処であつた。私達は山背大兄王が皇位継承問題の渦中にお立ちになり、自刃された歴史的事実を、日本書紀を参考にしつつ、著者の思ひに迫つていった。難しい作業であつたが、



参加者は二回の輪読によって、一語一語の言葉を正確に辿り、著者の思ひに迫ることが、いかに大事なことであるかを、身をもって感じる事ができたのである。

講義の後には、班別討論が行なはれる。講義で提出された問題や、感想が述べ合はれるが、ここにおいては、理論的な概括した意見に対しては厳しい指摘がなされる。それは、さういふ我が身をさせたやうな話の中からは、自分の生き方を変へるやうな力が生まれてはこないからである。また、話す人は相手の目を見て話し、聞く人も話手の目をみて心に迫るといふ努力がなされる。ここに、友と共感し合へる、広やかな世界が実現されてゆくのである。

輪読・討論とならんで、短歌創作・相互批評もこの合宿における重要な研鑽の一つである。第三日目の午後、妙見岳登山に先立って国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生による短歌創作導入講義が行なはれた。先生は「歌を作り歌を味はふ事は、この上もない楽しみである。」と話され、日常生活の中で歌に接していく心がまへを語られた。そして、感激の忘れられないすぐれた歌として柿本人麿の歌や今年の御歌会始の今上天皇の御製

桜

紅のしだれざくらの大池にかけをうつして春ゆたかなり

をあげられ、「これらの歌は、現実の一点から、無限の憶念の情意にみちびかれるもので、一首を一息に詠みあげられている、その調子を味ふべきだ。」と、すぐれた歌に出会ふことの大切さを語られた。最後に、国文研会員で若き海上自衛官太田文雄氏の「天皇誕生日に参内して」と題する連作七首を詠まれ、感動をありのままに詠まうとする連作の呼吸に触れられ、御講義を終へられた。

この後、直ちに参加者はバスに乗り込んだ。待ち望んだ妙見岳登山ではあったが、あいにく霧が深く立ち込めたため、仁田峠より下山し、地獄めぐりに変更された。この時間は短歌創作をかねたものであったが、参加者は久しぶりに戸外に出て、友と語り合ふ、心なごむひとときであった。

この時に参加者全員が作った歌は、先生方や事務局の方々の徹夜の作業で分厚い歌稿となり、翌日全員に配布された。

四日目の夜、国民文化研究会の長内俊平先生によって、和歌の全体批評がなされた。先生は歌稿の中から三十首近い歌を一首一首懇切に批評・添削してゆかれた。中には愉快的な歌もあり、又批評してゆかれる先生のお人柄から先生独特のユーモアが感じられ、しばしば講義室に爆笑が起こった。先生によって添削された歌は、見違へる様に生き生きとしてくる。先生の作者の気持ちや丁寧な汲みとらうとなさるお気持ちが伝はってきたが、なかでも紫陽花の歌について、



短歌の全体批評をされる長内俊平先生

「前の庭に今紫陽花が咲いてゐるが、皆今頃、珍  
いと思はないでせう。併し今頃咲くなんて余  
程天候が不順なんだな、お百姓さんは困ってゐる  
だらうな、といふ風に心を働かせるのが日本人が  
大切にしてきた国民同胞感なのです。」と話され、  
日常の些細な事に触れても、人の身の上を思ひ遣  
られる先生の心の働かせ方に一同心を打たれる思  
ひであった。

全体批評の後、各班に戻って班別和歌相互批評  
の時間が持たれた。作者の気持ちを班員全員が辿  
り、より正確な表現になほしてゆくのである。こ  
の時には、さはやかな共感の世界が現出する。

このやうな研鑽の中で、始めの一・二日にはな  
かなか打ち解けなかった参加者も、しだいに心を  
開き友のことばに共感ができてゆく経験を味はっ  
ていたのである。

第二日目の夕方、国文研の若手会員による青年研究発表が行なはれた。

最初に福岡県立豊津高校教諭の堀田真澄氏（昭和五十年九州大学卒）は、福岡地区の合宿に参加された時に、或る先生が言はれた、「一輪の花の美しさを感じずる為にはその花を黙って見続けねばならぬやうに、国の姿もじっと見つめなければその美しさは感じられない」といふ御言葉によって、国を考へてゆく根本に気付かされた。そして、次第に、天皇の御歌を拝誦して心打たれる経験を重ねてきたことを語られ、最後に「かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを」といふ明治天皇の御製を詠まれ「これらの御歌に込められた美しい国の姿を教へ子に語ってゆきたい」と述べられた。

福岡県の中間市立中間南小学校で教師をしてをられる谷口敏子さん（昭和五十四年福岡教育大学卒）は、病気で父親を亡くした教へ子について語られた。仏壇の前で彼女が掌を合はせてお父さんに話しかけてゐる姿に谷口さんは「お父さんの魂は彼女の心の中に生きてゐるんです。正美さんは心を働かせることによってお父さんと出会ってゐるんです。

目に見えぬ深いものも心を働かすことにより見出せることに気付かされました。」と述べら

れ参加者に深い感動を与へられた。

千代田コンサルタント(株)勤務の松田信一郎氏（昭和四十八年熊本大学卒）は、昨年不慮の事故でなくなられた国文研の瀬上安正先生のもとで大学生の頃より共に学んでこられた日々のことを切々と語られた、先生の遺された御歌「二十有五年の月日過ぎゆきてわがそそぎたる生命いづくに」を詠んで、先生は二十有五年の間、職場で自分の仕事にひたすら打ち込まれてきた、その間先生は、自分の仕事に打ち込むことを通して、国をおもふことに心を定めてこられたのだと語られ、最後に「国をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場（カミ）にたつもたたぬも」といふ明治天皇の御製を、先生の御霊に手向けられるやうに心を込めて拝誦された。

## 慰 霊 祭

合宿三日目の夜、慰霊祭が挙行された。連日の小雨模様で、戸外での実施が危まれたが、雨も上がり、予定どほり朝の集ひの広場でとり行なはれることとなった。

慰霊祭に先立ち、国民文化研究会会員歯科医師・吉田哲太郎氏によって慰霊祭の説明が行なはれた。その後、参加者は屋外に出て、祭場の前に整列した。祭場には篝火がたかれ、厳粛な雰囲気である。

お抜ひにかへて故三井甲之先生の遺歌、

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

が二度朗詠され、戦時・平時を問はず日本の国をまもる為に尊い生命を捧げられた全ての祖先の御霊をお呼びするため、黙禱を捧げた。献饌の後、参加者一同を代表して高木尚一先生が祭文を奏上され、その後、夜久正雄先生が、明治天皇、大正天皇、今上天皇の御製を拝誦された。玉串奉奠の後、全員で「海ゆかば」を歌ひ御霊をお送り申し上げた。ここに慰霊祭に於て拝誦された御製、並びに祭文を記して置く。

### 明治 天皇 御製

明治三十八年日露戦争に際して「をりにふれたる」と題して詠ませたまへる大御歌 五首  
むかしよりためしまれなる戦におほくの人をうしなひにけり  
照るにつけくもるにつけてたたかひのにはにたつ身をおもひこそやれ  
萬代もふみのうへにぞのこさせむ国につくしし<sup>そみ</sup>臣の子の名は

さまざまにも思ひこしふたとせはあまたの年を経しこちする  
ひさかたのあめにのぼれるこちして五十鈴の宮にまゐるけふかな

大正天皇御製

大正九年、「猫」と題して詠ませたまへる大御歌

国のまもりゆめおこたるな子猫すら爪とぐ業は忘れざりけり

大正十年、「社頭暁」と題して詠ませたまへる大御歌

神まつるわが白妙の袖のうへにかつうすれゆくみあかしのかけ

今上天皇御製

昭和二十年、大東亜戦争終戦の折に詠ませたまへる大御歌 四首

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも  
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて  
国がらをただ守らむといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれとた  
だいのるなり

昭和三十四年、「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」と題して詠  
ませたまへる大御歌

くのためいのちささげしひとびとのことをお  
もへばむねせまりくる

昭和五十年、「米国の旅行を無事に終へて報告のた  
め伊勢神宮に参拝して」と詞書して詠ませたまへ  
る大御歌

たからかに鶏のなく聲ききにつつ豊受の宮を今  
日しをろがむ

昭和五十五年、「法隆寺」と題して詠ませたまへる  
大御歌

すぎし日に炎を受けし法隆寺たちなほれるをけ  
ふはきて見ぬ

昭和五十五年、「甘樞丘」と題して詠ませたまへる



祭文を奏上される高木尚一先生



大御歌

丘に立ち歌をききつつ遠つおやのしろしめしたる世をししのびぬ

祭 文

秋のけはい日毎に近づくこゝ雲仙のみやまのしげみに今宵昭和五十五年八月九日、われら第二十五回学生青年合宿教室参加者一同、みくにのため、尊きいのち捧げまして、とこしへに、みくにまもりましますみおやたち、いくさびと、同胞、友らのみたまなごめのみ祭り仕へまつらむとす。

明治天皇、今上天皇の御製に、また聖徳太子のみ教へに国民のゆくべき道のしをりを仰ぎつつ、いく年かけて学びきたりしわれらここにむらぎもの心かたぶけますらをの心ふりおこしつづく重にもとざされしまなびの道をきりひらかむと、講義の聴講、班別討論、班別輪読、はまた和歌の創作と相互批評にかたときも休まずつとめ来りて合宿もはや半ばをすぐせり。

国民の道を正し、みくにの内外なるあだとたたかひゆく我らのゆくてはいかにけはしくとも、千早ぶる神のみまもりを祈りつつ、いまよりのち、まなびやにはたまたつとめのはに、力合せ、しきしまのみち、いやつきつきにふみひらかむと、うけひまつることのよしを、いましみ

こたち、きこしめしたまへ。

天にますみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてをまもらせ給へと、第二十五回学生青年合宿教室参加者一同に代り高木尚一謹み敬ひ恐み恐み白す。

### 合宿最後の日

四泊五日の合宿も愈々最終日を迎へた。初めに合宿運営委員長志賀建一郎先生が挨拶に立たれ、「合宿を通じて皆さんは本当に『言葉』といふものの難しさを痛感されたことと思ひます。そして今、四泊五日間を共に過ごし、学んできた班友との別れ難い思ひを抱いてをられるでせう。それは、班員皆が心を砕いて、一つ一つの言葉に迫ってゆく中で、心の通ひ合ふ世界が実現されたからではないでせうか」と参加者全員の気持ちを表はされたのである。

続いて全体意見発表が行なはれた。各参加者は壇上に立って各々の思ひを述べた。合宿で受けた感銘、あるひはこの合宿から帰ってからの抱負など心のこもった感想が披露された。

次に小田村寅二郎先生が登壇され「先人や班友の言葉に丁寧につき合ひ、気持ちを偲んでゆく中に、『言葉』といふものの難しさが痛感されると共に、そこに心の通ひ合ふ『内的平等』の世界が実現された。」「社会的地位等の外的平等がどんなに行なはれても、人間内心の平等が



閉会式の挨拶をされる夜久正雄先生

実現されなければ「真の平等」ではない」と語られた。また「『祖国愛といふ狭いものよりも、より普遍的な人間愛・人類愛が大事だ』と言ふ人があるが、同じ言語、国土、伝統を持つ日本人に愛情が持てなくて、どうして『人間』『人類』を愛せよう。本当に日本の歴史や伝統を愛せる人こそ『真の人間尊重』が実行できるのだ。」「誰も皆、父母を思ふ気持ちを持ってゐるが、この心情は私達の遠い祖先を思ふ気持ちとひとつのものだ。この悠久無辺の民族の歴史に自分もまた連って生きてゐる事が実感された時、古典そして国のいのちは息を吹きかへす。」と指摘された。

この後班別懇談に入った。共に語り合ふのも最後となり、一人一人の班員の言葉にすひ込まれるやうにお互ひが耳を傾けた。そして感想文を執筆し、第二回目の和歌創作にうちこむ。静かなひとときで

あった。

閉会式のときがきた。国歌斉唱の聲が、会場に二度響きわたった。学生代表熊本大学医学部五年福田誠が、「日頃生活するには今の決意を曇らせるものが氾濫してゐるが、今後合宿で得た友と互ひに励まし合ひ乍ら学んでゆかう。」と呼びかけた。次に主催者を代表して、国民文化研究会の夜久正雄先生が、「全員が心を開いて語らうと努力し合ふうちに、非常な感動を覚えられたことでせう。これが内的平等の世界で、この世界が実現されたことはほとんど奇蹟のやうに思はれる。私はこの第二十五回、雲仙の合宿教室に参加したことを誇りとし、その感動から何かひとつ、行為を生み出したい」と、閉会式の挨拶をされた。続いて、鹿児島大学法文学部二年樺山浩二君の「閉会宣言」が行なはれ、その後、先生、先輩方に学生一同で御礼を述べ、最後に全参加者によって「神州不滅」(三井甲之作詞・信時潔作曲)を斉唱し、四泊五日間の全日程の幕は閉ぢられたのである。

九州大学 四年 弓 立 忠 弘  
をちここに別れゆきてももろともに学びゆきたし文かはしつ

合  
宿  
詠  
草





△開會式▽

開會式にて

この友らと君が代共に歌ひゆけば知らず知らずに声の高まる

大阪市立大 理 四年 氏原 秀起

△朝の集ひ▽

声高く友らと君が代歌ひつつ霧の中なる日の丸仰ぎけり

佐賀大 教 四年 松岡 幹雄

君が代を共に歌ひて心からすがすがしくも今日のはじまる

九州大 理 一年 三苦 敏

△講義▽

法眼先生の御講義を聞きて

日の本の未曾有の危機を語らるる師のまなざしに我が身正さる

東京大 文I 二年 小坂 実

岡山県立福渡高校教諭 小坂博通

法眼先生の御講義を聞きて

語気強く日本の防衛語り給ふ師の御言葉に心高なる

学習院大 経 四年 飯島啓史

高木先生の御講義を聞きて

大学で学問の道を護り来し大人うしの姿に目の熱くなる

真実の学びの歩みを語られし先生の面は輝きて見ゆ

高千穂商科大 商 三年 渡辺卓志

高木尚一先生の御講義の折

肉声に導びかれてとふ御言葉の力こもりて胸に響きぬ

㈱MDC水門ファーマシー 島田礼子

小田村先生の御講義をお聞きして

「日本語をまもれ」とふ言の葉せまりきて身内つらぬきふるへとまらず

福岡教育大 聴講生 伊藤智恵子

山田先生の御講義をお聞きして

たんたんと言らるる師に幾十年も歩みこられし御跡俣ばゆ



福岡教育大 教 三年 那 須 三 元  
谷口先輩の発表で教へ子のまさみちゃんの事を聞きて  
ありし日の父の姿を偲びつつ語る幼な子思へばかなし

谷口さんの発表を聞きて

九州大工大学院 一年 亀 川 龍 彦

苦しみのなき世にゆきしと父君をつづれる文のひたに悲しき  
たまきはる命絶ゆれども幼な子の胸に御魂は生き給ふらむ

宮崎県立宮崎盲学校教諭 竹 下 鉄 郎

松田先輩の発表を聞きつつ

故瀬上安正先生を偲びて

ひとすぢに学びの道を示されし御姿しぬべば畏かりけり  
師の君のみいのちつぎて我もまた学びの道に連なりて生きむ

九州大学 工 大学院 久 米 秀 俊

長澤兄の発表を聞きて

一語一句おろそかにせずわが友は松陰の御文読みゆき給へり  
導かれ文たどりゆけば文中のあふるゝ思ひ伝はりて来ぬ

胸内に義人烈婦の生きるがに文読み給へり松陰大人は

志を語り合ふことの学内にあまりに少しといふ指摘厳しき

わが胸に「断然自ら任せずんば」との激しき君の言葉ひびき来

△友との語らひ・班別討論▽

とつとつと感想述ぶる友の涙におのが心の洗はるること  
愛媛大学 工 二年 青野 哲 哉

くやしきこと友に語れば胸内むなぬちのはればれとしてうれしかりけり  
関西学院大学 法 三年 釣 井 時 和

最後の班別懇談の折に  
九州大学 医 四年 笠 普 一 郎

「合宿に来てよかった」と語りたる友の眼まなこのすがしかりけり  
真剣に心ひらきて語り合ふ友どち得しがうれしかりしとふ  
去りがたし別れがたしと友皆に語りたまへる友どちもあり  
友みなと心あはせて歌ひたる「ふるさと」の声心にひびきぬ

班別討論において

亜細亜大学 法 三年 谷 萩 香 織

友どちと心開きて語り合へば時の経つのも短く思はる  
熱気込めとつとつと語る友の声に己が体の震へる思ひす  
とつとつと語り始めしわが友のすがしき姿に涙こみあぐ

九州 大 医 三年 安 藤 洋 志

班別討論の折、寺尾博之さんの歌をよみて

たらちねの母の身の上案じつつ戦の野辺に兄は征かれし  
うつくしき大和島根を護らむと征かれし兄の心せまりく

福岡県立筑紫丘高校講師 安 部 博 之

友どちと心つくして言の葉にまむかひゆくこそ嬉しかりけれ

友みなの最後に語る言の葉のありがたくして涙あふれ来

このえにしおろそかにすまじみ友らとたより交はしつはげみてゆかむ

九州大学 法 三年 後 藤 和 孝

友とともに肩をくみつつ歌ひたる螢の光胸にしみ入る

祖先みおやらの屍つみて守りこし御国にわれは今生きてをり

中央大学 法 二年 小柳 太喜夫

我が和歌わたがたの内に驕りを指摘せしみ友のひたに有難きかな

福岡女子大学 文 一年 三田村 千佳

班別討論にて

ひたすらに我が目みつめて語りたる友のすがたのありがたきかな

熊本大学 文 二年 田平 真実

班別和歌相互批評の折、山田先生が「君たちが自分の娘のやうです」と

おっしゃられる御言葉を聞きて

先生の我が娘のごとこのたまひし御言葉聞けば涙あふるる

がんばれと励ましくださる先生の御顔を見れば涙とまらず

福岡教育大 教 一年 是松 秀文

防人の和歌をし読めば故郷の母上のこと思ひ出さるる

福岡県中間市立中間南小学校教諭 谷口 敏子

加藤敏治先生に故寺尾博之さんのお話をお聞きして

師の君は共に学びし友どちと鹿兒島の地に旅されしといふ

酒くみかはし語り明かせしと師の君は思ひ出しつ話したまひぬ

旅の宿を去りがたくして予定より一日のぼし泊まられしといふ

帰路につき別れしその日が最後なりしと語りたまへるみ言葉悲し

”最後でした”と語り終りて笑みたまふ心いかにと胸のつまりぬ

熊本大学 教 四年 田 中 晶 子

流れおつる涙もふかぬ班長のやさしき横顔我忘れまじ

感動し涙を流す友を見て己が心のまづしさを知る

早稲田大学 政治 二年 斉 藤 勝

△合宿最後の夜友と語りひて

先人の言ひしまごころもちたしと身を乗り出して友は語りぬ

これからも自分を磨きてゆきたしと友の言葉は訴ふるがごと

真摯なる人生歩みたしといふ友の言葉の力強しも

これほどにおもひを語りしことなしと友の言葉はふるへて聞こゆ

△慰霊祭▽

熊本大学 文 一年 星 野 一 夫  
みまつりに頭垂れたる私の胸に戦時に死せる祖父の浮びく

慰霊祭にて

ますらをのかなしき生命と詠みたまふにおのづと心ひきしまるかな

祭文を聞きつつをれば激戦に生命すてにし人の偲ばゆ

みんなみ南の沖繩しまのはてにて人知れず神あがりましし人ただに思はる

戦の上を思はるるすめらぎの御歌のしらべ胸にせまりく

深ぶかと額づきをれば己が背に冷たかりける霧雨の降る

霧雨のそば降りたるも雲間よりおもひがけずも星輝けり

慰霊祭の夜

熱を出しふとんに入りて一人をれば時計の音の響き聞えぬ

友戻り座して語れる慰霊祭はいかなるさまにありしかと問ふ

涙する友の横顔を見守りつ素直なることの尊さを知る

心からあふるる思ひ伝へんと涙ながらも語らんとする

△レクリエーション・憩のひととき▽

霧雨に岩の間ゆ立ちのぼる地獄のけむり見上ぐるばかりに  
岡山大 法 一年 林 春生

防衛大 理工 二年 豊 留 利 久

にえたぎる地獄の池の蒸気もてゆでたる卵友とほほばる  
臭いねと語りかけたる友どちは旧知の友かと驚きて見ぬ

熊本大 工 一年 堺 美智雄

遠来の友らに見せたき妙見岳をおほふこの霧晴れよと願ひぬ

熊本大 工 一年 川久保 弘

紫陽花の雨に濡れたる緑葉のあふるる生命心に沁みぬ

東京都立蒲田高 三年 松 吉 基 光

長雨のしづくにたはむ若竹の下にあぢさる青々と咲く

日産自動車㈱・法規部 古 川 修

アフリカに出張してゐる友を思ひて

法師蟬しげく鳴く声のさびしかりアフリカの友共に居ずして

アフリカの友と語りたし雲仙の合宿のこと一つ一つを

かの友は顔をくづして笑ふらむくさぐさのこと語りてゆけば  
去年こぞの秋ゆここまで来しは不思議かな友の思ひにささへられつゝ

△全体所感発表▽

全体感想自由発表にて

防衛大 管理 四年 川本祐嗣

涙流し語りらるる友を前にして我もおのづと涙流るる

榑鉄川工務店・工事部 池松伸典

「全体所感発表」を聞きて

おのが心感動せぬままに過ごせしをいま悔いるとふ涙ながらに  
涙ながら語りゆきける女子の姿を見つつ涙あふれ来

中央大学 商 三年 福島徹男

全体感想自由発表を聞きて

このことを話さなければ帰れぬと涙ながらに友は語りぬ

西南学院大学 文 二年 結城誠二

全体感想発表の折



次々に登壇せられし御友等の声すがしくも部屋に響きぬ  
胸にせし己が思ひを伝へむと涙ながらに友は語りぬ  
友どちのただひたすらに語りたるその御心の尊かりける

出光興産㈱中央訓練所

佐々木

茂

全体感想自由発表を聞く

つぎつぎと所感を述ぶる若人のまことの言の葉我が胸ゆさぶる  
言の葉につまりて壇上に立ちつくす君の思ひの伝はりくるかな

△閉会式・別れ▽

閉会式の折、君が代を歌ひて

高千穂商科大学 商

四年

中

田

太

七

日の本の御旗仰いで歌ひける君が代のしらべ胸にせまり来  
君が代を友らとともに歌ひゆけば我ら同胞と感じられけり

山口大学

経

二年

宮

原

次

郎

司会者の起立の声で皆と立ちいざや歌はむ「神州不滅」

熊本大学 文 一年 丸山 伸治  
今まさに別れんとする友どちの便りするとの言葉うれしも

長崎大学 教 三年 吉田 昭夫

合宿最終日、友との別れに際して

寄せ書きに再会祈ると記したる友の言の葉かみしめるなり

城西大学 経 二年 金子 輝夫

雲仙のみやげ話を聞きたしと我を待つ父に早く逢ひたし

岡山県立新見北高校実習職員 砂川 芳毅

すさまじき研鑽終へていま山を下りてゆくらむ班の友らは

不安なる思ひのままに九人の友ら迎へし初日のことおぼろげなり

五日間言葉少なき友なれど微笑で感謝を言ひしがうれしき

来年も必ず来ますとさしのぶる友の手我も強く握りぬ

み友らよ山をおりても励みませ己が心をいよいよ尽して

先人が守り来しもの我もまた守り続けん日々に励みて

防衛大学 理工 二年 佐竹 伸正

同室の友と語りしこの五日に別れつげればさびしく思ほゆ

最後まで語りつくせし友どちとまた会ふことを心に誓ふ

熊本大学 教 四年 舟 川 陽 子

別れとて涙こぼさず我々はゑみをかはして別れゆきたし

熊本市役所・衛生局 折 田 豊 生

きびしかりし学びのつとめ終へて今友ら去りゆく晴ればれとして

大いなる学びの道につらなりて努めゆきなむおのもおのものに

なづみたる時こそ友よためらはず書したためて送りたまへや

△大学教官有志協議会・国民文化研究会▽

(財)労働科学研究所理事・高千穂商科大教授 高 木 尚 一

霧雨のはれまをしばしなく蟬の声たかまりて夕かたまけぬ

友らみな妙見岳にいでゆきて宿静かなる午後の一とき

み霊まつり夜にひかへてくさぐさの思ひ出わきくる一人しをれば

亡き師の君よろこびまさむ今年もまたあまたの友ら集ひしさまに

みたままつる心ひとすぢつとめきしこの年月は短かかりけり

合宿の朝の集ひに流れくる小学唱歌のしらべなつかし

わきおこるみくにのいのちさながらに健かなるかな小学唱歌

春秋の野山のさまもうかららの深き情も歌ふこの歌

とこしへのみくにのいのちつらなりて身ぬちに感ずこの朝毎に

元日特金属工業㈱常任顧問

加納祐五

雲仙の山を愛でむときたれども雨ふりやまず山はかくらふ

雨か霧か道ゆくなべにせまりてはたちまち消ゆる木々の群らだち

雲仙に居るは幾日のこる日のせめて一と日は晴れわたりてよ

班別討論の席につらなつて

部屋訪へば席をよせつつわがためにあたらしき座をつくりてくれぬ

聞くさへも難きはかりに声ひくく語る友ありすぐなるころを

もの問へどいらへもあらず時をへてもどかしと思ふときもありけり

思ふことさにはありとも語らむとことばえらばはときもへぬべし

つたなしといふべくもあらずわが語るそのことばさへつたなきものを

心へだてず語るすなはち信なりと信知せしめらる座につらなりて

亜細亜大学教授・教養部長 夜久正雄

合宿の一夜の明けて朝床に聞く暁のひぐらしのこゑ

合宿の宿に聞くなる暁のひぐらしのこゑの何ぞかなしき

つゆのまのいのちのかぎりをひとときにあつめてなくか明けのひぐらし

ひとしきりなきし高声ふとたえて遠ざかりゆく聞きあかなくに

亜細亜大学教授 宮脇昌三

感想自由発表

壇上に絶句して立つ若者にわが若き日の思はるゝかな

感きはまりて壇上嗚咽せし若者の健かにあれと祈らるゝかな

久にして思ひ新たに参加せし合宿の日々今日終らんとする

いつかしくかつはなごみてこの五日命の高まり覚えつるかな

多ければ名さへ覚えねこにして相見し友のただなつかしき

八代市役所助役 加藤敏治

瀬上安正兄を偲びつつ

仁田峠登り来れど白霧に目路閉されぬ小雨ふりつつ

去年までの集ひにつねにありませし君がみ姿見えず悲しも

世を嘆き正しき道をときませし力こもれる君が目見はも  
現し世に君が留めし雄心を受け継ぎゆかむ残りし我は

福岡教育大教授 山田輝彦

事故に逝き給ひし瀬上さんを思ふ

いづくにか今もいまさむ心地して瀬上大人を偲びやまずも  
去年の夏霧島の地にあひまつり別れし君よいまはいづくに  
さかしだちもの言ふわれをうなづきて見守りまし、面輪忘れじ  
四百を越えしつどひよ君いまも見守りますか在りし日のごと

榎宝辺商店代表取締役 宝辺正久

閉会式にて

四百の参加者と共に「神州不滅」の歌うたふなり強く高らかに  
すめかみ皇神のみはるかします日本にっぽんの来し方ゆ今うつゝ偲ばゆ  
なき友とうたひし曲と思ふさへ声のつまりて歌ひえぬなり  
みいくさのさ中に失せし佐賀の友いたみて友と歌ひしこの歌  
涙して歌ひたりける「神州不滅」若きらがいま高らかに歌ふ

開発電子技術開発取締役 長内俊平

ひぐらしのなく音かなしもみ友らと別るゝときのいや近づくに

さきくありてまたみむときをいのりつゝ夕ゆうべくれゆくそらをながむる

こころこめいとなみしこともはるかなることのごとくに思はるるかも

ひとときひとときつくし生きゆかむ明日をたのまむ人世ひとよならねば

農林漁業金融公庫副総裁 小田村四郎

一たびのえにし忘れずもろともに学びゆかなむあひ別るとも

此の年に集ひし友よこの思ひを心に刻みて学びゆかなむ

一すぢの道につらなる喜びをまた来む年にあひ共にせむ

国立韓国精神文化研究院客員研究員 鈴木満男

爽かなる若者にして“天皇”てふ一語には反撥を抑へがたしと

天皇につき考ふることのなにとなく恐ろしと語る友もありけり

戦ひに敗れし時のいよゝ遠くみ国の命ほそりゆくらむか

村の児やしろら社に集め書読ませ話聞かすといふ教師のありき

夜更けまで教へ児の家まはりゆき勉強を見きといふ人なりし

話合ひにおのづと熱の入るなべに熊本弁になるが楽しき

法眼晋作先生のご講義を聞きて

若きらへ思ひ託して諄々と説き給ひけり国の守りを

国守る正しき道を説き給ふ熱き思ひは我に迫り来

夷狄来たり国危ふからばひとりにても戦はむとふ言葉激しも

戸田建設㈱ 青山直幸

谷口敏子さんの青年研究発表を聞きて

言の葉の一つ一つを丹念に確かむること語りはじめぬ

初めての担任となりとまどひし君を励ますをみなご女子のあり

日常は明るき子なれど時としてさみしき顔をする子なりとふ

大手術受けたる父を思ひやりうち沈みたる子のいじらしさ

顔を真赤に染めてかなしさに耐へしのびたる女子あはれ

折々の思ひつぶさに亡き父に語りしと聞けば涙こみあぐ

かかる程に心砕きて教へ子をまも目守りたまふと思へば嬉しも

日本ユニパック㈱ 大町憲朗

全体意見発表の折



あふれ来る思ひのままに壇上に走りゆきしも黙せし友あり

言の葉をととのへかねてかうつむきて言葉にならぬ言葉述べにき

三分の時間をすぎてもある友はもだせしままに壇上に立つ

友どちの姿見つむるわが身にも通ひ来るものあり涙こみ上ぐ

山田先生の御講義を思ひ出しつつ

熊本県立球磨養護学校教諭

齊藤利恵

そひねしてものがたりさるる師の君のみ母の姿目にうかぶなり

われもまたいつか我が子にそひねしてものがたりする母になりたし

最後の「班別懇談」にて

口びるをふるはせながら話ささる友の横顔我は忘れじ

こんどこそこの班友と最後まで付き合ひつづけてゆかんと誓ふ

涙こらへ話さんとすれどとめどなくあふれ出る涙おさへかねつる

## あとがき

合宿教室の閉会式における夜久正雄先生の挨拶は心にしてみた。

「私共は合宿教室の四日間、家のこと、身分のこと、仕事のこと、さういふことをほとんど全部忘れて、合宿の進行の中に身を投じて来た。ご講義を聞く、あるいはその感想を語る、友の言葉を聞く、友に自分の思ひを訴へる、歌を作る、歌を読む、書を読む、書についての友の言葉を聞く——その中に自分の精神を集中する、さういふ生活を過してきた。それは言ってみれば、言葉の世界だと思ふのです」——この先生のことばは開会式において合宿運営委員長の志賀建一郎君が、「一つ一つの言葉にこめられたおもひをくみとる訓練をつむことが、この合宿教室の眼目である」と訴へたことと照応して深く心に残った。

「言葉の世界」——それが現代の青年の世界からいかに見失はれてしまつてゐるか、思ひのこもつた言葉のひびきあふ世界がいかに、青年の心から遠ざかつてしまつたか、——だがこの合宿教室においては、はじめに「言葉の世界」の手応へを一人一人が自分のものにする事が出来たのである。言葉がよみがへるとき、はじめに民族の歴史もよみがへる。合宿教室で、日本の歴史の脈搏を実感し得たのも、言葉の世界の密度の深さ故であつた。

合宿教室において語りかはされた一つ一つの言葉に思ひをはせながら、かうして編集の筆をとつてゐると、あの時の豊かなおもひが再び、現実のものとなつて、蘇ってくるのである。だがこのよろこびの中から私達は何かを生み出してゆかなければならない。再び夜久先生の挨拶の一節を引用しておきたい。

「——さういふ感動を受けたからには、その感動から何かひとつ、行為を生み出したいと思ふのです。たゞ感激したといふことだけではなく、感激したのだから、何かそれが自分の行為になるといふ、さういふ何かをしたいと思います——」

○ 今回のタイトル頁の写真は、福岡市南郊、「油山観音堂」周辺の風景と、終戦後五日、昭和二十年八月二十日、敗戦の責を一身に背負って自らの命を断った長島秀男海軍技術中佐、寺尾博之海軍少尉の碑の写真を中心に掲載した。寺尾少尉のことについては国文叢書「いのちさゝげて」をお読みいただきたいが、戦後三十年、今日の日まで私たちを導いていたゞいた故人の御霊に、この小冊子を捧げるおもひをこめて収録させていたゞいたものである。

○ なほ表紙のデザインは従来と同じく、福岡において新進のデザイナーとして注目を浴びてゐる平山喜丈氏の御厚意によるもの、紙面をかりて御礼申し上げたいと思ふ。

○ 今夏の合宿は阿蘇内の牧の阿蘇ホテルプラザに決定、各地の学生諸君はその日を目ざして活発な運動を展開しつゝある。阿蘇の噴煙を望む合宿地に全国の友らの集ふその日を偲びつゝ、編集の筆を擱く。

昭和五十六年三月

編集委員 山田輝彦

小柳陽太郎



社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	領価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A5判 三〇四頁	〒一、八〇〇円
憂国の光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B6判 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

書名	著者・編者	発行年月日	頁数	領価
古事記のいのち ―改訂版―	夜久正雄	四一・三・二五 (原・版) 四八・一・二一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 二四〇円
日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原暁一	四一・一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品

No.11	No.10	No.9	No.8	No.7	No.6	No.5	No.4	No.3
続 — 日本精神史鈔 — 花山院とその系譜 —	歐米名著邦訳 (明治) 集 — 文献資料集 —	歴史と人生観 — マルクス主義の超克 —	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁 一	小田村寅二郎編	川井 修 治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚 一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 二四〇円	〒六〇〇円 二四〇円	〒七二〇円 二四〇円	〒七八〇円 二四〇円	〒七八〇円 二四〇円	〒六二〇円 二四〇円	〒六〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 二四〇円

No.20	No.19	No.18	No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12
続いのちささげて —戦中学徒・遺文遺詠抄—	いのちささげて —戦中学徒・遺文遺詠抄—	明治天皇御集研究	日本における マルクス主義批判論集	国史の地熱 —聖徳太子と楠氏の精神—	白村江の戦 —七世紀・東アジアの動乱—	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	短歌のあゆみ —続「短歌のすすめ」—	短歌のすすめ
国民文化研究会編	国民文化研究会編	三井甲之著	戸田義雄編	桑原 暁 一	夜久正雄	桑原暁一編	山夜田久輝正彦雄	山夜田久輝正彦雄
五四・四・二〇	五三・二・一五	五二・二・一〇	五一・三・一〇	四九・一〇・二五	四九・一・一〇	四八・二・一〇	四六・一二・一	四六・四・一
四二一頁	四四九頁	三五四頁	三二〇頁	二七九頁	二八九頁	三二八頁	三一六頁	三〇九頁
〒九〇〇円 二四〇円	〒九〇〇円 二四〇円	〒七〇〇円 二四〇円	〒七〇〇円 二四〇円	〒七〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 二四〇円	〒三五〇円 二四〇円	〒六〇〇円 二四〇円

4	3	(2)	2	1	回数
阿蘇 (一六〇名)	佐賀 (七二名)	岡山	福岡 (二二七名)	霧島 (九二名)	開催地 (人員)
34	33	32	31	30	年
国民同胞感の探求	民族の明日を求めて	民族復興の根底を培うもの	民族自立のために	混迷の時代に指標を求めて	書名
花田大五郎・中山優 野口恒樹	勝部真長・木下彪 森三十郎	高木尚一・石村暢五郎 木下彪	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	主要講師
B6判 三六五頁	新書判 二五〇頁	新書判 一三三頁	A5判 五三頁	A5判 八八頁	版・頁数
〒五〇〇円 四〇〇円	〒二〇〇円 三〇〇円	〒一〇〇円 二〇〇円	〒五〇〇円 二〇〇円	〒一五〇円 三〇〇円	定価

C 「合宿教室」レポート

No.22	No.21
とっちゃん先生の 国語教室 —桑原暁一・遺稿から—	社会主義理論との戦い —山本勝市博士論文選集—
国民文化研究会編	加納祐蔵
五六・一・二〇	五五・二・一
一七二頁	四〇七頁
〒四八〇円 三〇〇円	〒九〇〇円 二〇〇円



13	12	11	10	9	8	7	6	5
霧島 (二五三名)	阿蘇 (三三六名)	雲仙 (二四〇名)	別府・城島 (二二五名)	桜島 (二〇二名)	雲仙 (二〇二名)	阿蘇 (二一五名)	雲仙 (二〇八名)	雲仙 (二〇〇名)
43	42	41	40	39	38	37	36	35
日本への回帰 — 第四集 —	日本への回帰 — 第三集 —	日本への回帰 — 第二集 —	日本への回帰 — 第一集 —	新しい学風を興すために — 第三集 —	新しい学風を興すために — 第二集 —	新しい学風を興すために — 第一集 —	続々国民同胞感の探求	続々国民同胞感の探求
木内竹山 信胤・道雄・高谷 覚蔵	木内房雄・太田耕造 信胤・山本勝市	戸川恆存・木内信胤	岡内信胤・花見達二	木内秀雄・広田洋二 信胤	竹山道雄・木内信胤 木下広居	福田恆存・木内信胤 黒岩一郎	小林秀雄・木内信胤 津下正章	木内信胤・花田大五郎 佐藤慎一郎
新書判 三二四頁	新書判 三〇七頁	新書判 三二〇頁	新書判 二九五頁	新書判 二九八頁	新書判 二九八頁	新書判 二四八頁	B6判 三二五頁	B6判 四三三頁
〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒二〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 四〇〇円	〒五六〇円 四〇〇円

22	21	20	19	18	17	16	15	14
雲 (三三二名) 仙	佐世保 (三七二名)	阿蘇 (四三五名)	霧島 (五二八名)	雲仙 (四三三名)	阿蘇 (四〇二名)	霧島 (三〇二名)	雲仙 (四九一名)	阿蘇 (四〇三名)
52	51	50	49	48	47	46	45	44
日本への回帰―第十三集―	日本への回帰―第十二集―	日本への回帰―第十一集―	日本への回帰―第十集―	日本への回帰―第九集―	日本への回帰―第八集―	日本への回帰―第七集―	日本への回帰―第六集―	日本への回帰―第五集―
木内 信胤・衛藤 藩吉	木内 信胤・村松 剛	木内 信胤・福田 恆存	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・村松 剛	山本 信胤・胡 蘭 成	木内 信胤・戸田 義雄	小林 秀雄・木内 信胤	岡下 道雄・木内 信胤
新書判 三三二頁	新書判 二八五頁	新書判 三二五頁	新書判 三〇六頁	新書判 二八九頁	新書判 三〇六頁	新書判 三二二頁	新書判 二六五頁	新書判 二九五頁
〒五〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 二四〇円	〒五〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円	〒三〇〇円 二四〇円

24	霧島 (二六八名)	54	日本への回帰―第十五集―	木内 信胤・高山 岩男	新書判 二九〇頁	五〇〇円 二四〇円
23	阿蘇 (四四〇名)	53	日本への回帰―第十四集―	小林 秀雄・木内 信胤	新書判 三三七頁	五〇〇円 二四〇円

(国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行)

D その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
歌よみに与ふる書・他四編	正岡子規 (国民文化研究会発行)	新書判 一二二頁	〒二四〇〇円 二五〇〇円
今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論	三井 甲之 (斑鳩会発行)	新書判 一五七頁	〒四〇〇円 二四〇〇円
明治・大正・昭和 『謹選 詔勅集』	(斑鳩会発行)	新書判 八五頁	〒二四〇〇円 二三〇〇円
式典曲「神州不滅」 行進曲「進めこのみち」	三井 甲之 信時 甲之 ―日本学生協会の歌― 深澤 作詞 ―作曲	A5判 各四頁	各一〇〇円 各一七〇円

E 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
新輯 日本思想の系譜 (上・下) — 文献資料集 —	小田村寅二郎編 (時事通信社)	A 5判 (上) 八五七頁 (下) 九一二頁	上・下各 三、〇〇〇円
日本思想の源流 — 歴代天皇を中心に —	小田村寅二郎 (日本教文社)	四六判 三〇五頁	八五〇円
THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書第1、「古事記のこゝち」の翻訳)	(訳者) G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTURE RAL STUDIES]	B 6判 二〇八頁	
歴代天皇の御歌 — 初代から今上天陛下まで二千首 —	小田村寅二郎 柳陽太郎 (日本教文社)	四六判 四三八頁	一、七〇〇円
歌人・今上天皇 (増補改訂)	夜久正雄 (日本教文社)	四六判 三三三頁	一、五〇〇円
日本の感性	戸田義雄 (日本教文社)	四六判 三四六頁	一、二〇〇円
昭和史に刻むわれらが道統	小田村寅二郎 (日本教文社)	四六判 三一三頁	一、三〇〇円

F 月刊誌

<p>誌名</p>	<p>月刊「国民同胞」</p>
<p>「国民同胞」合本 第一卷 第二卷 第三卷 第四卷</p>	<p>昭和三十六年十一月創刊 昭和五十六年三月現在 二二三三號</p>
<p>版・頁數</p>	<p>B 5 八頁判</p>
<p>各卷四〇〇頁</p>	<p>定價</p>
<p>各卷 二、〇〇〇円 (含送料) — 殘部僅少 —</p>	<p>年間一、五〇〇円 共</p>

——日本への回帰——  
(第16集)

昭和五十六年三月二十三日発行

定価 五〇〇円

〒 二四〇円

編者

大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅二郎

発行所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七—一〇—一八柳瀬ビル

振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします



